

---

# 弥生ともう一つの世界

星原ルナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

弥生ともう一つの世界

### 【Nコード】

N6409W

### 【作者名】

星原ルナ

### 【あらすじ】

シャルロットとの戦いから数十日過ぎ、まもなく夏休みが終わるごろ、一人の少女に出会う。少女は出会って突然倒れるが、久しぶりの学校にその少女が転校してきて……。睦月の故郷やチェリーの父親など少しずつ「もう一つの世界」の存在が明らかになっていく。弥生と夢石の続編。かなり字数が増えます。

## スリジエと姉の死の通達

少女は待っていた。姉が必ず帰ってくるのを。

少女の名はスリジエ・ムーン。南の海スウド・メールにある人魚の国の第二王女。

姉はチェリー・ムーンといい、この南の海にある人魚の国の次期女王となる第一王女である。

部屋で読書するスリジエの頭の中に、太陽の光が海の中に入るかのように姉の顔が映った。

空が朝日で赤く染まる早朝の七時ごろのこと。

「チェリーお姉様……」

嘆くかのごとくつぶやく独り言。数ヶ月も会っていないという寂しさが泡のようにこみ上げる。

スリジエが手に持っている小説は姉からもらった宝物だ。読み終えては何度も読み返す。

そんな行為が日に日に何回も繰り返されるようになった。

チェリーお姉さま、お元氣かしら。

ふと、懐かしさが姉との思い出と共によみがえる。

あの頃は楽しかったな。

あの頃は父が暴力振るうこともなかったし、母も生きて姉とも一緒に遊べて幸せだった。

スリジエの目にうつすらと涙が浮かぶ。

あのまま時が止まればよかったのに。そうすれば……。記憶を呼び覚ますかのようにまぶたを閉じた。

そう、あれは私が小さかった頃。人間で言えば大体三歳ぐらいだろうか。

「チエリーおねえさまあっ！」

何も考えず、ただ姉にすがり付いていたあの時代が今は恋しい。

当時は義理の父親である国王ではなく、実の父親と母親、姉と私とで城に暮らしていた。

母親はどこかでつながっているという『もう一つの世界』を研究していた第一人者で、それを発見したのも母親である。

一方で、父親は『世界を支配する』ということに夢中だったが、それほど現在のように荒れてはいなかった。ただ純粹に『興味がある』として映っていたからだ。

姉は人間で言えば八歳。いずれ南の国をすべる王女として民から期待され愛されていた存在だった。

何をして姉はすべて完璧でなんでも出来た。姉に出来ないことは無かったほど。

でも、姉は自分は完璧などと思ってはいなかった。

「スリジエ。いい？」

なんでも完璧に上手にやろうとするのじゃなくて、やろうとする本人の気持ちが一番大事なのよ。

だからあなたも大きくなったら、

自分の気持ちに正直になれる人魚……いえ王女になるのよ」

姉に教わった唯一の言葉。

自分に正直になれ。

自分自身に嘘をついても自分が苦しいだけだと。

どんなときでも、どんな状況でも、

自分に嘘をつくような真似はするな。

そう、教えこまれた。

「チェリーおねえさまあ」

でも、当時の私にはその言葉は難しく……、

「どうして、うそをついちゃだめなの？」

姉に直接聞いてみたのである。

けれど姉は答えてはくれなかった。すべてわかってるかのように。顔には意味ありげな顔で、

「そのうちわかる」

と言ってるかのようにだった。

「スリジエ」

「なあに？ チェリーおねえさま？」

姉はそんな私を見つめると母親のような顔つきで微笑む。

「一緒に遊ぼうか」

その言葉が一緒に遊ぶ合図だった。唯一、姉と一緒に遊べる時間。

広いお城でやったかくれんぼ。

母親に怒られても続けた追いかけっこ。

こっそり隠れてやったつまみ食い。

どれも思い出のある大切な記憶たち。

けれど。

いつからだろうか。それが崩壊し、家族がばらになっ  
ていったのは。

それだけはわからなかった。今でも理解はしていない。理解したくない。

「あの頃が一番幸せだったなあ……」

現実に戻れるかのごとく目を開く。

スリジエが姉との思い出に浸っているときだった。

「ス、スリジエ王女さまぁー！！ た、たたたた、大変ですうー！」  
ボタンと荒々しく開かれる部屋の扉。

やってきたのはスリジエに使える専属の使用人の男。

スリジエは使用人がノックもせずに入ってきた事を不快に感じ取る。

「ミラン。一体何事？ 部屋に入るときは必ずノックをしてからっていつも言ってるはずでしょ！」

声を張り上げて怒鳴りつけた。

「いつもそう！ 私が体が弱いからっていい気になって！ お気楽でいいわね！ ミランは！」

読んでいた小説を雑に閉じるスリジエを目にしたミランは、

「そつ、それはスリジエ王女様の思い込みです！ そんなことよりも……」

静かにスリジエに歩み寄って小さくささやいた。

「チェリー王女様が……お亡くなりになられました」

その言葉を聞いたスリジエはとたんに頭の中が真っ白に変わった。

チェリーお姉様が、亡くなった……？

嘘でしょう？

あの、完璧で誰にも負けることはなかった無敵のチェリーお姉さまが……死んだ。

約束したのに。必ず帰ってくるって。一緒に海の世界を回るって。まるで天と地がひっくり返ったようだった。

ショックというより、信じられないという思いが瞬時に現れた。

「チェリー王女様はその日、春野弥生とかいう海棠町に住んでいる少女と戦っていた最中でして」

ミランが状況を説明するも耳には入ってこない。むしろ、受け付けなかった。

「その時、一つの氷の矢がチェリー王女様にめがけて飛んできたようで」

ミランはいつの間にか手に持っている報告書を目を通すようにパラパラとめくる。

「そのまま腹部に直撃して亡くなったと、報告書には書いてあります」

氷の矢がチェリーお姉様に直撃。

信じたくはないけど、ほんとに死んだのね。チェリーお姉様は。

スリジエの目に大粒の雫がしたたるかのごとくあふれ出る。

「そういえば……チェリー王女様が亡くなった時、

一緒に戦っていた春野弥生が駆けつけてきたとか書いてありますね。

どうせ、でたらめでしょうけど……ってスリジエ王女様!？」

大粒の涙を流すスリジエに驚きの声を出す。

「ど、どどど、どうされました!? なにか気に障るようなことでもありましたか!？」

「いえ……チェリーお姉様がほんとに亡くなったのだと思ったら急に涙が……」

スリジエは手で涙をぬぐう。

「別にあなたのために泣いてるわけじゃないからね!」

ミランに指を突き付けるスリジエに、自然と口元を緩めたミラン。  
「わかってますよ。スリジエ王女様が誰よりもチェリー王女様の事を思っているかを」

「ミラン……」

「スリジエ王女様は自分に素直になっただけでいいと思います」

す」

ミランと同じように口元を緩みかけたスリジエだったが、すぐさま怒りの顔に変わった。

「っていうか、どうして私が身分の低い男に慰められなきゃいけないワケ!？」

スリジエの中にあるプライドが高い性格と短気な性格が現れた。

「しかもミランに！ おかしいでしょう！ もっといい男に慰めてもらいたいのに！」

「それでこそ、スリジエ王女様です！ そんなところはチェリー王女様にそっくり！」

「……それ、ほめているの？」

複雑そうに眉間にしわをよせてミランをまじまじと見つめる。

「私のこと、なめてるでしょ？」

ミランは慌てて横に首を振った。

「い、いえいえっ！ そんなことありませんよ！ あるわけないじゃないですか！」

「そうよね。ミランは私よりも基本的にチェリーお姉様派だから、私なんか興味ないのね」

「誤解ですよ」

「別にいいわ。ミランのような男、興味がないもの」

スリジエがおかしそうに微笑んだ。

「そういえば、さっき春野弥生がどうのこうのって言ってなかったかしら？」

「はい。そうなんですよ。なぜか、一緒に戦っていた春野弥生が駆けつけてきたらしく……」

「春野弥生が？ というか、その春野弥生とかいう女、一体何者なわけ？」

「さあ？ 詳しいことはさっぱり……」

そこまでは聞いていないといわんばかりの顔で首をかしげるミラン。



春野弥生……。

一体何者なのだろうか。何故チェリーお姉様に駆け寄ったりなどとしたのか。

自分と戦った相手なんかに。おかしな女。

そんな女なんかに私が負けるはずがないけど。

正直、そんな女なんかに自分が負けるなどという事実を信じたくないという

スリジエのプライドが許したくないだけなのだが。

もしかして、

チェリーお姉様の仇というのはその春野弥生？

スリジエの頭の中にそんな考えがめぐり始める。

「スリジエ……王女様？」

ミランが突然スリジエが黙り込んだため、心配になって声をかけた。

しかし、考えるのに夢中になっているため無反応。

やっぱり、考えてもみても敵に駆け寄るなんて行為、どうみてもおかしい。

ミランが氷の矢が飛んできたって言うていたし、駆け寄るってことは何かをするために近づいたって事ね！

って事はやっぱりチェリーお姉様を殺したのは、春野弥生なのね！  
そう思ったとたんにふつふつと怒りがこみ上げ始めた。

自分勝手な行為でチェリーお姉様を殺すなんて！ チェリーお姉様をなんだと思っているの！？

許さない！ 絶対春野弥生を許さない！ 絶対この手で倒してやるわ！！

「ス、スリジエ王女様！ まず落ち着いてください！」

今度は怒りの顔に豹変したスリジエを眺めて不安になったんだろ  
う。

「お身体に影響が出ます！ それ以上興奮すれば倒れてしまいます！」

ミランが必死にスリジエをなだめようと話しかける。  
案の定、スリジエがごぼごぼと苦しそうに咳き込む。  
そこにタイミングよく三人の執事が扉をノックしてから入ってくる。三人とも長身だ。

その一人の黒髪の執事が淡々としゃべる。

「スリジエ王女様。朝食の用意が出来ましたので、お呼びにまいりました」

「お前らはいいいよなあ……」

何も知らない執事達を横目でちら見するのはミランである。その表情はどこか苛立っているようにもうかがえる。

だが、当のスリジエにはそんなことは興味がわからない。

「決めたわっ！！ 私、チェリーお姉様の仇をとるわ！」

スリジエの突然の唐突な発言に一同口を開けたまま理解が出来ないというような顔を始める。

一番最初に口を開いたのは黒髪の執事だ。

「どうなさいましたか？ スリジエ王女様」

「どうもこうもないわ！ 大切なチェリーお姉様を殺した今から春野弥生を倒しに行こうと思っているの」

その発言を耳にした直後、一同目を見開いて後ずさりをした。

「い、今……から、ですか？」

「そうよ？」

スリジエはあっさり認める。

黒髪の執事が悲しげな目で話す。

「……さすがに無茶すぎます。今やっと、体力が回復したばかりというのに」

「今行動する以外に何があるの？ 自分が思ったことは素直に従うのが常識よ」

見下したような発言だが、嘘偽りはない。スリジエの本心だ。

「大切な姉を殺された上、何もしないでただただ過ごすという事実  
に飽き飽きなの。」

早くそんな状況から抜け出して、姉の仇をとりたいの!!」

ミランがおどおどしながら口を挟む。

「で、ですが、そのお身体では長くは持ちません。しかも、体が体  
だとなおさら……」

「それでも行くわ! 止めたって無駄だから!」

声を張り上げると、立ち上がる。

「どうしても止めるっていうなら、この城から出て行くから!」

スリジエはそのままクローゼットに向かい身支度を始めた。どう  
やら本気で出て行くらしい。

身支度を終わると、荷物を持ってそのまま勢いよく飛び出してし  
まう。

「ス、スリジエ王女様っ……」

ミランはその後ろ姿を見つめることしか出来なかった。

\*

南の海にあるとある洞窟でのこと。

「さて………これから先、どうするかね?」

一人の老人が複数の仲間を見渡す。

集まっていたのはこの南の海を住居とする黒の人魚族たち。それ  
も幹部と呼ばれる身分の高いもの達の秘密の集まり。

集まったわけ。それは春野弥生の持つ『夢石』に関する会議を開  
くためだ。

自分らが生み出した夢石を奪うための道具であるシャルロットは  
見事に弥生に倒されてしまったのだ。

しかも肝心の夢石は粉々砕け、壊れる始末。当初予定していた計

画より大幅ずれてしまう狂い様。

「どうするも何も、どうしようもありませんよ。

夢石を作るのに人魚一匹必要なんですよ？　そう簡単にはいきません」

その老人の問いかけにあきらめた顔で首を振る中年くらいの男。

黒の人魚族は自分達の正体がばれるのを恐れ、フード付きの全身黒ずくめの格好が当たり前。

薄暗い洞窟にいれば、正体がばれることはまずないだろう。

「かと言って何もしないまま、計画が無駄になるようなことはしたくない。

わざわざせつかく、粉々になった以前の夢石を集めてきたのに」  
険しい顔をするのはやせ細った男。どうやらめがねをかけているよう。

「大丈夫だ。心配ない。いけにえの人魚はすでに用意はしてある」  
すべてわかつているかのような目を見せる老人。表情はどこか自信ありげだ。

「それに、私らには無敵の魔法がある。問題は無用じゃ。それを使って、夢石を復元させるのだ」

老人の口元にかすかに笑みが浮かんだ。

## スリジエと弥生、対照的な二人

「やっと、着いたわね……」

スリジエは深く呼吸を整えると岸に上り終え、朝の太陽が目に入る。白波が立ち海につけた脚が海水に掛かり、真上にはくぼんだようにそびえる岩肌。ここにいれば隠れ家になりそうな場所である。

ここはおそらく海堂町の海岸辺りだろうか。右に視線を傾け、遠くに見えるのが浜辺だろう。

スリジエの目の前にはバンドウイルカが悲しそうな鳴き声を鳴いてスリジエを見つめる。

「ありがとう。重かったでしょう？　こんな私をここまで運んでくれて」

イルカに向かって微笑むスリジエにそのイルカはスリジエの頭の中に語りかけた。

『スリジエ王女様。ほんとにこれでよろしいのですか？』

どこかさびしそうな声。やはり心配しているのだろう。もはやギリギリのこの身体がいつまで保てるかを。それに答えるかのような潮風。まるで危険だと知らせるかのようなだった。

『やはり危険すぎます。そんなお身体で仇を見つけるなど……』

それはわかってる。自分でも危険なことだってことは。

スリジエは小さく唇を噛み、憎しみの感情を押し殺す。

でも、一度決めたことを覆すなんてことは出来ない。チェリーお姉様の意思を貫くまでは。絶対に。

「ええ。これでいいの。チェリーお姉様の仇を討つまではあの城には戻らない」

姉のために思うスリジエの感情があらわになったときの表情を見せた。

さらにスリジエは「それに……」と付け加え、

「自分にうそつくなんて事、私のプライドが許せないの。心配して

くれてうれしいけど、もう後戻りはできないの」  
きっぱりと断言する。

その言葉に、

『そう……ですか』

イルカはさびしい吐息を漏らした。

「ほんとにありがとう。あなたがここまで連れてってくれたから、私が泳ぐ手間が省けたの。体力を減らせずにすんだの。感謝してるわ」

『スリジエ王女様……』

「さあ、早くお行きなさい。またあいつらに見つかって捕まると厄介だわ」

イルカは『でも……』とつぶやきためらっている。

「行きなさい！ 早く！」

スリジエのせかしにびくつと反射的に反応すると、イルカはわびしそうにスリジエを見やる。再びためらうがスリジエの言葉に逆らう事も出来ず海の中にもぐり去っていく。

「ありがとう……」

独り言のようにつぶやくと身体を光らせ、人魚の体から人間の体へと変化させる。格好はアンダーにリボンで止めたワンピースにデニムのレギンス。そして歩きやすいように靴はスニーカーにしてある。大きなつばのある白い帽子をかぶり日焼けを阻止する。スリジエの体は長時間紫外線や太陽に当たると体そのものがひからびてしまふのだ。そのため日焼け傘も欠かせない。

優雅に立ち上がると浜辺を目指して歩き始める。

まずは情報を集めなければ。情報なくて行動は出来ない。まずはある程度情報を集めてから仇を討たないと。

そう思っただけ歩いてみると思ったほど人がいない。やっぱりこんな朝早く人はいないか……。

まあ、地道に行きましょ。太陽が昇っている海を眺めながら前に進む。

その時、人の声が耳に入る。二人組だ。どうやら男女の二人組だ。そう考えるとカップルか。

カップルを見ていると腹が立って来る。自分には彼氏などいないのに、他の女にはどうして彼氏が出来るのだ。それが納得がいかない！

どうせ、人前でいちやつくにだろう。そんなやつらに話を聞いてもろくなことしか返ってこない。それならいっそ、無視して通りすぎた方がマシだ。

そう決めると、やってきたカップルの横を通り過ぎようとした。

「ねえねえ。この前、ここで見たってほんとのおく？」

「ほんとだつて。ほんとに見たんだよ。人魚を！」

カップルの男性は得意げに話す。

人魚を見たですって？

スリジエは『人魚』というワードが出てきたのを耳にして進めていた脚を止める。

カップルの男性はスリジエに気づかず話を続けた。

「数日前にこの海に来たときのことなんだけどよく、ちょうど海を眺めていたら見たんだよ！」

「見たつて？」

「陸に上がる人魚を！」

「えく？ ホントにいく？」

カップルの女性は疑いの目で男性を覗き込む。

「ほんとだつて！ その人魚が人間に変わる姿も見たんだつて！」

「嘘だよ。絶対。この時代にいるわけないよ！」

「嘘じゃねえーって！ 嘘だと思うならその目で確かめればいいじゃない」

カップルの話を盗み聞き、考え始める。

確か、春野弥生はあの北の海の人魚国の王女の生まれ変わりと聞いた。そして最近、力が目覚めて本来の人魚の姿になれることもミランから手紙に事細かに書かれてあった。もしその人魚が春野弥生

つてことはないだろうか？ 人魚だなんてめつたにしているものではないし、もつとも滅んだ北の海の人魚国の人魚だとなおさらだ。それがもし春野弥生であれば話を聞いておいた方がこしたことはない。もしそれが春野弥生でなくても北の海の人魚国の人魚の情報として集められるだろうし、どの道あのカップルに話は聞くだけ聞いておこう。

カップルに話を聞くのは納得がいかないスリジエだが一度決めたことはくつがえさないため実行に移す。

「ねえ……そのあなたたち。ちよつと、いいかしら？」

振り返ったカップルはスリジエをじろりと警戒するように見つめ、  
「なんだよ。てめえ。なんか用かよ」

とつぶやく。

「そう。あなたたちに用があるの」

スリジエの言葉にカップルの女性が反応を示す。

「用？ 何かあったっけ？ ねえ、敬君」

女性に語りかけるように敬君と呼ばれた男性は首をかしげた。

スリジエはその二人を無視して話を進める。

「さっきの人魚の話なんだけど」

男性がとぼけたように声に出す。

「さっきの話って？」

「そう。さっきの話よ」

スリジエはカップルに、にこりと笑顔を向ける。

「興味深くてつい盗み聞きしちゃったんだけど、詳しく教えてくれないかしら？」

三人を包むかのように風が通り抜けていった。



「ごめんね。葉月、睦月さん。わざわざよびだしたりなんかしちゃって」

そう言うのは春野弥生。歩くたびに栗色のツインテールが揺れる。海堂町にあるいちばん大きな図書館で個室がある一角を指して歩いていた。外は太陽が図書館を照らし、館内を暖める。

時刻は十時ごろ。夏休みが終わる最後の日である。夏休み最後の日とあって宿題を終わらせようとする小学生や中学生などで埋め尽くされていた。もちろん弥生も宿題を終わらせるために来ている。

実はあのシャルロットとの戦いが終わり、海堂町に戻ると日にちが随分経ってしまった。どうやら海の時間と海堂町の時間の流れが違っらしい。そのため、気づいたときには既に夏休み残り後二日になっていた。ほとんど宿題をやっていたなかった弥生は徹夜続きで宿題をやったが、全く間に合わずじまい。結局、葉月と睦月の力を頼るしかほかがなかったのである。

「他に頼る人がいなくて……。自分でやったんだけど、宿題が多すぎて中々……」

はぁ……とため息を漏らす。

「ほんとと自分でやったほうがいいのに、他人任せになっちゃって」「ほんととよ全く……。本当なら家でのんびり過ごすはずだったのに」

そう愚痴をこぼすのは秋村葉月。弥生の親友であり、唯一弥生の幼少期時代を知る数少ない言わば幼馴染である。

「毎年、毎年、懲りないわねー。いつつもぎりぎりまで遊んで、夏休みが終わる間に宿題やり始めるのが弥生のいつものパターンなのよねー」

「俺は図書館に行きたいと思っていたからちょうどいいと思ったただけだ。別に気にしてなんかいない」

冷たい口調で話すのは冬川睦月。夏休みに海堂町にやってきたリア時代の恩人である。

三人は個室がある場所にやっては来るが、どこも満室で空いている場所がない。

それに葉月がだらけた声で言う。

「やっぱ、夏休みの最後の日とあっていっぱい入ってるわねー。あんまり空いている個室無さそうよ」

「やっぱ無理かぁ……。それもしょうがないか……」

弥生はしょんぼりと肩を落とす。

だが睦月が口を開けた。

「……いや、そうでもないらしい」

それに弥生と葉月が「へっ？」と声を上げる。

二人はまじまじと睦月の視線が向く方へ目を凝らすと、一部屋空ひとくやいている個室がある。

「個室が空いてる！」

うれしそうに目を輝かせる弥生。

「へえー。以外ね」

弥生とは対照的に冷静につぶやくのは葉月だ。どうやら個室が見つかって落ち込んでいる様子。

「入るか」

睦月がつぶやくのが耳に入ると、

「うん」

弥生と葉月はうなずいて個室に入っていく。

個室は約八畳ほどの広さ。白い長方形のテーブルが縦に置かれている。椅子もテーブルにあわせた白い椅子。それ以外は何も無い空間。あけたドアの数メートル前には外に抜け出せそうな窓。勉強するには最適の環境である。

「いい個室だね。空いてて良かった。ね、葉月」

「弥生、あんたが宿題するための個室なのにどうして私に質問してくるわけ？」

葉月の言葉に、はっと口をつぐむ弥生だが、

「で、でも宿題はなんとか一人でやってみるから、葉月は本でも読んでたら？」

と葉月に心配をかけないように逆に質問返す。

「私は本なんて興味ないっつーの！ 新聞の大安売りのスーパーの広告とかなら興味あるけど、あとは興味ないわよ！」

「葉月って、そんなのに興味持つなんて……主婦？」

ぽかんと口を開けて葉月を見つめる弥生に、すでに座っている睦月が声かけた。

「おい、春野。こんなことしてる場合じゃないだろ。そんなことしてる間にも時間はどんどん過ぎていくぞ」

「そうだった。宿題やらなきゃいけないんだった」

弥生が思い出したかのように手をたたくと睦月の向かい側の席に座る。葉月は睦月から二つ空けた、右側の席に座った。

ついいつものくせでおしゃべりしちゃったけど、今回は夏休みの宿題をやるために来たのすっかり忘れてた。危ない、危ない。

まだやっていない宿題持ってきたかばんの中からテーブルの上に出し筆記用具も一緒に取り出す。

教科は数学や理科など理数系の宿題が多い。

宿題を見た葉月が意外そうな顔を見せる。

「宿題、たったこれだけ？」

「……え、あ、うん。後の宿題は徹夜して終わらせたから。わからなかったのはこれだけ」

「これなら、早く終わりそうだな」

睦月がどこかうれしそうな声でつぶやいた。

弥生は睦月と葉月に教えてもらいながら宿題をやり始める。

「まずは……関数からだな」

そう睦月は言うつと宿題の冊子をぱらぱらめくった。

弥生が通う中学は三年は高校受験もあつてか、数学などはある程度進めて教えている。だが、弥生は比較的頭が弱い方なためかあまりついていけないのだ。

「か、関数……一番苦手だよ」

「大丈夫よ。覚えれば難しくはないんだから」

「葉月は頭がいいからいいだろうけど、私数学とか苦手だし」

「まあ、とにかくはじめぞ」

睦月はそんな弥生を気に留めることなく宿題をやり進めようとする。

いいなあ……睦月さんは。頭がよくて。

そう思ったとき、急に頭がガクンと揺れ力が抜けた。昨日から徹夜で宿題をやったから眠気が来たのだろう。今になって眠気がくるなんて。タイミングが悪すぎる。

首を振って眠気を飛ばし、さらに両手で頬をたたいて眠気をなくす。そして呼吸を整え、落ち着いて宿題が出来るように息を吸ったり吐いたりする。

不審に思った睦月が眉間にしわをよせて、

「春野、お前何やってるんだ……？」

弥生を怪訝そうに見つめる。

「な、なんでもないよっ！ 早く宿題やろっ！」

ごまかし笑いを浮かべながらシャーペンシルを手にとった。

いつも眠くなったときやっているのが睦月さんに変な目で見られてしまった。一生の恥だ。それならもっとトイレとかに行ったらいいにでもやっておいた方が良かった。

再び宿題と向き合う弥生だったが、またもや力が抜ける。

だ、だめ………ねちゃ、だめ………。

一瞬、弥生の視界が闇に包まれた。そのわずか数秒後。誰かが弥生を呼ぶ声が聞こえてくる。

「……野。………春野！ しっかりしろ！」

睦月が弥生を呼ぶ。その声にはっと目を覚ますと弥生を覗き込む睦月の顔が映った。

「ひゃあああああ！？ む、睦月さん！？ っていうか私何してたの！？」

弥生は回りを見渡し確認する。

「それはコッチのセリフよ！ まったく、今度は宿題中に寝るなんて何考えてるのよ！」

そんな弥生に腹を立てて憤慨させる葉月。

葉月と違って睦月はいたって冷静に問いかける。

「春野大丈夫か？　もしかしてお前、寝てないのか……？」

睦月の問いにドキツとするも、嘘はつけずに「うん」と答えてしまふ。

「ったく。どおりで……」

あきれた声で息を漏らす。でもその表情はどこか怒っているようにも感じる。

「とにかくお前は先に宿題終わらせたら寝ろ。宿題やらないで寝てるだけじゃ、時間の無駄だからな」

睦月はそういい残すと椅子に座り、弥生の宿題を手にとった。

……馬鹿だなあ。私って。

ついうたたねしてしまったことを後悔する。

葉月を怒らせるわ、睦月さんもあきれたように見えるけど内心怒っているし……。なんて事をしたのだろう。

弥生は深くため息をつく。と次の宿題を手に取り開こうとする。

その時、葉月と睦月と目が合ってしまうが二人とも視線を逸らし宿題を続けた。

ガンとショックで固まってしまう。

どうしよう……。

苦手な理科の宿題の冊子を取りながら問題を解き始める弥生だった。

\*

「なるほど……そういうことね」

今だ浜辺でカップルから話を聞いていたスリジエは真剣に耳を傾けていた。ようするに海にジョギングしに来たときにその人魚をみ

たということらしい。

「つまり、その人魚は何かを抱えているようにも見えた……と」

「そうそう！ 早い話、そういうことなんだよ！」

カップルの男性は胸をそらして自信満々の顔を見せる。だがその反対に女性は疑いの眼でちら見。

「ほんとの話し？ それえ？」

「ほんとだって！」

しかし、スリジエはカップルの話を聞いていくうちに違和感を抱き始める。

……なにかがおかしい。

確かに、人魚の話は嘘には思えない。けれども、完璧に出来すぎている。誰かが仕組んでるかのように。だから妙な違和感が生まれしてしまう。私の気のせいかしら？ それとも……。

いや、あいつらが仕組んでやっているとこのもありえる。あいつらは目的のために宝玉を手に入れようとどんな手でも使う奴らだ。もちろん、その宝玉の本来の持ち主である春野弥生にも手を出して宝玉とその権利を奪おうとする。油断は出来ない。だとすると、このカップルはわざと近づいたとも考えられるが……。

その時、カップルの男性が突然声をかけてきた。

「あの……、ちよつといいつすか？」

考え事をしていたところに声かけられたもので、スリジエは「へっ」と声をあげてしまう。

「な、何かしら？ 話はまだあつたかしら？」

「まあ、話というか、この町に伝わる人魚伝説の話も興味あるのかなあ〜と思って」

男性は頬をぽりぽりとかくと、

「実はこの町の海って昔、北の海の人魚国があつた場所なんすよ」さらっと口にする。

「なんですって！ それって本当なの！？」

その言葉に犬のように食いついた。

「じゃあ、ここに人魚の国があったというのは噂じゃなかったのね！？」

スリジエの気迫に後ずさりしながら男性が答える。

「は、はい……噂ではその人魚国の王女がまだいきているんじゃないかって広まっているし」

北の海の人魚国の王女！

その言葉と聞いたとたんに沸いていた疑問は飛び、確信にかわる。間違いない！ その王女こそ、探している春野弥生！ やっぱり春野弥生はこの町にいるのね！！

そうと決まれば、まずはこの町に伝わるといふ人魚の伝説を詳しく調べた方がいいわね。このカップルから聞いたのがデタラメだったら収集がつかないもの。自分に正直になる！ そう、やっぱり自分がこうと思ったものは行動に移さなくちゃね。

「その、人魚の伝説が詳しく存在している場所って、どこかないかしら？」

「それってやっぱ……」

「海堂図書館だよね〜」

「海堂図書館……それはどこにあるのかしら？ 地図書いてくれない？」

スリジエは持っていた紙の切れ端と万年筆を取り出すと、カップルの男性に手渡す。男性はさらっと書き上げ、スリジエに再び渡した。

「ありがとう。一応、助かったわ。これなら……」

スリジエの口元に笑みが浮かび上がったのだった。

## 春野弥生の誤算？

……全く、春野の奴は。

冬川睦月は図書館の個室で、弥生の宿題を見ながらため息をつく。午前十時十五分ごろのこと。

ため息の原因は春野弥生だ。自分の前で平気でうたたねしていたので、妙に腹が立つ。もちろん、本人は無意識でやってしまったのだろう。徹夜してここまで終わらせたという意思はほめてあげたいが、やるにしてももっと計画的にすることは出来ないのか？

弥生の宿題をパラパラと一通り目を通していく。

きちんとやってるんだな。自分で頭が悪いといっている割には自分がわかる範囲でほとんど埋めている。わからなくても一応答えは書いているので上出来といっちゃあ上出来だ。

だが、結局やるにしても計画的にやらなきゃ意味がない。もっと考えて行動してくれれば……。

ふと顔をあげた時に弥生と目が合った。どうせ問題がわからないとかだろう。自分ややるといっていたのだから弥生本人にやらせないで。

そう考えた睦月は目線を逸らす。目線をそらされショックで固まる弥生が目に入った。

全く、これしきのことでショックを受けるとは情けなさ過ぎる。

鍋が煮えくり返ったかのような怒りに襲われた。

その時、それと同時にシャルロットのことが思い出される。

黒の人魚族に夢石を奪うただけに生まれたシャルロット。ただ夢石を奪うために利用され、城と共に消えていった男。そういえば以前チェリーとかいう南の海の人魚国の王女の執事をしていたかいつていたな。

……全く、性格の悪い男だ。

再びため息をつく。



そういえば、春野は俺がシャルロットに操られたとき、助けに来てくれたんだっとな。

海の時間の流れは海堂町の時間の流れとは違い、遅く流れる。記憶を封印されていた弥生はそれに気づかず、それでもなお自分を助けに来てくれた。海堂町は時間の流れが速いため、海から上がったとき、数日や数週間も過ぎていたということがよく起こる。

だとすれば、俺を助けに行って俺と戻ったときもう時間がなくなっていたのかもしれないな。それで夏休みの宿題をやる暇がなくなってしまった。シャルロットは相手がいかなる状況でも目的のためならどこへでもやつてくる。弥生から聞いた話だと、シャルロットは弥生にちよくちよく夢石を奪いにやつてきていたようだから俺を操ったときも、弥生になにかしら招待状を送るなりして手段を選んでいたのかもしれない。

突如、睦月の手が止まった。

……なら、春野が夏休みの宿題をやる暇がなくなっただのは俺のせいだな。

目を曇らせ、口元がきゅつと結ばれる。

もし、俺がシャルロットに操られなかったら、海に入ることなく夏休みをすごせ、宿題もやり終えていたはず。昔の記憶も呼び覚ます事もなかった。

……言い過ぎだな。

シャルロットとの戦いで時間を費やしてしまったても、その遅れを取り戻そうと必死になって徹夜までして宿題をやっていた春野に厳しく当たりすぎた。いまさらになって気づくとは。

睦月の心に罪悪感が芽生え始めた。

弥生はちつとも悪くない。元はといえば、弥生であるリアを助けるためにシャルロットと手を組んでしまい、足を洗ったあともそのシャルロットに意識を操られ、結果弥生に助けに来てもらうハメになってしまった。自分がまいた種なのに。助けてくれた弥生を責めるなんて。本人は一生懸命やっているのに。

こんなことになるんだったら、早く終わらせてあげるためにアドバースかなんかやるだけでよかったな。

今からでも遅くは無いと弥生に謝ろうとするが、

「……………あつ……………」

声をあげるも言葉にならない。

いまさら謝って大丈夫なのか？ あいつ、けっこう怒って……いやショックを受けたりしてるんじゃないやあ……。

睦月の脳裏に迷いが出てしまい、ためらいがちになる。

その時顔をあげた時、ぱっちり弥生と目が合ってしまった。

二人は「あつ」と声を出してしまう。

弥生はしばらく睦月を眺めていたが、きまずそうに目を逸らす。それに対し睦月は平常心を装いながらも、後ろめたさを感じてしまつ。

これからどうすればいいんだ？

個室に気まずい雰囲気 flowed。

\*

終わらない……………どうしよう。

弥生はいまだ夏休みの宿題と対面していた。

すでに十時四十五分になろうとしている。

向かいの席に座る睦月と葉月の顔色をうかがいながら矢ついていたため全く進んでいないからである。原因は弥生本人が二人の前でうたたねをしてしまったからである。本人は寝不足だったため反射的な行動だが、それが厳しい二人の心を怒らせてしまったようなのだ。

そのためいつまた怒られないか、はらはらしながら手先を動かす。手先がぴたりと止まり、その代わりにため息が出る。

それはコツチのセリフよ！ まったく、今度は宿題中に寝るなんて何考えてるのよ！

とにかくお前は先に宿題終わらせたら寝ろ。宿題やらないで寝てるだけじゃ、時間の無駄だからな。

睦月と葉月の言葉が深く胸に突き刺さっていた。

悪気がなかったとはいえ、結果的に二人を怒らせてしまったのは確か。やってはいけないことをやってしまったというのはこの事なのだろうか。宿題をやり終えた後はどうやって二人と仲直りしようかなあ……。

傷ついた感情が抑えきれない時、睦月に声をかけられる。

「……なあ、春野。ちよつといいか？」

「えっ」

弥生は拍子抜けしたような声を出す。

まさか睦月に声をかけられるとは思いもしなかったため、一瞬頭の中が真っ白になる。

「どっ……、どう、したの??」

「あっ、いや、ちよつときになる所があつてな……」

「気になる所……?」

キョトンと尋ねる弥生に、

「実はここの答えなんだが……」

と睦月が手に持った冊子を弥生に見せ、詳しく説明していく。

「……だから、もうちよつと解き方を変えていったほうがいい」

「なるほど」。徹夜明けだったからそこまで頭が回らなかったよ」

弥生はごまかし笑いを浮かべた。

その弥生を見た睦月が気まずそうな顔を見せる。

……あれ？ 私、なにか気に障るようなことしたの？

睦月の表情に内心しどろもどろになり始めた。

だが突然、睦月が弥生に顔を近づける。

「春野」

「えっ、ええええええええ?」

弥生は反射的に肩をすばませた。それと同時に顔が火照る。

何、何！？ な、なにがおきるの！？ ま、まさか……キ、キス！？

突然の出来事のため、冷静に判断できていない。

睦月は弥生に向かって小声でささやく。

「春野、悪かったな」

「……………へっ？」

ぽかんと口を開けて固まっていたが、

「何か私、睦月さんにやった……かな？」

ようやくそれだけしゃべれる余裕が出来る。

その質問に睦月が少し視線を逸らしながらつぶやく。

「俺、お前の事情に気づかずお前を傷つけたこと、後悔していた。ほんとに悪かった」

「あ、そのことね……」

「結果的に春野を巻き込んで時間を削らせて、俺に責任があるんだ。全部」

「そ、そんなっ！ 睦月さんは悪くない！ む、睦月さんは最初の出会いも、海堂町で再びあったときも私を助けてくれた。私はそれだけで充分。だから、自分を責めないで」

「春野……ありがとう」

睦月はほっとしたような笑みを浮かべた。

睦月の笑みに弥生もつられて微笑む。

……睦月さんと仲直りできてよかった。

もう睦月の心に迷いはなかった。

\*

「お、終わったあゝ！！」

弥生は気持よさそうに伸びをする。

睦月と仲直りをしてからわずか十五分後、あっさりと夏休みの宿題が終了。いままで悩んで手が止まっていたのが嘘のようだ。もちろん、すべて睦月と葉月のおかげである。この二人なくして、宿題はなかなか終わらなかったからだ。

向かいの睦月と葉月にお礼を述べる。

「ありがとう。二人とも、ほんとに助かったよ」

椅子に座ったまま、頭を下げた。

それに睦月と葉月は

「……まあ、よかったな」

「やるだけやったから、疲れたわよ。ほんとに」

ぐったりとした表情でため息を漏らす。

さすがにほとんどの宿題を見てもらうだなんて、残酷なことをしたな。

「終わったが言わせてもらうが、もうちょっと計画的にやった方が効率がいい。夏休みが始まる前、計画を立てなかったのか？」

「あ、いや、立てたのは立てただけど、やろうとするとなぜかいろいろ邪魔が入ったりして中々進まなくて……そしたら結果的にこうなって……」

弥生の言葉に葉月が疑問をぶつける。

「いろいろ邪魔が入ったって、なにに邪魔されたっていうのよ？」

「えっ。い、いやあ……それはその……」

弥生は葉月の疑問に答えられず口ごもる。

まさか、魔物やシャルロットという男に邪魔されたなんて信じてくれるだろうか？ 難しいだろう。

「ほ、ほんとにいろいろ！ いろいろあったの！」

「いろいろねえ。とにかく、夏休みの宿題は早めに終わらせろっていつも言ってるじゃない。やるの遅すぎ」

もはやあきれることしか出来ない葉月。

「今年はとくに遅かったわね。一体何があったらこうなるのよ……」

その葉月の言葉に一瞬ぎくりとしながら、冷や汗をおでこにたらす弥生。

なにか二人にお礼がしたい……。

そう胸の中で思うが何をすれば検討がついていない。

「ね、ねえ！ なにか二人にお礼がしたいんだけど、何がいいかなっ？」

行き当たりばったりで尋ねてみた。

しかし。

「別にいらん。俺は図書館の本が気になっただけで、お礼なんかどうでもいい」

「弥生なんかにお礼をもらうくらいなら、とっくに家でのんびりしてるわよ」

と二人に断れてしまう。

どうしよう。あきらめようにも、あきらめきれない。

「で、でも！ 結局は私が頼んだんだし、やっぱりなにかお礼を……したいし………」

何をすればいいか思いついていないため、言葉につまづく。

ふと睦月が独り言のようにつぶやいた。

「なんか、のどが渴いてきたな」

ずっと宿題をやってきて水分が消耗したのか、のどがかわいてきたらしい。

その言葉を聞いて、ある提案を思いつく。

弥生は椅子から立ち上がり、その提案を二人にぶつけてみる。

「ね、ねえねえ！ もしよかったら、私が何か飲み物を買ってこようか？」

弥生の提案に二人が「え？」と声を出す。

「飲み物を……」

「買ってくる……？ 急にどうしたのよ、弥生」

口を開けたまま立ち上がった弥生を見上げる睦月と葉月。

「二人とも、そろそろのど渴いてきたんじゃない？」

「まあ……、人一倍宿題見ていたから、のどは渴いてきたな」

「確かに、なにか飲みたい気分ね……誰かさんのせいで」

「だったら！ 宿題を見てくれたお礼として、私が何か飲み物をおごるっていうのはどう？ それならいいでしょ？」

弥生が突然提案をしてきたので言葉をなくす睦月と葉月。

だが、すぐさま我に返り、

「まあ、飲み物を買ってもらうくらいなら……別にいいか」

「弥生のおごりとなれば、遠慮なくそうさせてもらおうかしら」

二人とも、あっさりその提案を承諾する。

「じゃ、二人とも何が飲みたい？」

睦月はそっけなく答える。

「普通にウーロン茶でいい」

「睦月さんはウーロン茶……と」

弥生はズボンのポケットから取り出した小さなメモ帳に書き記す。

「で、葉月は？ いつものあれにする？」

「そうね……いつものココナッツサイダーにするわ。下手に新しいドリンク飲んで痛い目あうよりマシだしね」

葉月のは覚えているのか、メモ帳には書かない。

「じゃ、さっそく買ってくるね。買ってすぐ飲んだほうが、のど潤うし」

「わかった」

「ま、せいぜい迷子にならないようにね。弥生」

「わ、わかってるよー！」

弥生はふくれっつらな顔を見ると、個室を後にした。

\*

……出ていったわね。

弥生が個室から出て行くのを見届けると、内心ほくそ笑んだ。  
同じく十一時ごろの個室では、葉月が立ち上がり睦月の隣の席に座る。

もちろん、理由はほかでもなく、睦月を自分のものし、自分を裏切った弥生を傷つける事。弥生が明らかに睦月に思いを寄せていることは鼻から知っている。なら、たとえ恋愛が鈍い弥生でも私が睦月とくつついたら、絶対何かしらの反応はするはず。そこに自分は弥生とは親友じゃないと告げれば、傷つきやすい弥生に大ダメージを受けさせられる。復讐が果たせるというわけだ。

「ねえ、睦月さん……で、いいわよね？」

葉月は自分の身体を睦月の腕に擦り付けるかのように寄っていた。突然葉月の表情が豹変したのに気づいた睦月が眉間のしわをよせる。

「なんだ……？ 急に寄ってきて」

「別にいいじゃない。減るもんじゃないんだし」

葉月は妖艶な笑みを浮かばせるとささやいた。

「……ねえ。弥生なんかやめて、私にしない？」

「は？ 一体何のことだ？」

睦月のわけがわからないといいいたそうな顔をのぞきこむと、

「弥生みたいな、馬鹿で性格の悪い女なんかよりも、私みたいな、知的で誰よりも睦月さんを思っている一途な女の方がよっぽどいいと思うんだけど」

弥生をあきらめろといわんばかりに話を持ちかけた。

さっきの弥生のうたたねで睦月さんは弥生に腹を立てていた。なら、話を持ちかけるなら今しかない！

睦月みたいな男に弥生は全く似合わない。睦月の隣をゲットするのは弥生ではなく、この葉月だ！

だがしかし。

「悪いが、そういうのはあまり興味ない。それと春野はお前の親友だろう？ なぜそんなに憎む。憎む必要あるのか？」



睦月にあっさりとふられた上に、逆に質問返しされてしまう。

しかし葉月は親友という言葉にぴくんと反応を示す。

「親友………私が？ ああ、弥生と？ 冗談じゃないわ。私を裏切った女なんか私の親友じゃないわ」

冗談じゃない。私の好きな男ばかりを奪っていくあんな女なんかと親友なんて、へどが出る。

「そんなことよりも、私と一緒にになったほうが幸せよ？ 男をとつかえひっかえ付き合うような弥生よりも」

睦月はしばらく黙り込んでいたが、口を開ける。

「悪い。俺は秋村と一緒ににはなれない。それに、春野は男をとつかえひっかえするような奴じゃない。純粋で明るい女の子だ。それは一番、秋村がわかつていることじゃないか」

「そう……駄目なの」

寂しそうにつぶやくが、別にあきらめたわけじゃない。

このまま引き下がるわけにはいかない！

「だったら、一度だけ私とデートしてくれない？」

葉月の決死の頼み綱。口で駄目なら今度は行動で落とさせてみせるといわんばかりの顔。

「一度デートしたら睦月さんのことはあきらめる。だから、少しでもいいからデートしてほしいの」

「そ………それは………」

睦月に迷いが現れた。

葉月はそれを見逃さなかった。

「一回だけ、デートするだけなんだから別に迷う事ないじゃない。私、睦月さんがデートに来てくれるの、楽しみにしてるのよ？」

あたかもデートをするのを肯定させたかのような言い方。そんな葉月に睦月は葉月の目的に気づく。

「なにを思ってたっているかは知らないが、春野を傷つけるために誘っているなら俺は受けられない」

睦月の言葉に目を見開く葉月。

睦月は話を続ける。

「もし、これ以上なにか企んでいるなら、たとえ秋村でも許さない」  
それだけ言い残すと立ち上がり個室から出て行ってしまった。  
一人きりになってしまった葉月に静寂が訪れると舌打ちする。

まさか睦月本人が計画に気づくなんて。さすが『もう一つの世界』  
の王子様ね。

でもこれも全部、あの女のせいよ！！

憤慨したように向かい側に移動すると弥生が座っていた椅子を蹴り出す。椅子は蹴られた拍子に倒れ、椅子が倒れ反発した音が響き渡る。

やっぱりあの女は私からなにもかも奪う気なのね！

あの時も！

あの時も！

あの時も！

弥生、私を本気怒らせた罪、思い知らせてあげるわ……。  
個室に葉月の高笑いが不気味に響いていた。

## 弥生、ある少女に出会う

暑い……暑すぎる。

弥生は図書館の一階の廊下ろうかを歩いている。睦月と葉月に夏休みを手伝った御礼として、飲み物を買ってあげるためにきた。自動販売機は駐車場にもあるが、そこまで遠すぎるため、近くである中庭の自動販売機で買うことにしたのである。

歩く途中で先ほどのことを思い出していた。

春野……ありがとう。

睦月の言葉から初めて聞いた感謝の言葉。

あの言葉が頭から離れない。まさか睦月さんがすべて自分のせいだと思っていたなんて知らなかった。元はといえば、夢石を持って逃げた自分がまいた種なんだから睦月さんは悪くないはずなのに。睦月さん、大丈夫かな。今でも自分だけの責任にしていけないかな。でも、睦月さんと仲直りできてよかった。あのまま仲直りできなかったらどうなっていた事か。

というより、声かけたのは睦月さんだし。自分が威張る事じゃないし。

そういえば、葉月、なんだか機嫌が悪かったなあ……。やっぱり私が計画的に夏休みの宿題をやらなかったせいかな？

実は葉月が弥生を憎んでいるなど本人は気づくはずも無い。

もし、いつものがなかったらどうしよう。どうやって葉月に謝ろう。

弥生は足を止め、しばし考える事わずか数秒。

……。

ま、その時はその時でなんとかなるよね。

一階の廊下を抜けると、一度外へと出て路地のような狭い一本道を歩く。生い茂った草が出迎えた中庭へと続く道。

だが、それはそれとして、ここの図書館の中庭はこうも複雑な場所に入り組んだ道になっているのだろう。着くまで体の中の水分が半分も抜けそうなくらい蒸し暑い。

その道を抜けると中庭に到着する。

着いたあー！

弥生が心の中で大絶叫。

着いた瞬間、弥生を通り抜けるかのような風が吹く。

その中庭には所狭しと日陰で休む人々。もはや日陰で休む場所はほばないと言っているほどの人数だ。その中にはベンチで本を読んだり、草が生えている地面で昼寝する姿も見えて取れる。

個室から中庭まで歩いただけなのに、妙な達成感が湧き出る。しかし、こうして立っているだけで汗がどんどん噴出していく。

やばい。早く飲み物買って個室に戻らなきゃ、先に自分が暑さで倒れてしまう。

数百メートル先にある図書館の壁に引っ付くように立つ自動販売機の姿。買ってくれる人を待っているかのようだ。

すぐ近くでよかった。

自動販売機まで歩くと弥生は驚愕する。

まさかのまさか。今日に限ってウーロン茶とコナッツサイダーが売り切れになっていた。夏休み最後の日で猛暑日とあって、飲み物を求める人が多かつたらしい。

どうしよう……ほんとにどうしよう。

口を半開きにしたまま顔面蒼白になる。がめんそうはく自分でもその場から体が動く事が出来ない。

睦月さんには……麦茶でもいいかな。

小銭を入れ麦茶のボタンを押すと、出てきた麦茶のペットボトルを取り出す。

葉月は……どうしようか。

葉月は低価格でしかも味も葉月好みの味のため気に入っているコナッツサイダー。それが売り切れとはさてどうしたものか。安く

てコナツツサイダーの味に似ているもの……………。

もう、それかサイダーにするか。ちょうど、特別特価で百円だし。いいよね。

再び小銭を入れると麦茶の同様に、ボタンを押して出てきたサイダーを取り出した。

ふと後ろを振り向くと弥生の後ろで、まだかまだかと待ちわびる人の行列。

「えっ。あつ。ご、ごめんなさい！ 失礼しました！」

弥生は逃げるかのようにその場から立ち去る。最初着いたときの位置に戻ると、木の陰を探す。

何時間も宿題と向き合っていたからどこかで休みたい。

でも、もう飲み物買ったし……………いまさら一休みすると、飲み物がぬるくなっちゃうし。

自分の勝手な判断で決めちゃっていいのかと悩む。

けど、少しだけ寝て体を休ませたいし、それに明日になったら学校が始まるし……………。

弥生は「学校」という言葉で引つかかる。

そういえば、明日から学校なんだよね。また、クラスのみんなに会えるんだ。

弥生の口元が緩む。

思ったんだけど、睦月さんはどの学校に行くのかな？ もしかして、私と同じ学校……………だった？ あわよくば、同じクラスになるかも？ もしそうになったら今まで一番楽しい学校生活になりそう！

ばああと弥生の目が星のように輝く。

そう思ったとき再び力が抜ける。個室と同じように睡魔が襲い始めたようだ。

ああ。どうしよう。ほんとに眠くなってきたやつた。

目をこすりつつ、やる気がどんどん飛んでいく。

やっぱ一休みしてから……………。

その時、睦月のある言葉が引き出される。

行動は計画的にするように！

その言葉で睡魔が消え、完全に目が覚める。

そうだ。私は睦月さんと葉月に飲み物を買ってあげるために、ここに来たんだ。私が一休みするために来たわけじゃない！

弥生は立ち上がり、ペットボトルを両手に持ってきた道を戻ろうとする。

しかし、弥生はよろける少女と肩をぶつけてしまう。しかもその少女はそのまま地面に倒れてしまう。

えっ？

振り返るも、何が起こったのか立ち往生するしかなかった。

\*

海堂町にある図書館に向かう歩道。

「ここはどこよ……」

スリジエは思い足取りで図書館に向かっていく最中である。浜辺にいたカップルから地図を元に歩いている。だが、その道は見たこともない箱のようなものが動き、一番嫌いな太陽が直に当たる。自分が一番住みたくない場所だ。しかもここは人間が数多く住まう場所。ビルという建物が数多く建てられている。なんだかやりづらいといったらありやしない。

なんだかんだ歩いていると、大きな茶色の建物が木の間から見え隠れする。

おそらくあれが、自分が目指している図書館だろう。

だが、見え隠れするということはまだまだ歩くということだろう。どれだけ浜辺から遠いのよ。その図書館というものは！

自分には時間がないのに。

全身で息をすると足を止める。

だが……自分には仇を討つまでの時間は残されているのだろうか。仇を討つ前に終わってしまうのでないだろうか。

きゅつと下口唇したくちびるを噛み、悔しさを滲ませた。

それでもスリジエはすぐさまを迷いを吹っ切らせる。

いや。それでもやるんだ。チェリーお姉様の死をそのままにしておかない。絶対チェリーお姉様の仇は自分が必ず討つ！ たえ、自分に時間がないとしても！

止めていた足を前に進め、図書館へ向かい歩き出す。

しばらく歩くと図書館の外観がだんだんはつきりと見えてくる。

「あれね……」

ぼつりと一言つぶやく。浜辺から歩き続けたため、その表情はぐったりと疲れきっていた。図書館の前まで来たところで立ち止まる。すぐ近くに体を休ませるのにはちょうどいいベンチがある。

「あれで一度体を休ませましょう」

ベンチまで歩くと腰掛けた。

つ、疲れたわ……。

深いため息をつく、空を見上げる。

私の体力がほとんど残ってないわ。これからどうしようかしら。

もちろん、目当ての図書館に入るわけだが、もうしばらくやすんでいないいけない。体を壊して倒れてしまいかねないからだ。だが、時間が残ってないというのも事実。急いで出来るだけの最低限のこととはしておかないとやばい。

やはり休むのはここまでにしておう。

スリジエはずっと立ち上がり、まだ回復していない足を動かしながら歩き出す。

入り口付近まで着くと、壁のトンネルのようなものがどこか続く道を見つける。

なにかありそうね。

興味がわいたのか、その中をくぐるかのように歩き中庭に出る。  
こ、ここは……？

見たこともない光景が目に入り、しばらく脳内が混乱におちいつてしまう。

ど、どこなの……？

立ち往生の中、中庭を歩き回ろうかと考える。

だ、だめよ……本来の目的は人魚伝説について調べる事よ……中庭を歩き回ることではないわ。

スリジエは来た道を引き返す。だが、すぐさま足を止め迷いが生じる。

でも……やっぱり……。

仇を討つのも大事だが、それより以前に自分が倒れたら元も子もない。

再び体の向きを変えたとき、脚の力が抜けその場にこけそうになる。だいぶ体力が消耗しているようだ。

しかも、目の前から少女がやってくる。このままだとぶつかるのは確実だろう。それだけはさけなければ。

そう思うが、体がいう事を聞くはずもなく案の定、少女と肩がぶつかってしまう。

かと思うと、体が傾くような感覚に陥る。

スリジエはそのまま意識を失った。

\*

……ど、どうしよう。実に困った。

いまだ中庭にいる弥生は目の前に倒れている少女によりそっていた。

数分前、個室に戻ろうとしたときのこと。



少女とぶつかってしまいあやまろうとしたとき、その少女がそのまま倒れてしまった。その場から立ち去ろうかとも思ったが、それはあまりにも無責任すぎるかと思い、何とかして木の下まで移動させたのだ。だが、そのあとがどうすればいいのか迷っている最中なのである。

しかし、迷っていても仕方が無い。声をかけてみるとか……。

よし！ 声をかけてみよう！

「だ、大丈夫……ですか？」

声はかけてみるも、当然のごとく返事は返ってこない。

どうすればいいのだろう。もう一度声をかけてみよう。

「も、もしもし。聞こえますかー？」

返ってくる音は皆無に等しい。

や、やっぱりこれってやばいんじゃないか……。きゅ、救急車を呼んで……いや、まず図書館の職員の方を呼んできてもらって……ああ

！ どうしよう！ 答えが見つからない！

その時、睦月の顔が浮かんた。その瞬間、あるひらめきが思いつく。

いつそのこと、睦月さんに一度相談してみるとかどうだろうか？ 自分勝手な判断でこの人を死なせたくないし、的確な判断で症状をよくしたいし。うん、そうしよう！

弥生はさっそくズボンから携帯電話を取り出し、睦月にかけてみた。耳の中に呼び出し音が入る。

トゥルルルルルッ！

出て……お願い、睦月さん。

トゥルルルルルッ！

呼び出し音が途切れ、代わりに睦月の声が響く。

「はい。もしもし。冬川ですが」

「えっと……あの、その……」

かけてはみたのはいいが、自分から睦月さんに電話かけたのは初めてだ。いざ話そうとするも頭のなかでこんがらって言葉が出て

こない。ほんとに、どっ、どうしよう。

「その声は……………春野か？」

「えっ、あ、うん。そうなの。じ、実は、睦月さんに相談したいことが……………」

「相談？ 何の相談だ」

「実は……………」

内心のあたふたを押し殺し、今までの経緯を睦月にことこまかに話す。飲み物を買ったときに少女とぶつかったことや、その少女がそのまま倒れたことなど、すべて。

「と、いう事なんだけど、どうしよう」

弥生は睦月の返答をうかがう。

睦月が少女について尋ねる。

「その倒れた女の子はどんな症状をしているか？」

「え？ どんな症状？ えーとね」

少女の顔を覗き込み、

「なんか汗を多く出してるよ。なんか脱水症状を起こしているみたいなの……………」

と答えた。

睦月は弥生の答えを待っていたかのように平然とつぶやく。

「そうか。おそらく、熱中症だろうな。その症状からすると」

「熱中症……………この子、熱中症なの？」

「ああ。おそらくな。一応、春野が日陰に移動させているから、それですこし様子を見ておけばいい。意識が回復するようなら、俺の飲み物をその子にあげて水分補給をさせるんだ」

「わかった」

「春野はその場から移動しないだろうから、今から俺もそっちに向かう」

「睦月さんも？」

「ああ。実際にこの目で症状をみないと確実に判断するのは難しい」「うん、わかった。待ってるね」

「ああ」

睦月との電話が途切れ、携帯をしまう。

睦月を待ちながら少女の様子をうかがう弥生だった。

## 弥生とまだ知らない嵐の予兆

……大丈夫かな？

弥生は一人の少女の顔を上から覗き込んでいた。午前中十一時半ごろのことだった。

図書館の中庭で倒れた少女の顔色をうかがってよりそっている最中なのである。

睦月に相談したとき、

「日陰に移動させ、首かわきの下を何か冷たいもので冷やしたら、しばらく様子みるように」

といわれたためだ。熱中症の人はそうやったほうがいいらしい。自分はそういう知識は持っていないので、どれがいいかはちんぷんかんぷんなのである。

顔色は良さそうだけど……………。

だが変わった様子はなく、あれからどれだけ経ったかはわからない。一時間くらいは経ったような気がする。

睦月さん、来てくれるかな？

うれしさもこみ上げるが、本当に来てくれるか不安もある。確かに、自分は睦月に想いを伝えた。伝えただけで、恋人同士かと聞かれたらはっきりと答えられない。

睦月さんが好きだといってくれたときは心臓が止まるくらいうれしかった。

ああ、自分はこのひとの隣にいてもいいんだって思った。

けど。

恋人なのかは自信がない。

完全に睦月の心境が理解できていないからだろう。  
時折、睦月さんの心の中がわからなくなる時があるから。

やっぱり、睦月さんと恋人なんて、理想が高すぎたのかなあ……。  
無意識にため息が漏れた。

……いや。今は睦月さんが来るの待つことだけに集中しよう。それ以外のことを考えるのは時間の無駄だ。

気合を入れなおしたら、再び少女の様子をうかがってみる。やはり顔色に変化が見られる様子はない。

変化……なし、か。

その時。

「おい、春野！」

聞き覚えのある声が耳に入る。周りを見渡し、声が聞こえる方へ耳を傾ける。

そして見覚えのある二人がこちらに向かっているのが目に入った。

「睦月さん……と、葉月！」

睦月が葉月と一緒にやってきたのは予想もしていなかった。そのため声がポリリウムが上がる。

すぐさまハツと口をつぐみ、隣の少女を横目で確認。目を覚ましてはいないようだ。

危ない……隣に人がいるの忘れてたよ。

「どうしたの。弥生。やばそうな感じの顔して」

心配になったのか、からかうように声をかけてきた。

「ううん、なんでもない……って「やばそうな感じの顔」って何!？」

「大丈夫か？ 春野も具合が悪いのか？」

「え？ いや！ な、何でもないの！ 大丈夫!！」

睦月にごまかし笑いを浮かべて答える弥生。

睦月は納得がいかなそうに、

「そ、そうか……」

とつぶやく。

「あ、そうだ。む、睦月さん。あの、さっきは電話ありがとう。睦月さんのおかげで助かった」

「そうか。それは良かった」

今度は安堵の表情を浮かべる睦月。

何も事情を知らない葉月が話に割り込んでくる。

「何があつたかは知らないけど、あんたが言っていた「お礼」とやらはどうなったのかしらー？」

「……あ！ そうだった！ すっかり忘れてた！」

葉月言葉で思い出し、飲み物を二人にそれぞれ手渡す。

「ありがとう」

「サンキューね、弥生」

二人はお礼を感情見せずにいう。

睦月が思い出したように弥生に質問する。

「そうだ。春野、倒れたつていうその子の様子はどうか？ 何か変わったことはあったか？」

その質問に見たこと、ありのままを答えた。

「ううん。別に変化はない。顔色はいいけど、具合がいいかまではちょっと……」

「そうか。わかった」

睦月は何事もなかったかのような顔を見せる。

そこに葉月の不満そうな声が漏れてきた。

「あーあ。二人でなにやら楽しそうよね。私一人だけ仲間はずれ？」

「葉月……どうしたの？」

弥生はきょとんと首をかしげる。

そんな弥生の顔に目が行くと葉月は愚痴をこぼす。

「どうしたもこうもないわよ。その子一体誰よー？」

「誰って、さあ……？」

「さあって、私は何も知らないでここにやってきたのよ？ それなのに、弥生と睦月さん二人で勝手に盛り上がられたら、さびしいじ

やない」

葉月が葉月がここまでの事情を知らないことに気づく。

そうだ。葉月はこの子のことまだ何も知らないんだった。

おそらくどうしてこの子がいるのかもわからないだろう。なにせ、睦月にしか話していないのだから。

睦月さんが来てくれたことに舞い上がってすっかり忘れていた。

やっぱり、葉月に話しておいたほうがいいよね。

葉月はみんなわいわい楽しむのが好きな性格で一人や仲間はずれなことはあまり好まない。

弥生の目が自然と少女の方に向かれる。

この子のこともいちから話しておいたほうが葉月は安心するだろう。話したら何か力になってくれるかもしれないし。人を手助けするのに人数は多いほうがいいよね。

よし！ 葉月に話そう！

「葉月、実はあのね……………」

弥生が葉月に声をかけようとしたとき。

弥生の隣からうめき声のようなものが聞こえてくる。

よく見ると、どうやら少女が意識を取り戻したらしい。

「よかった！ 気がついたんだね！」

安心して全身で息をする弥生だが、葉月に事情を説明することは頭から抜けてしまったのだった。

\*

時間を戻して十一時半ごろ。

スリジエの意識は夢の中へと引き寄せられていた。

スリジエのまぶたがゆっくり上げられる。地平線のように辺りは何もなく、障害も無い。上も下も右も左も新月のごとく真っ黒に染

まる暗闇の世界は、どこか恐怖が芽生えてくるほど恐ろしい。一人でここに居るのは少々辛すぎる。

ここは……どこかしら？

自分がなぜここに居るかわからない。この世界が何なのかも。

もしかしてここは………夢の中？

図書館とやらについて歩いたときから意識がない。もしかして……。

周りを見渡してみる。が、どこかしも真っ暗。一つだけわかるのは、自分の身体が闇を照らす光の代わりになっているということだけ。

再び辺りを見渡したとき、一筋の光が目の中に映りこむ。よく目を凝らすと人影のようだ。

だが。

あのシルエットは……？

スリジエには見覚えのある人。忘れるはずがない、スリジエが一番尊敬する人。

「チェリーお姉様！？ どうしてここに！？」

本音が声に出してしまう。

夢枕に立ってくれたのだろうか。それともただの幻だろうか。

それでもかまわない。少しでもチェリーお姉様とお話できるのなら。たとえ夢の中でもかまわない。

スリジエが走り出したとき、チェリーも後ろにバックするかのようには遠ざかっていく。

「待つて！ チェリーお姉様！」

手を伸ばしてみるも届くはずはない。

まだ、何も話していない。一言だけでいい。

チェリーお姉様とお話したい……。

スリジエの願いもむなしくチェリーは遠ざかっていき、闇の中に吞まれていった。

そんな……。



再び全身の力が抜けていくような感覚になる。

スリジエ……。

突然、声がどこからか話しかけてくるように聞こえてくる。

スリジエ……。

「チエ、チェリー……お姉さま？」

まぎれもなくチェリーの声。間違えるはずが無い。

スリジエが振り返ると光で包まれた体が透けているチェリーの姿があった。

「チェリーお姉様！」

スリジエ……久しぶりね。何日ぶりかしら。

「チェリーお姉さま……どうして、どうして死んだりなんか……」  
それしか言葉が出なかった。出てこなかった。目には涙でいっぱいだった。

スリジエ。自分を見失っちゃ駄目よ。

「え？ 自分を……見失う？」

スリジエは反射的に顔をあげる。

意味がわからなかった。どういうことだろう。

あなたが求めるものはもっと別にあるわ。真実からそむいちや駄目。すぐそこに真実が必ず眠っている。

ますます混乱しそうになる。それって、仇が自分が思っている人じゃなく、もっと別の……。

スリジエ。自分を見失わないように気をつけて。あと、『あいつ』がまもなくこの海堂町に……。

「チェリーお姉様！」

チェリーの体が足から崩れるように消えていくのわかる。

「待って！ まだお話したいことが……」

夢は残酷なものだ。肝心なところで夢の世界から引き離されていく。そう、肝心なところで。

スリジエの意識は再び現実世界に戻される事となった。

「ん……うつん………」

スリジエが目を開けると見知らぬ少女が顔を覗かせるように見つめていた。

「よかった！ 気がついたんだね！」

安心したような明るい少女の声。

声を聞いて場所が変わっていることに気がつき、はっとする。しかも、少女一人だけではなく、顔立ちが整ったスリジエ好みの少年、翡翠色した長い髪を一つにまとめ、自分と変わらないような胸を持つ美少女。

「こ、ここは一体………」

ただ独り言のように発する。

確か、自分は城からこの海棠町の浜辺に着いて、カップルから図書館の聞きだし、向かっていたはず。そして図書館にたどり着いて……そこまでは覚えてはいる。少し歩いて、そこで意識が……。

ああ。自分は倒れたのね。

倒れたということは、刻々と時間が迫ってきているということ。やばいわね。

そこにさっきの顔を覗かせていた少女が声をかけてきた。

「大丈夫……？ もしかして……まだ具合、悪いの？」

考え事に集中していたために反応が遅れてしまう。

「え？ あ、ああ。大丈夫よ。心配してくれてありがとう」

「そう？ 中庭で飲み物買ったら、あなたがやってきて、ぶつかったと思ったら急に倒れるからびっくりして……なんとかして知り合いの男の子に相談してここまで移動させてきたの」

「そう、なの……」

やはり、この中庭で倒れたのは間違いないらしい。

やっぱりこの『作られた人工の体』じゃ持たないのね。

せっかく、チェリーお姉様が復活してくれたのに。どうして自

分の体は言うこと聞いてくれないのだろうか。

やっぱり自分なんかが仇を見つけるなんぞ、無理があつたのだろうか？

勝手に城を飛び出して、勢いを付けすぎたのだろうか？

どちらにしてもがんばりすぎて無理をしたということ。

もう、あきらめようかしら？ 仇探しなんか。

その時、鮮明に蘇える夢の中で言つたチェリーの言葉。

あなたが求めるものはもつと別にあるわ。真実からそむいちや駄目。すぐそこに真実が必ず眠っている。

私が求めるものはもつと別にある……。

チェリーお姉様は昔から変わらないわね。

かすかにスリジエの口元が緩んだ。

だからこそ……だからこそ、やっぱりチェリーお姉様を殺した奴は許せない！ どんなにしても！

絶対仇を見つけて、見つけたら………私は、どうなるんだろうか。

仇のことを考えるあまり仇を取つたあとの事は考えていなかった。仇を取つてももう、私は生きてはいない。でも元々一度は死んでいくのだからしょうがないけど。

でもやっぱり、どうなってしまうのだろうか。私の体は。

しばし考えてみるが、なにも浮かばない。

考えてもしかたがないか。その時が来たら考える事にしよう。

スリジエは自分を凝視しながらしゃべる少女を横目にため息をつくのだった。

\*

十一時四十分になったときだった。

図書館の中庭では弥生が目を覚ました少女に声かけようか、タイミングをうかがっていた。

はつきりとした理由はない。ただ単に少女の具合が本当に良くないか確認したいだけなのだ。

「あ……」

声は出るも、少女はなにやら考え事をしているようで、声がかげづらい。

もう一度挑戦。

「あ、あのっ……」

言葉にはなつたが、声が小さすぎて少女の耳には届かない。

こ、今度こそ！

と、思ったとき、少女が難しい表情で空を見上げる。

具合でも悪いんだろうか？ やっぱりまだ熱中症が治っていないとか……。

心配になった弥生は少女に念のために聞いてみることにした。

「大丈夫……？ もしかして……まだ具合、悪いの？」

「え？ あ、ああ。大丈夫よ。心配してくれてありがとう」

「そう？ 中庭で飲み物買ってたら、あなたがやってきて、ぶつかったと思ったら急に倒れるからびっくりして……なんとかして知り合いの男の子に相談してここまで移動させてきたの」

「そう、なの……」

その表情はどこかさびしそうだ。この表情、睦月さんが見せる表情に似てる……。

やっぱりどこか悪いのかな？

少し経ったとき、ごほごほと咳き込むような音が響いた。

この咳はおそらく少女のものだろう。

「大丈夫！？ やっぱりどこか具合悪いの？ 悪いんだったら……」

弥生はそういつてみるも少女の方は、

「ほんとに大丈夫だから……心配してくれてありがとう」  
青ざめた顔で受け流す。

大丈夫、大丈夫ってそんな顔で大丈夫って言われても……。  
余計に不安が重なっていただけなのだが。

やっぱりしつかりとした病院に見せた方がいいかな？ いや、病院はお金かかるし、私はそこまでお金もっていないし……お金がからないでこの子の具合がよくなる方法は……。

考えるも頭がいいほうではないので、思いつくはずはない。

さっきの少女のように考え事をしている弥生を見て思ったのか、  
葉月がつぶやいた。

「弥生、さっきから何難しい顔してんのよ。まるで『昔の弥生』に戻ったって感じね」

え……？ 昔の、私……？

それを聞いた直後、昔のトラウマがさかのぼるかのように鮮明に蘇えっていく。

弥生の背中に怪談話を聞いたような鳥肌が立つ。そして、身震いが止まらなくなる。と同時に過去のトラウマがビジョンとして映りだす。

夜……。

監禁……。

暗闇の海。誰も助けに來ない孤独な空間。

私、私は………。

昔のあの事件のことが頭から離れなくなっていく。

どうしよう。どうしよう。誰か……助けて………。

「どうしたのよ。どんどん難しい顔になっていくわよ」

葉月の声で我に戻り、平然とした顔でしゃべる。

「何でもないよー！ ただ、昔っていつだったけーって考えてただけ！」

「昔って……あなた、まだ生まれてからそんなに経ってないでしょ」  
葉月のいつものあきれた声が入った。

ごまかしはしたものの、やっぱり複雑な感情は抜け切れない。  
一度思い出した記憶を忘れようとするのは難しいらしい。

こんなんじゃ、明日の学校いつもどおりいけないかも……。

弥生がそう思っている、葉月が声を出す。

「弥生、私図書館の職員のひとと話して、医務室入れないか聞いてくるわ」

「え……急に突然……」

弥生は顔を見上げたが、既に葉月の姿はなく葉月の後ろ姿だけが  
かすかに見える。

足が速い……葉月。

でも、私まだ事情話してないんだけどいいのかな……？

といつてももう、葉月は行ってしまったのにいまさら言えないし

……。

かといって、葉月を仲間はずれにはさせたくないし……。

隣の横たわる少女をちら見する。

またさつきと同じように考え事をしているよう。

声、かけてみようかな……。

ほんの少ししか話してないとはいえ、やはり名前ぐらいは名乗  
らないと相手に失礼だ。一度顔を合わせて知り合いになっていれば、  
この先友達になれる可能性もあるだろうし。

よし！ 自己紹介しておこう！

そう意気込んだものの……。

弥生は過去の記憶が頭から離れなくなっていた。そのためか、声  
かけようにも声かけていいのかためらっている。

……駄目だな、私って。

やっぱりどんなに前世の記憶があろうとトラウマはトラウマ。消  
えることがない。一生消えないものなのね……。

無意識に少女に目が行ったとき、少女が立ち上がろうとする場面

が映りこむ。

だが、身体が完全に治りきっていないためか、すぐにふらつき元の仰向けの状態に戻る。どこか過去の事にあがく昔の自分のようだった。

弥生はいつしか少女を『昔の自分』と照らし合わせていた。

過去にあがいてあがいても、起きてもう終わってしまったことは変えられない。どんなにしても。

過去は過去。今は今。だからこそ、もう、二度とあんなことにならないように、同じ目に遭わない未来にするために今まで生きてきた。今もそうだ。過去は変えられないが、未来は変えられる。未来は必ずこうだと決まったものはないのだから。

突然、少女の息が荒々しくなった。

思わず少女に目を見張る。

「やっぱり、少しの間休んでおいた方がいいよ。無理しちゃ余計に身体を壊すだけだし」

「そうね……」

少女はただそれだけ交わした。

優しくゆるやかな風が吹き込み、少女の長い髪がふわりと宙に浮く。藤のようなあざやかな色の髪が揺れる。

綺麗な髪だなあ……。

そのゆれる髪に見とれてしまう。

私もこの子の髪のように心が軽くなる日って来るのかなあ……。来るといいなあ……。きつと。

不安を募らせながらも、青く澄んだ空を見上げた。

\*

時間を戻して十一時四十分。図書館の中庭にて。

葉月は弥生を落とし入れる作戦を考え込んでいた。弥生に復讐しようと思いついたのは、自分が好きだった男の子を弥生にとられたからだ。それ以来、弥生に復讐するために生きてきたようなもんだ。後ろでひざまずき、少女に寄り添う弥生を見る。倒れた少女の具合が気になるようだ。そんなの、ほっとけばいいものを……。まあ弥生の性格上、ほっとくことが出来ないからどうすればいいか困っているのだろうが。

とはいえ、作戦を立てるにしろ、弥生にばれたら元も子もない。あの弥生が気づくはずがないだろうが。しかし、睦月さんは頭がいい。何をしようとしても気づかれる恐れがある。ここは慎重に行くべきだろう。

作戦は何がいいかしら。

表情はいつもどおりの顔でこなしながら、頭の中をフル回転させていく。

オーソドックスにささいなものでいじめていくというのはどうだろうか。だが、学校は明日だ。今行うものではない。ここで行えるものでもない。ということはこの作戦は没だ。

次に嘘の噂を流して弥生の心を至らしめるといふのはどうだろう。だが、問題は『噂の内容』だ。噂の内容によって、デマだと判断させられる場合もある。弥生を落とし入れるための明確な嘘の内容がなくてはいけない。これは一時保留にしておこう。あとで何かに使えるだろう。

次は……………。

葉月の目が弥生と少女に向いたとき、ある事が思い浮かぶ。

そうだ……！ 弥生のこの状況なにかに使えるだろう。最近、図書館を荒らし、図書館にいる人が襲われる事件が発生している。何かに使えるかもしれない。とはいえ、弥生はまだ中学生だ。この状況では犯人にするには難しい。しかも、犯人は計画的に事件を起こしている。頭が悪い弥生には到底無理なこと。だが、名目上は少女を助けるために図書館の職員を呼びに行くということにすれば、自



分自身の株が上がる。弥生は無理だろうが。

まあ、それも悪くないわね。

その時、弥生が難しい顔して少女を見つめる光景が入る。

何か動揺させることができるかもしれないと思いつ。

葉月は思ったことを口にする。

「弥生、さつきから何難しい顔してんのよ。まるで『昔の弥生』に戻ったって感じね」

その瞬間、弥生の顔がみるみるこわばっていき、青ざめていく。

どうやらあの言葉は効いたようだ。

だがあれだけじゃ不自然に思われるかもしれない。

念のためにからかっておくか。

「どうしたのよ。どんどん難しい顔になっていくわよ」

葉月の声で我に返る弥生。

「何でもないよー！　ただ、昔っていつだったけーって考えてただけ！」

「昔って……あんた、まだ生まれてからそんなに経ってないでしょ」

あきれようにつぶやく。

これなら大丈夫だろう。

さて……作戦を実行するのでしょうか。

葉月は平然とした顔で言う。

「弥生、私図書館の職員の人と話して、医務室入れないか聞いてくるわ」

「え……急に突然……」

後ろを振り向き、事務室があるほうへと猛スピードで駆けていく。

走りには誰にも負けない自信がある。

これだけ走れば誰も追いつけは出来ないだろう。

葉月は睦月にほめられる妄想をしながらかけていったのだった。

弥生、何故か少女に攻撃される！？

十一時五十分ごろの図書館の中庭。

睦月はずっと弥生の様子が気になっていた。弥生が葉月の言葉を聞いてから顔色が一変したからだ。

弥生、さっきから何難しい顔してんのよ。まるで『昔の弥生』に戻ったって感じね。

そもそも葉月があんなこと言い出したことさえもわからない。言う理由なんてあるのか？

まるで昔の春野に戻った……？　ということは昔の春野は今目の前にいる少女のようだったということか。そもそも春野と秋村は親友同士だろう？　親友を傷つけるようなことはしないはずなのに……。あまりにも不自然すぎる。もしかして傷つくとわかっていた上で弥生にわざとあんなこと言ったのだとしたら……。秋村は油断できないな。念のために弥生の葉月の印象聞いた方がいいだろうか？　一応春野に聞いてみるか……。

睦月が弥生に声かけようとしたとき、弥生の表情が青ざめていた。春野……？

やはりあの秋村の言葉を気にしていたりしないだろうか？　あきらかに顔色がおかしい。

そのとき、葉月が弥生に声をかける。

「どうしたのよ。どんどん難しい顔になっていくわよ」

葉月の声で我に戻った弥生が、平然とした顔でしゃべる。

「何でもないよー！　ただ、昔っていつだったけーって考えてただけ！」

「昔って……あんだ、まだ生まれてからそんなに経ってないでしょ」

葉月のあきれた声が耳に入った。

やっぱり春野は無理しているようにしか見えない。

「春野……？」

と声かけてみるも返事はなし。

大丈夫だろうか？　それがきっかけで立ち直れなくなるとかにならないだろうか？

やっぱりあの葉月の言葉が関係しているだろうな。そうしか考えられない。

まさか！

秋村の言葉を気にして怖がっているとかじゃないだろうな。

だが、あの春野の表情からしてあきらかにそうだろう。

しかも、表情が最初に声かけたときに戻っている。

困っているようで、どこかさみしそうな表情。迷っているようにも見て取れる。

やっぱり声かけたほうがいいだろうか？

そう悩みつつも声かける睦月。

「春野……大丈夫か？」

葉月のあの、

弥生、さっきから何難しい顔してんのよ。まるで『昔の弥生』に戻ったって感じね。

という言葉が頭の中で繰り返し再生される。

だがそれを振り切って弥生に声かけた。

「春野！」

睦月が懸命に声かけた事で弥生は自我を取り戻す。

「え……睦月さん？　私……あれ？」

「何があつたかはわからない。だが、気にするな。前を見ていけばいい」

「睦月……さん」

「とにかく、あとは………ん？」

睦月が周りを見渡したとき、いつのまにか葉月の姿が消えていた。

どこに行つたんだ？

「春野、ちよつといいか？」

「睦月さん、どうかしたの？」

「ああ、ちよつとな。秋村の姿が見えないんだが、どこに行つたか知ってるか？」

「んー、そういえば……図書館の職員の人と話してくるって」

「理由かなんか言つてなかったか？」

「確か、この子を医務室に入れないか聞いてくるとか……葉月って優しいよね」

「あ、ああ……そうだな」

本当にそれだけか？ それだけの理由で行くのか？ 今まであつてきた秋村の感じではそうには思えなかった。何か企んでいたりするのか？ 一応探して本人に問いただしてみるのがいいだろうか？ 念のために探すか？ 目的地も決まっているから探しやすいとは思うが……。

睦月はそう意に決めると具合が悪そうな少女に自分の飲み物を手渡しつばやく。

「良くなつたとはいえ、こまめに水分補給は必要だ。嫌いかもしれんが、これを飲んで水分補給をしてくれ」

睦月の飲み物を受け取ると軽く目を瞑って会釈をするような動作をする少女。

「それと春野」

「なあに？」

弥生に近づき少女に聞こえない程度で話す。

「あと、秋村には一応気をつける」

「え？ 葉月に？」

「ああ。何考えているかはわからないが、とにかく気をつける」

「え、ああ、うん。わ、わかったよ」

「俺は念のために秋村を探してくる。もし、話がこじれていらない誤解が生じたあとじゃ遅いからな」

「わ、わかった……」

弥生は戸惑うようにうなづく。

弥生のうなづきを見てうなづき返す睦月。そして、事務室に向かって走っていった。

\*

というか、この世界に住む人々は何故あんなにも優しいの時刻が正午に変わったとき、図書館の中庭にいるスリジエは自分を助けてくれた少女と二人つきりになった。スリジエは水分を補給したりしたおかげでだいぶマシになり、起き上がっている。さっきやってきたあの二人はそれぞれどこかに行ってしまった。

まだ、お礼言っていないのに……。だろう？

どうして自分になんかかまってくれるのだろう？

今の国王すらかまおうなんてしてくれないのに……。

そんなスリジエを心配してまたもや少女が声をかけた。

「大丈夫？ やっぱりもうちょっと寝てた方が……」

「どうして……」

声が上がりにながらも、自然とその言葉が口に出た。

少女が「え？」と声をあげ、首をかしげる。

スリジエはキッと少女をにらみつけたとき、一粒の涙が落ちた。

「どうして！？ どうしてそんなに優しくしてくれるの！？ 見ず知らずの人を助けるなんて！」

少女は最初はびっくりしていたが、すぐに母のようなふんわりとした雰囲気になる。

「『どうして』なんて理由はないよ。倒れている人をほっとくなんて私には出来ないもん。それに……」

「それに？」

「それに、助けるのは当然だよ。困ったときはお互い様だしね」  
少女の笑顔はスリジエにはまぶしかった。

「もし……その人が助けるのを断っても？」

「無理にでも助けようとしちゃうかも」

その面影はどこかチェリーに似ている。厳しいようで優しさがある。そんな感じ。

この世界の住人はどうしてこうも優しくしてくれるのだろうか？

それでもまだなお、優しくしてくれるなんて……。

スリジエの胸がいつぱいになる。

そこでふと感じる。

それに比べて私は仇に討とうということしか考えてない。そんなこと全く考えようとしなかった。

私は……なんて惨めなオンナなの。

きゅつと唇を締める。

お礼、言わなきゃ。

そう脳裏に浮かんだとき、あることに気がつく。

そういえば、私まだこの子にお礼すらしてないわ。私を熱中症から助けてくれて、それでもまだ付き添ってくれている彼女をお礼もしようとしないうちに……。

「あ、あのっ！」

スリジエは少女に声かけると、思い切って言うてみる。

「た、助けてくれて……あ、あり、ありがとう。そ、その……た、助けてくれたお礼に……」

「え、お礼？」

少女はスリジエの言葉に反応するが、

「別にいいよ。私が勝手にやっただけのことだし」

と断られてしまう。

でも、正直に自分の気持ちをぶつけるスリジエにとって、何もしないで終わるというのは気が引ける。

「でも、何もしないほうが失礼かと……」

「そんなことないよ。『ありがとう』の言葉が聞けただけでもうれしいもん」

「そ、そお、かしら………」

不甲斐ないというか、何もしないほうが退屈というか……。だが、今の自分の身体で魔法を使うとどうなるか、自分が一番よく知っている。

退屈そうなスリジエに少女が気にかけたのか、こんな話を切り出す。

「き、気にしないで！ 私なんか、助けてくれた人にお礼をしようとしたら誘拐されたことあったし！ 滅多にないよ！ そんな事！」

え？ 誘拐……？

顔が自然と少女の方に向く。

「でも、結局誘拐は失敗に終わったみたいで。人質の私は夜の海に投げ落とされておぼれ死にかけたけど……海から助けてくれたひとが救急車を呼んでくれてね。そのまま救急車に運ばれて、なんとか命を取り留めたけど」

少女の話を聞いて心の中で激昂した。

なんとひどい話だ！ 誘拐が失敗に終わったから人質を殺す？

どこのどいつがそんな卑劣な真似を！ 人の命をなんだと思ってる！ まるで『あいつら』のような奴らだ！

スリジエはそこで疑問を抱き、その疑問を少女にぶつけてみる。

「そういえば、誘拐が失敗に終わったというけれど、何故失敗に終わったの？」

「あ……それは………」

少女はスリジエの質問に戸惑いを見せたが、ためらいながらも重い口を開く。

「実は、私……、両親がいないの」

「え……」

「生まれたとき、捨てられちゃって。そのあと両親は死んじゃって

……だからそのことを誘拐犯は知らなくて、私を誘拐しちゃったから……」

「でも、兄妹は……？ 兄妹はいるんじゃない？」  
スリジエの質問に首を横に振ると話を続けた。  
「ううん、いないの。私、最初から一人っ子だし。一応おばあちゃんがいんだけど。もう亡くなったけど。その日はおばあちゃんはお出して家にいなかったし」

ということは家の中はもぬけのから……ということ。

そうか！

誘拐したらまず、人質の家に電話して自分達の要求する。だが、この子の場合は違った。この子の両親はすでに他界し、その日は運悪く祖母も家にいない。電話しても誰も出ないのは当たり前だ。誰も家にいないのだからな。

こういうのは頭の悪いやつらが失敗するところだ。計画性がなく、いきあたりばつたりの行動。それが結果的に自分たちを破滅に追い込むことになるとは思ひもなかっただろう。

もっとこの子の事を知りたい。この子が嫌じゃなかったらこの子とお友達に……。

「ごくりと生唾を飲み込むと、おそろおそろ尋ねる。

「あ、あのっ……もし良かったら名前……」

「あ！ 名前乗るの忘れてた！」

少女はそう叫ぶと答えた。

「私の名前は春野弥生っていうの。よろしくね」

名前を聞いた直後、驚きのあまり声が出そうになった。

この、この子が……仇の春野弥生？ 馬鹿な。チェリーお姉様を殺した仇はもっと……。

もしかしてチェリーお姉様の言ったとおり、自分が求める仇はもっと別に……でも。

あなたが求めるものはもっと別にあるわ。真実からそむいや駄目。すぐそこに真実が必ず眠っている。



でも。信じられない。この子が春野弥生だなんて。

私は……何を信じれば……………。

スリジエが動揺していたとき、なにかがスリジエの身体を支配した感覚に陥った。

そしてそのままスリジエの意識は異空間へと閉じ込められたのだ。  
った。

\*

十二時十分になった時。

弥生は少女に自分の身の上話を聞かせていた最中だった。

「でも、結局誘拐は失敗に終わったみたいで。人質の私は夜の海に投げ落とされておぼれ死にかけたけど……海から助けてくれたひとが救急車を呼んでくれてね。そのまま救急車に運ばれて、なんとか命を取り留めたけど」

何故自分が過去の話をし始めたのかは自分でもわからない。

もしかすると、少女を退屈させないためにしてるのかもしれないし、誰かに話して過去を振り切って前を向きたかったのかもしれないし。おそらくどっちとも正解だろう。

最初、少女が退屈そうな表情をするもんで、共通の話題か何かで切り出そうとした。が、少女の好きそうなものを知らないため、話題に戸惑う始末。拳句の果てに自分は葉月のようにそんな情報をもっていないのでどれがいいかは全くわからない。ということで、自分の身の上話をして興味を引いてもらおうと考えた結果である。だが予想外に少女は自分の話に食いついてくれた。

それだけでも安心感があった。

弥生話を聞いていて疑問を抱いたのか、少女がその疑問を弥生にぶつけてくる。

「そういえば、誘拐が失敗に終わったというけれど、何故失敗に終わったの？」

「あ……それは……………」

弥生は少女の質問に戸惑いを見せたが、ためらいながらも重い口を開く。

「実は、私……、両親がいないの」

「え……………」

「生まれたとき、捨てられちゃって。そのあと両親は死んじゃって……だからそのことを誘拐犯は知らなくて、私を誘拐しちゃったから……………」

「でも、兄妹は…………？ 兄妹はいるんじゃない……………」

少女の質問に首を横に振ると話を続けた。

「ううん、いないの。私、最初から一人っ子だし。一応おばあちゃんがいんだけど。もう亡くなったけど。その日はおばあちゃんはお出して家にいなかったし」

弥生は思い出したとたん、涙が出そうになる。

やっぱり私って馬鹿だな。自分の過去を他人に話すなんて。

もつと…………マシな話をすればよかった。

でも。

それそれとして。

自分の過去の話をあんな顔で聞いてくれた人は初めてだな。今まで、私を何か悪い事やったから誘拐されたんじゃないかって変な噂が立ってまともにみてくれなかったし。

この子も、私と同じように身内の人を亡くしちゃったのかなあ。

そんな風に思えた。

でも、うれしいな。仲間が出来たみたいで。

自然と笑みがこぼれた。

その時少女が弥生におそろおそろ尋ねる。

「あ、あのっ…………もし良かったら名前……………」

「あ！ 名前乗るの忘れてた！」

弥生はそう叫ぶと答えた。

最初に会ったら自分の名前を名乗るのがマナーなのに、なんてこった。この子を心配するあまりすっかりわすれてた。馬鹿にほどがある。損した気分になる。

この子に申し訳ない……。

「私の名前は春野弥生っていうの。よろしくね」

少女が驚きのあまり声が出そうになった。

その表情にぬぐえない違和感を感じる。

私、何か変な事言ったかな。でも気に障ること言ったのかも。

時々、自分でも無意識に言葉を人を傷つけてしまうことあるから。それかな？

でも……。

出来るならこの子とお友達になりたい。お友達になっていろんなことしゃべりたい。

しゃべったり、どこかに遊びに行ったり、普通の子達がやるようなことをやってみたい。

けれど。

こんな私、受け入れてくれるんだろうか。

水が使える能力があるっていうだけで私の周りの人たちは、

《何もない場所から出すなんて！ バケモノだっ！！》

《どうして私があんと一緒にいなきゃいけないの！ きもちわるい！》

《こっちについてこないでよ！》

自分をのけ者扱い。そんな力を持つてるだけなのに？

どうしてって思った。だから、友達なんかいららない。

こっちから断ち切ってやる。

そんな思いで日々すごしてきたけど……。

でも、この子は違った。私の過去を知っても真剣に耳を傾けてくれた。

それに……。

自分でも良くわからないけど、この子は私の力のこと知っても普通に接してくれそう。

これはただの直感。みたたん<sup>ミタタン</sup>にすぐに思った。この子となら…。

だから……だから、この子とお友達になる。絶対。

弥生が心の中で決意したとき、突然空気が変わった。

（空気が……変わった？）

私の中にあるリアの魂が目覚め、そう感じさせる。

なにかが起こる。

いままでの経験ですぐにわかる。

一体何が……。

弥生が油断していると、火の玉が黒くなったかのような玉が数個同時に弥生の背中めがけて突進する。黒い玉の数個の内、二つが肩甲骨あたりに直撃。

突進された弥生は体が吹き飛ばされ、左半身を思いっきり木にぶつけてしまう。木は大きく揺れ葉っぱがひらひらと数枚舞い落ちる。

左ほ<sup>ひだり</sup>ほがぶつけた拍子でりんごのように染まる。というより赤く腫<sup>は</sup>れていく。

「いい気味ね」

弥生の耳にはそう聞こえた。

弥生が顔の向きを変えると、いつの間にか立って弥生を見おろす少女の姿。

「ど、どうして……」

ただそれしか言葉に出来なかった。

「どうして？ 私の姉さんを、……殺したくせに!!」

弥生はその言葉の意味すらわからなかった。

こ、この子のお姉さんを……私が、殺した？

馬鹿な。この子とは今日が初対面だし、まずこの子の家族構成なんか全く知らなかった。

この子にお姉さんがいるだなんて、今知ったばかりだもの。

弥生が戸惑っている、少女が大きく後ろに下がり両手を広げる。両手の上に、今度は新月のようなまるい球体が姿を現す。

そして両手を重ね合わせると、その二つの球体も合わせる。

何をする気だろう……。

嫌な予感がする。まさか、あれを私に向けて攻撃してくるんじゃない

……？

そう思ったとき、案の定。

一つになった球体が車のスピードのごとく猛烈な速さで弥生にめかけてやってきた。

やばい！

攻撃された背中がまだ痛みつつ、起き上がると木を盾にして木の後ろに隠れこむ。

間一髪、球体は木にぶつかる。球体にぶつけられた木は再び大きく揺れ、へこむように球体がぶつかった跡が残った。跡にはまだ冷め切っていないためか、煙がのろしのように漂っている。

どうしよう。このまま隠れているわけにはいかないし、かといってにげるわけには……。

仕方が無い！

睦月さんが帰ってくるまで、時間を稼いでいるしかない！

睦月さんが帰ってきてくれれば、何か手を打ってくれるはず。

少女が声を張り上げる。

「隠れても無駄よ。私にはわかるわ。あんたがどこにいるかは」

弥生は無我夢中で飛び出すと自分自身を囫に使った。

\*

同じく十二時ちょうど。

睦月は事務室がある建物の玄関入り口前まで来ていた。何か企んでいると思われる葉月を探しにきたのである。葉月が弥生に何かすると思い、心配になったからだ。

やっぱりいいか。

周りを確認してみるが葉月らしき人物は見当たらず。気配は感じるのだが。

やはりとは思ったが……どこかに隠れたか。

睦月は考え込むように視線を変える。

三百六十度見渡しみるも、葉月が現れる気配はない。やはりどこかに隠れてしまっているようだ。

もつとくまなく探すか？

いや、これ以上の詮索は難しいだろう。もし、春野の元に戻ったとき、どこに行って何をしていたか、言い訳が難しい。しかも相手は葉月の親友。余計な一言で関係をこじらせたくはない。

あいつを傷つける真似はできない……。

視線を移したときに玄関入り口に目が止まる。

おそらくあれは『移動封じの魔法』だろうか。なにやら結界らしきものがかけられていた。

うかつに入れないな。それに、入れば相手の思う壺だ。葉月とはかく容赦ない女なのである。相手が油断してひっかった所をしとめる。それが奴の手口。まあ、それはともかく……。

ここにいるかどうか、秋村の名前を出して反応を見てみるか。

睦月は葉月にしか聞こえないように、魔力を使いながらテレパシ―で叫んだ。

『秋村ー！ 聞こえるか！』

だが反応なし。もう一度やってみよう。

『秋村！ 何が目的で企んでいるかはわからん！ だが、春野はお前の親友だろう！ 親友なら親友を信じろ！』

やはり声は聞こえない。駄目か。魔力をとめて、テレパシ―をやめる。そして余計なものが入り込んでこないよう、見えないフ

ilterターでシャツトする。

よし！ これでいいだろう。

しかし、睦月には葉月のことよりも気がかりなことがあった。弥生のことである。

弥生の表情がどうも気になる。やっぱりまだ気にしていないだろうか？ 余計なことを言い過ぎてしまっではないだろうか？ あの少女と上手くやれているだろうか？ とにかく弥生が心配でならないのだ。

それそれとして。なんだろう。このとてつもない不安感は。

嫌な予感がするな。

この予感は当たる気がする。そのためにも一度、中庭に戻ろう。

睦月は走り出そうとするが、一度脚を止め振り返った。

複雑そうな顔で見つめると、再び脚を動かして中庭に急いで行った。

無事でいてくれよ。

睦月はただそれだけ願った。

\*

十一時四十分ごろの事だ。

葉月は事務所の中に来ていた。事務所の玄関は小さな病院の待合室のような小さな窓が見受けられる。広さもそれほど広くはなく、豪邸の玄関とそれほど変わらない広さだ。観音開きの入り口の両脇には一人が隠れそうなスペースがある。おそらく柱だろう。もし。何かあったとき、ここに隠れるとよさそうだ。

……あとは、事務所にいる職員の人たちに弥生をあ的事件の犯人だと思わせれば 完璧ね。

あの事件の犯人は中学生ではないかと、ほとんどの図書館の職員

の人たちはおもいこんいる。だとすれば弥生があ的事件と思わせるような証拠を突き出し、あることないこと言いふらせれば……。

靴を脱いでスリッパに履き替えようとしたときだった。

睦月が葉月にしか聞こえないように、魔力を使いながらテレパシ―で叫んできたのである。

『秋村―！ 聞こえるか！』

葉月は思わず反射的に体をびくつかせてしまう。

な、何なの……？

睦月に自分の心境までは聞こえない。自分も睦月と同じようにテレパシ―で叫ばないと、自分の声は睦月に届かないのだ。

『秋村！ 何が目的で企んでいるかはわからん！ だが、春野はお前の親友だろう！ 親友なら親友を信じろ！』

その言葉にまぶたをかすかに動かす。

弥生を信じろ……ですって？ どうして睦月さんがわざわざそんなことを？

まさかっ！

何か思いついたのか、顔を玄関の入り口に向けた。

私の計画がばれた？ どうして？

眉をひそめつつも、玄関の入り口にある左脇の柱に隠れる。もし自分がすでに玄関の中にいると睦月にばれると、それはそれでやっかいなことになる。それは嫌だ。

柱に隠れながらも、わずかにもれる音に耳を澄ませていく。足音だ。だがこんなところに人がいた気配はない。あるとしたら、さつきテレパシ―で聞こえた睦月さんしか……。

睦月だ！

睦月さんが玄関に向かっている！？

葉月に冷や汗が流れ、心臓の鼓動が早まる。テレパシ―は約一メートルから二メートルまでしか届かない。だとすれば、睦月はすぐそこまで来ているという事だ。

見つかる。睦月が玄関を開けて入ったとき、真っ先に見つかつて



しまう。どうしよう。

あせっていたとき「ある事」を思い出す。

…… そうだ！ 魔法だ！

念のために玄関の入り口に『移動封じの魔法』を仕掛けておいたのを忘れてた。今のうちに発動させておけば、そう簡単には近づけまい。近づくとも魔法の中に一定時間閉じ込められてしまふ。中ではどうする事もできない。外から破るしか方法はない。

葉月は小さくうわごとのように呪文を唱えた。

「ダブルゲート・ムーブ」

呪文を唱えた瞬間、入り口いっぱい大きな魔法円が浮き出てる。

これでよし。あとは睦月さんの出方を見るのみ。

だが、足跡が近づいてくる気配はない。それどころか足跡は遠のいていく。

柱から顔を出して確認してみる。

早歩きで事務所をあとにする睦月の後ろ姿がちらつと見えた。

後ろ姿も素敵ね、睦月さんは。

やっぱり、睦月さんは自分のものになる運命のヒト。弥生なんか似合わない。

そのためにも、睦月さんと弥生を引き離す必要がある。

絶対モノにしてみせる！

葉月はほくそ笑むと、中へと入っていった。

## 弥生と嵐のような中庭

十二時十分ごろになったときだ。

睦月は事務所の玄関前から図書館の中庭付近まで、走ってやってきた。

今の睦月の頭の中は弥生ことで、いっぱいいっぱいだった。

中庭が遠くからでも確認できるくらいまで差し掛かったとき、足を止める。

「一旦、休憩するか……」

近くにあったベンチに向かうと腰を下ろす。空を見上げ、ため息のような息を吐いた。

春野は大丈夫だろうか。あの少女と上手くやっていつてるだろうか。

そもそも、体調は良くなったのか？

心配のしすぎかもな。

もっとこんな心配性でもなかったはずなんだが……。

何故か春野のこととなると不安になってくる。

大丈夫だろうか……って。

べ、別に春野ばかり気にすることでもないだろう、俺！ 今は自分のことを考えていれば……。

立ち上がろうとしたとき、頭痛に伴った痛みとめまいが走った。

その瞬間、意識が別の方へと向けられた。

睦月の目には映像の一種が映りこむ。

激怒し何かを見おろす、宙に浮いた少女。

少女が見おろす先に春野弥生が、少女を見上げる。

少女が弥生に魔法で襲い掛かろうとする。

だが、映像は途切れ、元の現実へとひきはなされてしまう。

未来視か。

だが、あの未来視は一体……。

未来視に映る映像は今起きている出来事か、これから起こるであろう出来事。どれも必然的に起こる。となると、あれは……これから起こる出来事なのか！？

映像に映った少女は、さきほど春野が看病していたあの少女だろう。

となれば、少女が春野に襲い掛かろうとしたあのシーンは……。

まさかっ！

一滴の冷や汗が流れた。

まずい……まずいことになってしまっ。このままじゃ、春野が……。

…。

急がなくては！

未来視の映像は絶対は見たら必ずおきるのが鉄則。

あのシーンも起こる出来事の一つだ。

睦月の体が自然と中庭の方へと引き寄せられていく。足を動かして中庭に直行。

もう未来視の力には頼らない。

運命は自分で変えられる。

そう信じてきたのに、未来視には勝てなかった。シャルロットと相棒を組んだときも。

もし、自分が春野のそばを離れたせいであの出来事が起こる羽目になってしまったのだとしたら……。

自分にも当然責任はある。責任は取らなくては。目に入り込む背景が一瞬で通り過ぎていく。

一歩すすめば中庭に入るという場所で足が止まった。  
昼食時の時間で中庭は誰もいないはず。  
だが。

何かがぶつかったり、燃えるような音が耳に留まる。  
まずい。

もうすでに始まってしまったか。

「遅かったか……………」

舌打ちして足を中庭に踏み入れた。奥へと進むと中庭には見覚えのある二人。

夏休みの宿題を終わらせるために睦月ら呼び出した春野弥生。  
少女が倒れていた近くの木のそばで座っている。

春野弥生が倒れたと言ってきた熱中症ぎみの少女。宙に浮いて弥生を見おろしている。

やばい。未来の映像の通りだ。確かこの後は……。

弥生が立ち上がったとき、バスケットボールほどの球体を生み出す少女。

おもわず、はっと息を呑む睦月。

その球体は漆黒に似たどす黒い色をしている。あれはおそらく闇系の魔法。

闇系の魔法が使えるのか……。

「かなりの実力者のようだな、あの子は」

闇系の魔法は数ある魔法の中でもっとも扱いが難しく、コントロールがしにくい。しかも、闇系の魔法は失敗すればそれ相応の代償がつく。二、三回失敗しただけで身体はぼろぼろの状態に成り果てる。かなりの実力がなければ使いこなせない。

だが、体力の消費が少なく、攻撃力も高い。成功すれば相手を追い込める。

少女がさきほどの球体を弥生にぶつける。

「春……………」

二人に聞こえると思い、口ごもる。

弥生がふらつきながら球体を間一髪よけると動きが止まる。体力が減ってきているよう。

少女はちいと舌打ちをしたようだ。どうやら苛立っているらしい。春野より相手の少女が技術的に上だな。

「まずいな……」

睦月は首をかしげてうなる。

もし予想があっていたら、春野はさきほど、あの少女に自分の魔力を分け与えていたはず。闇系の魔法は魔力が多いほど威力が増していく。

だとすれば、今の弥生の魔力は普段の半分しかないはず。春野の魔法は主に水系だ。水系より闇系のほうが勝っている。

「今の状況だったら、あの少女が勝つかもしれんな……」

大丈夫だろうか。体力切れで倒れたりしないだろうか？

少しばかり手助けするか。

目に見えるものだとすぐにばれてしまう。

あれがいいな。あれならなんとかいける！

弥生と少女は互いに戦闘に夢中になっている最中。二人の攻防戦が耳に入ってくる。

睦月は二人に見つからないようこっそりと移動した。

\*

図書館の中庭では、十二時二十分になろうとしていた。

弥生は息荒くして四つんばいになっていた。首が痛み顔を上げる事ができない。さんと輝く太陽が弥生の肌を照らし、汗を噴出させる。全身、汗でぬれている。

もう攻防戦は十分経過。攻撃され、攻撃をよけるの繰り返し。そのため、無駄に反射神経と足を使い、体力が無くなりかけている。

もう……そろそろ、体が限界に来ている。

体が鉛で固めたような重量感が強くなっていく。

少女が息絶え絶えの弥生に対し、見おろしながら鼻で笑った。

「もう限界に近いんじゃない？ 闇の魔法は強力で当たれば体力を一気に奪うほどのもの。あきらめて別の方法とつたらどお？」

ただよけているわけではない。もちろん全く当たってないともいわない。何度も闇の魔法をじかに体で受け止めているためか、思うようにいかない。

「ま、まだ……そんなこと……は」

弥生は少女を見上げつぶやいた。

まだ始まったばかりなのに。十分しか経ってないのに。

まだ負けるわけには……………。

弥生が見上げたとき、少女がテニスボールほどの黒い物体を無数生み出す様を目にする。少女の周りにはその物体が囲うように飛んでいた。黒い光をもった蛍みたいだ。

あれはさつき受けたものとは威力は小さそう。だが体のいたるところに当たれば、体力が無くなるのは間違いない。最小限におさえなくては。

少女は獣のような眼光で弥生を見おろす。

「さあ、これで最後にしましょ。大丈夫。死ぬときは楽に死なせてあげるから」

口元が妖艶つぼく笑う。少女そのものが獣みたいだ。

「私の大切なチェリーお姉様を殺した奴は生きてる資格なんかないもの。最後にこれくらいはさせてよね」

チェリーお姉様？ どこかで聞いたような名前……。

っていうか、何故私が殺されないといけないの？ 私は人なんか殺した事ないし、これから先も犯罪を犯す気はないのに。

私が殺される理由……なにか、あるはずなのに……………。

目の前の黒い蛍に圧倒され、脳内は白紙。何も思い浮かぶことがない。

どうしよう……このままじゃ、私死んじやう！

でも、何も思い浮かぶことがないし……かといってこのままにしておくと自分の身があぶない。

「さて……………もう思い残す事はないかしら？　言い残していることは？　最後の望みとして聞くけれど」

「じゃっ……………じゃあ、ひ、一つだけ！」

人差し指を立て突き出すと、いままで抱いていた疑問を少女にぶつけた。

「私があなたのお姉さんを殺したって言うてるけど、どうしてそう思ったの？」

「どうして…………？」

少女の眉がかすかに動いた。

弥生は話を続ける。

「理由がどうしてもわからないの！　あなたに殺される理由が！」

「ふっ……………ふざけたことを！」

少女の顔が鬼のような形相に一変する。顔からは前にも増して、殺気が強まる。

少女は鬼のような殺気で弥生をにらみつけた。

「よくそんなことが言えるわね！　あの日、あんたがチェリーお姉様と戦っていたということは、既にこっちの耳に入っているのよ！」

チェリー……………あの日の戦い……………。

まさか！

「チェリーお姉様って……………あのチェリー・ムーンの事？」

「やっと、思い出してくれたみたいね。最後の最後でうれしいわ」

少女が微笑したのを確認すると、もう一つ質問を試みる。

「じゃ、じゃあ、あなたはあのチェリーとどういう……………」

だが。

「今はそんなの、どうだっていいじゃない！」

全部言う前に、少女に怒鳴られてしまう。怒らせてしまったようだ。

中庭には早くも昼食を終えた人たちが少しずつ戻ってきている。先ほどまで晴れていた空は急変。灰色がかった雨雲が太陽や空を覆っていく。

まずい……まずいよ。この状況。

あの子はすでに質問できる状況ではなくなっているし、空は雨が降りそうな天気だし。

「あんただけは……あんただけは絶対許さない！ 消えてなくなればいい！」

指を立て弥生を刺すと、一斉に黒い蛍が弥生めがけて急突進。黒い蛍の周りには隕石のごとく、青白い光が黒い蛍を包み込んだ。

やばい！ いっぱいやってきた！

さっきまでの攻撃とは打って変わり、威力もスピードも増している。

ど、どうしよう……。せ、せめてよけることができれば。

弥生は重く感じる脚を動かし立ち上がる。

深いため息をついて目と鼻の先にある、近くの木まで歩き出す。

たどり着く前に黒い蛍が弥生のふくらはぎや、肩甲骨などいたるところに直撃。

弥生はその場にうつぶせになって倒れる。

闇系の魔法は直撃すれば、内から体力や魔力を吸い取っていく。たとえばいさなものでも無数に集まれば、それは大きな力となる。

弥生にとってはおおきなダメージとなってしまった。

もうよけたりすることは出来なくなつた。他の方法を考えないといけない。

他の、他の方法……。他の……。

そうだ！ 歯には歯を、魔法には魔法で！

でも……魔力が……。

弥生はためらいつつも、体を起き上がらせ、後ろを振り返った。少女がすでに次の攻撃の準備を目撃。

手を重ねてクロスさせ、構えをとる。



「アクアシールド！」

水のドームが弥生周辺を覆い尽くす。

弥生の魔法に気づいたのか、少女が声をあげる。

「あら。魔法に変えたのね。まあ、正しい方法といえばそうね」

「……………」

弥生は何も答えない。

「まあ、いいわ。答えなくても。私には関係ない話だもの」

左手の甲を胸の上にかざすように向けた。何かを構える感じにもみえた。まさかまた攻撃してくるんじゃないか……？それはそれでまずい。

今はアクアシールドで張っているとはいえ、安心できるとはいえない。アクアシールドはかなり不安定なもので、ゆれては消えかけを繰り返す。

相手の魔法の威力はかなり強力だ。一回攻撃受けると消えてしまいうそだ。

弥生が不安に思っていると案の定。

少女が呪文を唱えるかのような小言でつぶやいた。離れすぎているため、口の動きしかわからない。何を言ったのだろうか。

黒い蛍の今度は黒い矢だ。黒い矢は細胞分裂のごとく増え続け、さっきの黒い蛍と変わらない量だ。しかし、大量にありすぎてどれほどのものか目に見える範囲ではわからない。

黒い矢が黒い蛍と同じく一斉攻撃してきた。矢はアクアシールドに飲み込まれていくが、アクアシールドの方は波紋が多く発生している。今にでも壊れそうだ。

お願い……もう少しだけ待って。

弥生はアクアシールドで防御しつつ、魔力で維持を続ける。

だが黒い矢がやむ事はない。増えるたびに襲い掛かり、アクアシールドに直撃していく。

どうしよう。これ以上は持たないかも……。

歯を食いしばり、限界まで魔力を送り続けてく。

雨のように降り注ぐ矢。魔力で維持を続けるアクアシールド。

少女はそんな弥生を面白そうに見下している。

だが、ついに。

アクアシールドがはじけとび、消え去った。

やばい！

弥生は生唾を飲み込み、後ずさりする。

ど、どどど、どうしよう！

周りを見渡し、どこか隠れそうな場所を探す。

弥生が探しているとき、ぽつりと冷たい水が弥生の頭上に落ちた。雨だ。

雨は次第に強くなり、やりのような強い雨へと変わっていく。まるで心につきさしていくようだ。痛いはずなのに痛くない。どこか複雑な気分である。

早く、いい方法を……別の方法を……。

少女がとめといわんばかりに、右腕を上に掲げ、最大級ともよべる球体を作り出そうしていた。

「せっかく、防いでいたのに残念ね。魔法が途切れちゃって……」

勝ち誇った笑みを浮かべる。

「でも、これで本当に最後よ」

弥生は反射的に構える。だが、魔力が送られてこない。

どうして？

はっと何かを思い出し、汗をたらした。

そうだ！ あの時、あの子が倒れて私が看病してるとき……自分の魔力を与えていたんだった！

熱中症なんだから、魔力を渡す必要なんてなかったはずなのに。何かに引き寄せられるかのように、気づいたらあの子に魔力を渡していた。

本当にどうすれば……いい方法を考えなきゃ、私がやられてしま  
う！

体が震えるばかりで頭が働かない。

右足を一步後ろに下げたとき、雨でぬれた芝生にすべりしりもちをついてしまう。

「……っ！」

お尻をさすりながら、危機を覚える。

少女はそこを見逃しはしなかった。

「まぬけな最後ね。でも、私はあんたを見逃したりはしないわ」  
上げていた右腕をゆっくりと下ろしていく。

まずい……このままじゃ、今度こそ、私死んじゃう！

しかし、弥生の体は石像のように固まり、動けない。

いや、動くことが出来なくなっていた。

怖い……死ぬのは怖い。でも、それよりも……。

少女は弥生につぶやくように言った。

「今日は楽しかったわ。あなたとこんなバトルが出来て」

もう、二度と。

「私があなたに負けるわけがないけれど」

睦月さんに。

「さよなら。春野弥生」

会えなくなる事が、一番怖い。

「死ね！」

大声で一喝すると、右腕を思い切り振り下ろす。

球体はバスケットボールよりも倍以上もある図体。そんな事もかんじさせないほどのスピードで弥生に襲い掛かる。

弥生は反射的に目をつむり死を覚悟した。

その時だった。

「ファイアシールド！」

聞き覚えのある少年の声が中庭中に響き渡る。

弥生の前に球体と同じ大きさであろうほどの、巨大な炎の盾が姿を見せた。

球体は炎の盾に直撃し、みるみるくずれていく。  
すごい……。

弥生はつばを呑み、呆然とする。

そんな弥生にかけよってくる一人の少年。

「春野！ 春野、大丈夫か！」

「む、睦月……さん」

「春野、しっかりしろ！」

「よかった……来てくれるって信じてた……」

睦月を見て安心したのか、急にまぶたが重くのしかかる。

「助けて……くれて、ありが……とう、睦月さ……」

弥生は一瞬にして睡魔に襲われ、そのまま眠り始めた。

その後、夕方まで目を覚ます事はなかった。

## 弥生と転校生の学校初日

時刻は七時半。

次の日になり、今日から二学期が始まった。海堂町にあるもつとも有名な海堂市立海堂中学校。水泳で全国大会優勝するほどの強豪校でもある。

弥生は海堂中学校指定の通学路を通りながら学校へと向かった。

弥生の両側には一軒家が規則正しく立ち並んで出迎え、その前には電柱のように等間隔に植えられたソメイヨシノ。春になると桜が満開になり、道を桜のはなびらが舞う。今は葉っぱが茶色に染まり、枯れ葉に姿を変えていた。一部の桜はすでに枯れ葉が地面に落ち始める。もう、秋に近づいてきているなと感じる。

そして、今日から学校がまた始まる。クラスのみんなに会える。授業も始まる。そう考えると心が躍る。笑みがこぼれずにはいけないのだ。学校に行くだけで、みんなのクラスの顔を見かけただけで、

私は一人じゃない。

と、思っていたら。そう、言っていたほうが安心するのだ。一人暮らしの私には。

だが、全部が全部うれしい出来事だとは限らない。

それは「昨日の事」である。

昨日、あの戦いで倒れた時間から目を覚ます夕方までの間がわからない。あのあとどうなったかさえも私にはわからずじまい。

あのあと、あの少女と戦っていたということは覚えてはいる。睦月さんが駆けつけてくれて安心したら、そのまま気を失ってしまった。

睦月さんはあのあと、どうなったんだろう？ やり過ごしてくれたのだろうか？

あの子もあれからどうしているんだろう？　まだ怒っていたりするのだろうか？

何があったか知りたい。でも、知ったところで何になるんだろう。何かを得るわけじゃないのに。

それでもやつぱり、真実が知りたいという思いが私の中で強い。でも、思い出そうとしても思い出せない。どうしても。思い出せば何かあるかもしれないのに。

けれども、頭の中にもやががかかって、よくわからない。どうすればいいかわからない。

海堂中学校の校門が目と鼻の先にさしかかったとき、足を止める。海堂中学校のプレートが目に入ってきた。校門には制服を着た男女の生徒らが無表情で校門を通って校舎へと向かっていく。その表情はまるで人形のようなだった。

弥生の額に一滴の雫が噴出し、滴り落ちる。

誰かに相談して、聞いてみるべき？　でも誰に相談するの？

あの子がどこの誰かなんてわからないし、睦月さんの家なんて知らないし。もちろん、睦月さんの携帯番号は知ってるが、今は学校がある。かけられるはずがない。

憂鬱のようなため息を漏らした。

葉月は知らないからな。あの戦いのこと。

あの場にいたのは、あの子と睦月さんと私だけ。葉月は私が倒れるまでいなかったから知らないはず。だが、倒れたあとのことが問題だ。私が倒れてすぐに戻ってきたのかかもしれないし、あの子が去ったあとに職員さんを連れてきたのかもしれないし。そこは本人に聞いてみないとわからない。断定はしていけない。

でも。

下を向いたときだった。弥生の右肩に手が乗り声をかけられた。

「弥生っ。何してるの？」

弥生が振り返ると、小麦色の肌に短く切った黒髪の少女が立っている。

「臯月っ？」

弥生と同じ3年1組のクラスメイト、夏野臯月である。女子陸上部に所属し、陸上部のエースを務める元気で運動神経抜群の女の子なのだ。

「弥生、なんかしけた顔してない？」

「し、しけた顔？」

「そ。何があつたか知らないけど、元気だしなよね。弥生は一人じゃないんだからさ」

「臯月……」

弥生は臯月の言葉に目を潤ませる。

臯月が思い出したかのように、手をたたく。

「あつ。そういえばさ、弥生。今日うちのクラスに転校生がやってくるみたいよ」

「転校生？ こんな時期に？」

「そう。しかも、転校生は二人くるらしいの」

臯月の言葉を耳にして、

「二人もっ？」

と、驚きの声をあげた弥生。

「そうなのよ。変だと思わない？ こんな季節に転校生二人って」  
「確かに」

「しかも、二人ともうちのクラスに来るのよ？ おかしいでしょ」  
臯月の顔はどこか腑に落ちなさそうな顔だ。納得がいていないようである。

「それに、一人は超のつく天才頭脳の持ち主だっていうじゃない？  
不公平よ！ 私なんか、部活づけで勉強できていないというのに！」

弥生は癇癪を起こす臯月を目の前に口を開けたまま呆然とする。

「ま、まあ、そうだね……」

「ははっ、と顔を引きつらせた。」

「で、でも、その子に勉強少しくらい勉強教えてもらうとかなんて

「……やっぱやめとく」

「それよ！」

「へっ？」

弥生が皐月の声にびくつと肩をすばませる。

皐月は目を輝かせ、天を仰ぎ見た。

「そうよ！ 別にライバル視しなくてもいいのよ！ そう！ 利用できるものは利用しなきゃ！」

まともなこと言ってるようで、馬鹿なこと言っているのか、自分にはさっぱりわからない。

「そうと決まれば、第一印象をよくするために、練習よ！」

「練習……？ 何の？」

弥生の質問に皐月は、

「もちろん、その転校生と仲良くなるためのシミュレーションよ！ 第一印象がよければ後々楽じゃない！」

自信満々に答えた。

「ら、楽って……」

なんだか、公園で遊ぶ子供みたいだ。そんなんで大丈夫だろうか。

皐月がじゃあ、と切り出し、

「ということで、教室で自己紹介の練習してくるわ！」

目を星屑のごとく、輝いている。

皐月は元気だなー。どうしたら、皐月のように元気で明るい子になれるのかなあ。

「うん、わかった。がんばってね」

弥生の顔はごまかし笑いをうかべていた。

そ、そんなんで大丈夫かなあ……。

走り去っていく皐月に手を振りながら、見送る。

皐月の姿が見えなくなると、ゆっくりとした足取りで教室に向かう。



3年1組 教室前

久しぶりの学校に胸を躍らせていたが、いざというとなると緊張が高ぶってしまう。

……落ち着け！ 私！

ぐつと息を呑み、教室の入り口に手を伸ばす。入り口を勢いよく開け、一言。

「おはよ！」

教室にいた生徒が一斉に弥生に集中した。

そして口々に声を出す。

「あ、弥生だ！」

「おひさー、弥生っ」

「久しぶりじゃん」

どれも暖かい声。全身がほっとした感覚になる。

「うん、みんなおはよ」

入り口を閉めると、弥生は自分の席に向かう。

弥生が通り過ぎた時入り口近くの席で、三人組の男子生徒の話し声が入った。

「やっぱり春野はかわいいよなー」

「ああ、秋村もいいが、あいつは性格が駄目だからなあ」

「そうそう。ちよつと話ただけで嫉妬したりするし。ほんと嫉妬深いよな」

葉月の噂話のようだ。葉月ってそんなに嫉妬深い子だったかな。

首をかしげていると、さきほど会った皐月がまた声をかけてきた。

「弥生、ちよつと来な」

来る様子招きしてくる。なにか話があるらしい。

方向を変えていつてみると、唐突に話を切り出される。

「弥生、これ以上葉月と関わっちゃ駄目よ」

「ええ？ 何の話？ 一体」

「弥生、あんたは葉月を大切な親友とか思っているだろうけどさ」  
「うん。思ってるよ。それがどうかした？」

弥生は悪びれる様子もなく肯定する弥生に、皐月は困り果てた顔でため息をつく。

「弥生……単刀直入に言うわ。葉月はね、好きな男の子と他の女子が少しでも関わりと嫉妬する子なのよ」

「それがどうかした？」

「あんた、一学期の時、夏野君とお話してなかった？」

「うん。したよ。それで？」

うなづいたあと聞き返してくる弥生に、皐月が口を開ける。

「それでって……私が話したの忘れたの？」

「ううん、覚えてる。葉月は嫉妬深いつて話でしょ？」

「そうだけど……」

「話の内容はよくわからないけど……、私、葉月を信じてるから」  
弥生の目には自信が満ち溢れていた。もう誰にも止められないと言っているかのように。

「弥生……。わかった！ 弥生がそこまで言うならもう止めないわ

！ もし、葉月に何かあったら真っ先に私に言うのよ？ いい？」

「うん、わかった」

弥生は力強くうなづいた。

皐月も笑顔でうなづき返す。

「なら行ってよし」

弥生は皐月の笑顔を目に焼き付けると、自分の席に着く。

席に着いたときに、横から葉月の声が耳に入る。

「弥生、皐月と何を話していたの？」

葉月の声に思わずビクツと反応してしまう。

さつき、皐月に葉月のことを聞いたばかりなので妙に気まずい。

「えっ。な、何が？」

明らかに動揺しているというのがバレた。

「そっという反応するのって、私に話せないことなの？」

「えっと、そういうワケじゃあ……」

冷や汗が一気に吹き出てくる。

「な、なんて言えばいいのかな……。あ、あれよ！ あれなの！」  
「あれって何よー。『あれ』って」

頬を膨らませ、眉をひそめる葉月。明らかに怪しまれている。

どうしようと思ったが、葉月が言う。

「ま、あの皐月のことだから、どうせしょーもない話だろうから気にしていないけど」

葉月と皐月は性格が似ているようで正反対なのである。直に会話したくないほどで、第三者を通してでないと話さない。何故、仲が悪いのか知らないが、どうやら二人に共通する好きな人のことで何か問題が起きたらしい。それ以来、二人は直に会話していない。

「そうそう！ 弥生、転校生の話、聞いたっ？」

「うん、皐月から聞いたよ」

葉月は弥生の口からまたもや皐月という言葉聞いて、さらに不機嫌そうな顔をつのらせる。

「何よ。また、皐月？ ま、いいわ。転校生は二人。しかも、

一人は女子で、もう一人は……男子だって！」

「男の子と女の子の転校生がくるの？」

「男の子って……その言い方じゃ、まるで小学生ね。で、噂では、二人はカップルじゃないかっていう噂よ！ まあ、さすがにみんな信じ切っていないみたいだけど。みんな転校生の男の子に興味津津の様だし」

「へえー。そうなんだ」

弥生は興味がなさそうな声で相槌を打つ。

好きな人は睦月しかないないので、そんなの聞いても興味がないのである。だが、男にルーズの皐月があれだけテンションが高かったのは、転校生に男の子が来るからか。

「でも、ほんと不思議だね。こんな時期に転校生って」

「まあね。実はもう一つ噂があつて、二人とも何かの目的があつて

この学校に来るんじゃないかって噂してるわ。春先ならともかく、秋に近づくこの時期に転校してくるなんて変だってみんなささやいてる」

葉月がやれやれと言った顔で、横に首を振った。

転校生か……。

一人は男の子で、もう一人は女の子。女の子だったらお友達になれるかも？ あと、その転校生の男の子っていうのが、もし、睦月さんだったら……。

我知らず頬を赤らめる弥生。

そうだ。

皐月の『転校生と仲良くするためのシミュレーション』はどうなったのかなあ……。

自分の席から離れた窓を横目で眺める弥生だった。

\*

時間を戻して七時半。

海堂中学校にある校長室。来客用のソファーに一人の少女が座っていた。

スリジエ・ムーンである。

左壁の奥のドアは隣の職員室につながっている。だがスリジエが知るはずがない。

これが人間の学校なのか。

本などでみたことのあるいたって普通の校長室。どこにも不自然なところはない。

だが、そんなことはどうだっていい。

人間の町に来て初めての学校。緊張しないわけがない。しかし、ここで食い下がるといままでの努力が水の泡になってしまう。学校

に入るのにどれだけ苦労したことが。

「おまたせしました」

職員室に通じるドアから入ってきた、灰色のスーツの男。豪邸で執事をやっていそうながつちりとした体格。白髪交じりの黒髪をオールバックにし、お洒落に刈り込んだ口髭を生やしている。この学校の校長である。

「すみません。職員会議が早まってしまっただけ。いろいろ問題が起きて時間がかかってしまいました」

校長はそう言うと、スリジエの向かいのソファに座った。

「いえ……。別に気にしてはいませんので」

落ち着いた控えめの口調のスリジエ。あまり人間と深く関わったことのない、人魚のスリジエにとって何もかもがはじめての出来事なのだ。人間の町にある学校の校長先生に会うことも。

ふと思った。昨日は海堂町の伝説について図書館に行ったが、春野弥生に会っていたので結局調べなかった。しかも、昨日のこと、あの少女が春野弥生だと知ってからの事が覚えていない。自分のことなのに自分がわからないなんて。

そうだ。この校長なら、海堂町の伝説について何か知ってるかも知れない。この海堂町に住む人たちにとって、海堂町の伝説は当たり前のように教え伝えられるものらしい。だとすれば、何か情報もらえるかもしれない。

スリジエは思い切って校長に声をかけてみた。

「あ、あのっ……………」

「ん？」

スリジエの後ろの壁にある壁掛け時計を見上げていた校長が視線をスリジエに移す。

「どうかなさいましたか？」

スリジエは校長が自分に視線を向けたの確認すると、話を切り出す。

「あの、この海堂町の伝説についてお聞きしたいのですがっ！」

「海堂町の伝説？ …… ああ、あれですね」

最初は戸惑っていた校長だが、すぐにスリジエの言ってる意味を理解したようだ。やはり、この海堂町の人間は海堂町の伝説は当たり前知ってるものなのだと、改めて感心する。

「で、何について知りたいですか？」

と校長に尋ねられ、真っ先に口にする。

「ほ、滅んだ人魚の国についてです！」

まずは仇の過去から知っておけば、後々役に立つと考えたからだ。  
「なるほど……。実は滅んだ理由は諸説あるんですが、もつとも有力とされているのが、海の魔物が襲ったという説ですな」

「海の魔物……？」

「さよう。海の魔物は二匹おるとされ、北にベビモス、南にリヴァイアサンという恐ろしい魔物がすんでいるとされています。まあ、もう数百年も経ちますから実際のところは謎ですが」

リヴァイアサン！ スリジエは知っている。その名前のこと。そして、最近チェリーお姉様の手によって一度封印が解かれたことも北の海にも南の海に対等する魔物はいると聞いてはいたが……。

「滅んだ人魚の国は当時、王女の成人式を行っていたらしく、その最中に魔物が侵入し、そのままほろんだとされています」

「それで、その王女様はどうなったんですか？」

「それが……いまだに見つかっておらず、国王が夢の宝玉を持たせて逃がしたのではないかと学者たちは考えているようですが」

いまだ見つかっていない！

スリジエは校長の話聞いて確信を持つ。

間違いない！ その王女は春野弥生の前世。そりゃあ、いないのも当然。本人は王女の姿を捨て、新しい姿に生まれ変わっているのだから。

もつとなにか詳しい話が聞けるかもしれない。

スリジエが口を開けようとした時、廊下につながるドアから二人の男が入ってきた。

一人の長身の男がつぶやく。

「失礼します。すみません、校長先生。話しているところ悪いんですが、もう一人の編入生を連れてきました」

もう一人の少年は校長に会釈し、挨拶する。

「失礼します。校長先生、おはようございます」

一人は一七〇センチほどの教師らしき男。もう一人はスリジエとほぼ変わらない、一六〇センチほどの少年。この学校の制服を着ていることから、この学校の生徒だろうか。スリジエと同じ年にも見える。

なんだか、この者達に話を遮られたような気がする。

内心の苛立ちを隠しつつ、少年の顔を凝視してみた。

どこかでみたことのある顔だ。どこだっただろうか。最近会ったような気が……。

そこで、昨日春野弥生といた一人の少年を思い出す。

そうだ！ 昨日、飲み物をくれたあの男の子だわ！ 好みの顔した男の子！ こげ茶色の髪が鮮明に脳に刻み込まれていた。まさかこんなところで会えるなんて……！

スリジエが少年との出会いに胸を躍らせている中、校長が少年に一声かける。

「冬川睦月君……だったかね？ この町は初めて来たというが、そんなことを感じさせないようなオーラをもってる。やっぱりこの町に歓迎されているんだねえ」

校長の言葉で少年の名前が『冬川睦月』だと判明した。冬川睦月君、睦月はなれなれしいから冬川君かしら？

睦月は斜め下に視線を逸らす。

「いえ、そんなことはありません。今は校長先生に挨拶に来ただけですから」

「最初会ったときも思ったが、君はクールだね。だからあんなに人気になるのかね？」

「そう、なんですか……？」

睦月の顔がどことなく怪訝そうにする。

「まあ、とにかく、君はこの学校に入って正解だという事だよ。ああ、そうだ」

スリジエはちょっと来てくれんか？　といわんばかりの校長の手招きを受ける。表情は穏やかだ。

スリジエはひらめく。これは冬川君にもっと自分をアピールできるチャンスではなからうか。しかも、校長が紹介してくれるというなんというグットタイミング！　これは絶対モノにしなくては！

「はい。何でしょうか？」

あまり興奮しているのがばれるとまずいので、いたって何も無かったように対応する。

校長は睦月にスリジエを紹介し始めた。

「このこはスリジエ・ムーンちゃん。君と同じ三年一組のクラスに入る子だよ」

睦月は少し間を置いてから、

「……………よろしく」

小声でつぶやいた。スリジエがギリギリ耳に入ってくるような声。初めて会ったわけではないと向こうも気づいてくれているらしい。

「こちらこそよろしくね。冬川君」

スリジエは握手を求めるが、睦月は握手に応じようとはしない。

やはり、まだ無理か。

男性教師が左手にはめている腕時計で時間を確認する。腕時計は本で知ってはいるがみた事なかったため、今初めてみる。あれが腕時計というものか。

「校長先生、そろそろ体育館で始業式が始まる頃ですね」

「そういえばそうじゃのう……。では、荒川先生、この二人を頼みましたぞ」

荒川先生と呼ばれた教師はスリジエと睦月に一声かけた。

「はい、わかりました。じゃあ二人とも行こうか」

「はい」



睦月は何も無かったかのように前を歩きだす。

「あ、は、はい」

スリジエも荒川先生と睦月においていられないよう、後についていった。

これから、私の新しい学校生活が始まるのね！

その表情は自信に満ちた笑顔であふれていたのだった。

\*

体育館で始業式が終わった十時頃、生徒達は各自教室へと戻っていく。弥生もまた自分の教室に戻り、自分の席でホームルームが始まるのを待っていた。ただ待っているわけではない。わずかな時間でも昨日の事を思い出せるんじゃないかと考えたからだ。ただ何もせずに終わらせると歯切れが悪いからだ。昨日何があったか知った上で、頭をすっきりさせ、授業に望みたい。

けれど何度試みても上手くいかない。やはり記憶にもやがかかる。なにか、なにか手がかりがあれば……。

両手で頭を押さえていたのが、ゆっくりと離される。

そうだ！

睦月さんが駆けつけてくれたとき、もう一人誰かが駆けつけた。私を知ってる人。すぐ近くにいる人。でもわかっているはずなのにわからない。

た、確か……。

駆けつけた人物の顔が判明しそうになったときだった。

「弥生。あんた、何してるのよ」

声の主は秋村葉月だった。葉月は首をかしげて不思議そうにしている。

「えっ。いや、ちょっと考え事をね……」

弥生はそう答えて見せた。表情は難しい顔のまま。

「昨日中庭で葉月を待っていたら途中で倒れちゃって。それからの事が思い出せそうで思い出せなくて……」

「って、あの女の子の次はあんたが倒れちゃったの？ 馬鹿じゃない！ 何をやってたの、あんたは」

「うう……。ごめんなさい……」

小さくうずくまり反省すると、気まずそうに顔を上げた。

「で、でも、でも。睦月さんが家まで送ってくれたみたいだし……」

「それ、理由になってないわよ」

「そ、それあの、葉月は職員呼びに行くっていたの、あれどうなったの？」

弥生が質問したとき、葉月が能面のようにこわばり表情を一変させた。

「何の話？」

「何の話って、葉月も昨日一緒に図書館に行ってくれたじゃん」

「さあ？ な〜んの、ことかしら？ 私は知りません」

何もなかったかのようにしゃべる葉月に違和感を感じてならなかった。どうして、そこまで「事実」を無かったことにしようとするのだろう。別に無かったことにする必要はないはずなのに。

聞こうとは思ったが、担任の荒川先生が入ってきたため、言えずじまいになった。

荒川先生は教卓まで歩き、出席簿をその教卓に置くと、転校生の話を始める。

「ホームルームをはじめる前に、みんなも知ってると思うが、転校生を紹介する」

その瞬間、教室内はざわめいた。やっぱりきたか！ そんな雰囲気をおぼせるかのよううだ。

クラスの生徒らが噂し始める。

「転校生って男女二人だよな？ やっぱり恋人ってことないかな？」  
「ないでしょ。二人とも初対面って先生たちが言ってたし」

「転校生の女の子、かわいいかなあ」

「相当の美少女だって。うわさじゃあ、春野と同じくらいかわいいつてよ！」

「しかも、転校生の男の子もイケメンだって！」

「うそぉー！ マジ？」

転校生の男女二人の関係を怪しむ者。転校生の容姿を気にする者。誰も転校生の話でもちきりだ。誰も転校生の二人に興味がないはずがない。

弥生も当然、転校生の二人は気にはなるが、先生が転校生を紹介しない限り何も始まらないので少々退屈気味なのだ。

「静かに！ 話を戻すぞ！」

先生の声が届いたのか、教室が静かになる。誰も私語をしなくなつた。

先生がその転校生を紹介するのがわかったからだ。

転校生か。

「転校生は二人いる。まずは一人目の転校生だ。睦月君、入ってきなさい」

睦月……君？

先生の話に聞き覚えのある言葉が入っていた。

先生が入り口に視線を向ける。教室内の生徒も全員、前の入り口に集中した。

がらりと戸が開き、一人の少年の姿があつた。

少年を入り口を閉めると荒川先生の左隣で止まった。

少年が正面を向いたとき、弥生が知っている顔がそこにはある。

「冬川睦月です。よろしくおねがいします」

睦月は浅く会釈をする。男子らは不愉快そうに見つめ、女子達は睦月の容姿に頬を赤らめ見とれていた。

そう、弥生が会いたいと思っていた睦月である。

ま、まさか転校生の一人が睦月さんだったなんて……！  
笑みがこぼれそうになる。

睦月も教室内に弥生がいることにきがついたのか、弥生は睦月と目が合う。

顔から火が出そうになった。恥ずかしいというより、睦月と目があつて心臓が高鳴ってしまったのだ。

でも、これからは少しでも睦月さんと一緒にいられる時間が長くなる……。

先生が話を続けた。

「次行くぞー！ 二人目の転校生だ。スリジエさん、入ってきなさい」

今度は聞いたことのない名前だ。誰だろう。もう一人は女の子のはず。

睦月が入ってきた入り口から、藤色の髪した少女が入ってくる。

腰まである長い髪が歩くたびに左右揺れる。揺れる髪に反応するかのように、豊かに膨らんだ胸も上下に小さく動く。

あ、あの子は……。

弥生は息を呑む。

少女が真正面に向いたとき、心臓が止まるくらいの衝撃が走った。「スリジエ・ムーンといいます。これからよろしくお願いします」スリジエは睦月を真似するかのごとく、会釈する。教室内の反応が入れ替わった。男子らは興奮し興味津々そうに凝視するが、一方の女子達は眉間にしわをよせてにらみつける。

あの子は昨日の子だ！

弥生が見間違えるはずがなかった。昨日、倒れるきつかけとなつたあの少女である。

睦月の転校もあの子の転校も、予想していなかったため、呆然とスリジエを見つめるばかり。

どうしよう……。

弥生はこの先大丈夫なのか先行きが不安でならなかった。

## 弥生と転校生のウワサ話

ホームルームが終わり、三限目のみ授業することとなった三年一組の教室。三年一組だけでなく、全学年授業を受けている。

三年一組の教室では弥生が苦手分類とされる数学が行われていた。黒板で右手に数学の教科書、左手にチョークを持って黒板を説明する中年の女性教師。派手目の赤いスーツが遠くでも目に焼きつく緑の黒板に白のチョークで、黒板いっぱいに書かれている数式。青や赤のチョークは、一部重要な部分のみしか使用されていない。弥生にとって黒板に書かれた数式は地獄でしかない。

見ているだけで英語の長文にしか見えないほどの細かさ。弥生の席は後ろの席から二番目で、窓よりの席のためあまり見えにくい。几帳面すぎる。

授業があるのはわかってはいたが、最初の授業が数学というのは辛い。

弥生の視線が黒板から右斜め上の席、前から二番目の廊下よりの席に移る。その席には今日転校してきた睦月の席である。その睦月の後ろは昨日の倒れた少女、スリジエの席。二人とも今日この学校にやってきたばかりの転校生だ。

今の弥生には数学の授業は耳に入っていない。受け付けないのだ。睦月のウワサが頭から離れないために。

葉月から睦月さんのあるウワサを耳した。

噂では、二人はカップルじゃないかっていう噂よ！ まあ、さすがにみんな信じ切っていないみたいだけど。みんな転校生の男の子に興味津々の様だし。

あのスリジエさんと睦月さんが恋人同士……。

噂なので、ホントではないことはわかっている。睦月があのスリジエとあの時が初対面だったことも知っている。

知ってて、わかっているはずなのに……。

記憶がもやがかったと思えば、今度は心の中がもやがかる。なにかすつきりしない。やつてもない罪をかぶせられたような気分。

こういつときって、どうしたら……。

睦月とは特別な関係というわけでもなく、仲の良い友達というわけでもない。

ただ好きだと告白されただけという関係だけ。けれど、なにか裏切られたような気分である。

「では、この問題を春野さん。解いてください」

先生に当てられ、「へっ？」とつぶやき数秒間、間が空く弥生。椅子から立ち上がると、数学の教科書を開いた。

「は、はい。え、え」と……どこだっけ？」

教科書のページをめくりまくる弥生に見かねたのか、葉月が小声で話しかける。

「弥生、馬鹿ね。教科書は一三七ページでしょ！」

「あ、そっか。ありがとう、葉月！」

葉月に指定されたページを開き、机に教科書を置いた。先生が言っていた問題を人差し指で探す。探していた人差し指が止まる。それは平方根の問題だった。

「あ、これか」

再び教科書を両手で持ち上げた。

「答えは、……ルート三です」

「よろしい。座っても良いですよ」

先生は弥生が答えたのを確認し、目線を黒板に戻す。

答え終えた弥生は着席。ほっと胸を撫で下ろした。

隣で再び葉月が声をかけてきた。

「ねえ、弥生。転校生の男の子で、もう一つウワサを耳したんだけど聞かない？」

睦月さんとスリジエの恋人だといううわさで頭がいつぱいなのに、これ以上どうしろと言うのだろう。

「噂？　なんでまた今頃……」

「まあまあ。そんなこと言わずに。あの睦月君、実はとある国の王子じゃないかって、噂されてるの。しかも、婚約者がいるんじゃないかって」

「こ、婚約者！？」

勢い良く立ち上がり、その衝撃で椅子が揺れ動く。椅子は大きく揺れ動くだけで、床に倒れず元に戻った。

衝撃に先生やクラスメートが弥生に集中する。

「春野さん、婚約者がどうかしましたか？」

弥生は先生の声で我に返る。回りを見回し、クラスメートが自分に視線を向けている事に気がつく。

「えっ？　あ、いや、あの……… なんでもないです」

やってしまったという顔でしょんぼりと席に着く。

「はあ……… なんでもなかったんだろ」

「弥生って、相変わらず馬鹿ね。もっと静かに話せないの？」

弥生は葉月にしかられますます小さくうずくまる。

睦月の噂が頭に離れないまま、授業が終わり、昼休みに入った。

## 昼休み

「弥生の頭の悪さはどうやってたら直るかしらね」

葉月が広げたお弁当に手をつけながらつぶやいた。お弁当の具は卵焼き、たこさんウインナーなどいたってどこにでもあるようなお弁当に見える。

葉月の箸が卵焼きに向けられ持ち上げられた。そのまま葉月の口に運ばれる。

弥生もお弁当を食べようと、ピンクのバンダナに包まれたお弁当をかばんから取り出す。

バンダナの結び目に手を添えたとき、動きを止めた。

ご飯をほおばろうとした葉月が、眉間にしわをよせながら放り込む。

「何よ、動きとめちゃって。お弁当食べないの？ それとも噂、気にしてるの？」

「だ、だって……気になって仕方ないんだもん」

弥生は口を尖らせると、ためらいながら結び目を解き始める。

見かねた葉月がある提案を弥生に投げかけた。

「だったら、真相確かめる名目で、ここにつれてくればいいじゃない。そしたら、ついでお弁当食べられし、何かわかるかもしれないじゃない？」

葉月の提案に、無邪気な子供のように顔が輝く。

その手があったか！

「そうか！ それならいけるかも！ ありがとう！ほんとに、ありがとう！ 葉月って頭良い〜！」

そのはしゃぎようは完全に子供だ。だが、本人は意識していない。噂の審議が確かめられるというだけで、頭に入ってこない。

さっそく睦月に声をかけるべく、睦月を探す。しかし。

睦月の席の周りにはクラス的女子で囲まれ、近づく事が困難になっていた。人数は約四、五人といったところか。

スリジエも同様、男子に囲まれ大人気ぶり。スリジエの場合は睦月の倍の数に囲まれている。

睦月をとり囲む女子達は睦月に対し一方的に質問攻めをしていた。

「ねえねえ！ 睦月君って、彼女とかいるの？」

「前の学校はどこにいたの？」

「どんな女の子が好み？ 私なんてどお？」

「ちよつと！ 抜け駆けなんて反対！」



ち、近づけない……！

睦月に聞くとかそれどころではない。むやみに近づいたら女子が「抜け駆け」とか思われて、怒ってきそうだ。

「あの噂が嘘だったらしいのに……」

仕方がなくあきらめて、弁当を食べるしかなかった。

自分の席に戻った弥生は弁当のふたを開け、いただきますと手を合わせる。ゆっくり箸箱に手を伸ばしたときだった。

「春野さん」

弥生が右隣を向いた先にはスリジエがたっていた。その表情は陰しい顔をしていた。なにか重要なことでもあるのだろうか。

「春野さん、ちょっと話があるの」

スリジエが顔を弥生の右耳に近づけささやく。

「ここじゃ話せないから、一緒に来てもらえるかしら？」

「話……？」

弁当を食べようとしたときに話しかけられたため、躊躇する。

弥生はスリジエのことも気になっていた事もあったので、急いで弁当をしまう。

「わかった。じゃあ、行こうか」

スリジエにそう返事をする、弁当を夢中に食べる葉月に言い残す。

「ちょっとスリジエさんとお話してくるね」

「……へ？ お弁当はどうするのよー」

「あとで食べるよー！」

弥生はこのあと何が起こるかわからないまま、スリジエのあとを歩いて行った。

## 屋上

弥生とスリジエは無言のまま屋上へとたどり着いた。網フェンス側にスリジエが、屋上のドア側に弥生が立つ。一メートルほど離れて互いに見つめる。二人の間に秋風が吹く。

先に口を開いたのはスリジエだ。

「春野さん、いえ、あんたに聞きたいことがあるの」

「聞きたいこと？」

「そう。あなたがチェリーお姉様と対決した日の事を聞きたいの」

スリジエの目は獣のような鋭い目で弥生を映していた。

「さあ、答えて！」

スリジエの気迫に押されたためらうも、弥生は逆に質問する。

「答えるけど……その前に聞きたい事があるの」

「何？」

スリジエは逆に質問されて怒りを覚える。

「あなたと、チェリー、さんの関係は？ どうして私とチェリーの対決が知りたいの？ その理由を教えてほしいの」

悩んでばかりじゃ駄目だ。まずは気になったことは本人にぶつけてみるのが先決だ。

「お願い！ 理由を知っておかないと、なんか、良い気分じゃないというか……」

弥生の願いに聞かないという顔で受け流すスリジエ。

それでも駄目で元々で言っているんだ。たとえ無理だとしても話を続けた。

「ちゃんと理由聞いたら、あの日のこと話すから！」

弥生が言った言葉を聞き逃さなかったスリジエが、まぶたをかすかに動かす。

スリジエはようやく言葉を放つ。

「……その言葉に嘘はないでしょうね？」

スリジエが耳を傾けてくれたことに心底うれしさをにじませる。

「うん！ 嘘はないよ！」

弥生は力強くうなづいた。

二人の間に再び秋風が吹く。間に割り込むように。

ちよっと、生意気すぎた……かな？

スリジエが何も言ってこないの、余計に不安になってくる。

スリジエの顔を覗き込もうとしてみた。

だが、余計怪しまれると思い、覗き込むのをやめる。

ほぼ同時にスリジエは話を始めた。

「私があんたにあの日のことを聞きたい理由……それは！」

獣のような眼光でにらみつけ、指を突き付ける。

「あんたが戦って死んだ、チェリーお姉様の仇をとるためよ！」

「それと、私が何の関係が……」

スリジエは弥生に全部言わせなかった。

「あるわ！ あんたがチェリーお姉様を殺したんでしょ！ そんな

いい子ぶったって無駄よ！ 私には全部お見通しなんだから！」

「違う！ 私じゃない！ 違うの！」

弥生は大きく横に首を振り、否定する。

彼女は誤解している。あの日、チェリーに何があったのか。

チェリーがどれだけ妹さんを想っていたか。彼女は気づいていない。

全部言えば誤解だつて解けるはず。

「あの日、確かに私は戦ってた。睦月さんをたすけるために」

「どうして、冬川君が出てくるのよ？」

「チェリーさんの相棒が、私の宝玉を狙って睦月さんを人質に取っ

たの。シャルロットという男が」

「シャルロットですって！？」

「チェリーさんはそれを私に知らせるべく、わざと自分がやったよ

うに見せて私と自分と戦わせたの。

でも、誰かに狙われていたみたいで、氷の魔法で死んじゃって…

…」

スリジエの両手が握られ拳が出来ていた。二つの拳は振るえ、我慢しているようだった。

スリジエが独り言のようにつぶやく。

「信じない……信じない、絶対信じない！ 私のたった一人のお姉さんであるチェリーお姉様が、あのシャルロットと手を組んでいたなんて、絶対信じない！」

スリジエの言葉に驚愕した。あの、スリジエが、チェリーと実の姉妹？

じゃ、チェリーが言っていた、同じ年の妹さんって、スリジエさなんだっの！？

シャルロットのことを知っていたことよりも、チェリーとスリジエの姉妹関係に混乱していた。

わ、私は……。

どうしたら……。

薄々そうじゃないかと思ってはいたが、ほんとに姉妹だったなんて。

弥生はこの後、一言もしゃべることが出来なかった。

\*

### 三年一組の教室

スリジエと弥生がいない教室では、ここぞとばかりに女子が睦月に殺到していた。

睦月も対応に困り果てていた。スリジエと弥生がいないせいかな、

男子群は暇を感じ始める。中にはふてくされる者もいる。

どうしたらいいのだろうか。

押し寄せる女子の群れ。まるでチーターに狙われるシマウマのようだ。

「ねえねえ！ 私と一緒に学校回らない？」

「いや、私が学校案内してあげる！」

「睦月君は勉強得意？ 私が教えてあげようか？」

「ちよつと！ 一人で抜け駆けは駄目って言ってるでしょーが！」

「押さないでよ！ マジ痛いし！」

女子の中には殴り合いになる女子もいれば、少しでも距離を縮ませようとする者もいる。

これが海堂町の中学校か……。

思っていた以上のところだな。

はあ、とため息を漏らすしかない。

「そういえば、弥生がいないよね？」

一人の女子が話題を変えた事で他の女子達が教室中を見渡し始める。

春野がいないだと？

睦月もその言葉で弥生がいないことを知った。当然だろう。無数の女子に囲まれた状態じゃあ、教室を見ることがすら出来ないのだから。

「あと、スリジエっていう転校生も見当たらないね？ どこ行ったんだろう？」

「さあ？ あの子は別に気にすることないんじゃない？」

「そうよね？ あれだけ男子にモテまくりなんだから、誰か一人はついていつてるだろうし」

「そうそう！ 自分がかわいいからってこび売ってるのよ、きつと！」

スリジエは女子達にはあまり良くは思われていないようだ。

転校生の男子と女子でこれだけ差が出るとは。

再びため息をつく。ため息をつかないでいられようか。

「そういえば、あのスリジエって子、ヒトじゃないんじゃないかってウワサだった！」

「嘘？　ほんとに？」

「ほんとに！　海の中から出てくるのをみたって言うってた子がいるし！」

睦月は海の中というフレーズに反応する。海の中？　海の中といったら人魚しかない。

もっと詳しい情報を得るため、耳をそばだてる。

「それに、誰かを探しているみたいだし。なんか誰かを殺そうとする目だったって！」

「そんな子がうちのクラスに来て大丈夫なの？」

「怒ったらすぐ襲い掛かってきそうだし」

女子達の話聞いて、睦月の額に汗が落ちた。

「まずい！　春野が危ない！」

誰かを探しているというのはおそらく春野のことだろう。あのスリジエっていう少女、どこか作られたような身体をしていた。もし、ウワサが本当だったとすれば……。

スリジエが春野を呼び出したに違いない！

春野！

睦月は女子に囲まれたまま、身動きが取れなかった。

＊

再び屋上にて

スリジエは違う意味で興奮していた昼休み。あと十五分と迫っていた。

それは睦月のことである。あの睦月とある世界の王子様と小耳に挟んだからだ。

スリジエにとって睦月が王子というのは願ってもないことだからだ。

なぜなら、王子といえはいずれその国の国王となる継承者。そうなればもし、睦月と結婚となれば、自分は王妃。つまり玉の輿である。顔ものの好み。クールな性格も好み。なによりある国の王子様。理想の男性像にぴったりはまるのだ。これは是非仲良くしなければ！ふと不安がよぎる。

あの話はあくまで噂話だ。本当かどうかは確証がない。もしも、ということだつてある。

確認とつてからの方が安全策だ。

確認するつたつて、どうやって……。

スリジエはあることを思いつく。

そうだ！

春野弥生に聞いてみればいいんだ！

春野弥生は冬川君にもっとも近い存在。なにかしら、睦月のことはある程度までは知ってるはず。

なら、知っている事の中に睦月のウワサに関連することがあれば、あのウワサは本当だということになる。

ほんとならもっと調査して証拠を見つけた上で断定した方がいいのだけれど。

そう悩みながらも聞くことに決めた。

「ねえ、春野さん。聞きたいことがあるのだけれど」

「ほえ？ 聞きたいこと？」

なんだろう？ というような目で出迎える弥生。ぼーっとしていたのか、反応が遅れたよう。

つくづく危機管理のない女だ。いざというとき、誰かに襲われてもおかしくないような隙の<sup>すき</sup>有様<sup>ありさま</sup>。

だが、妙に疑われるのはまずいので、本心を押し殺すことにした。

「冬川君についてなんだけど」

「む、睦月さんについて!？」

弥生は目を見開いて口を開ける。下の名前で呼ぶのか。

「そう。冬川君がとある国……世界の王子と聞いたのだけれど、ホントかしら？」

「えっ。そっちの噂？」

弥生は別の噂だと思っていたらしい。まあ今は、そんな事どうでもいいが。

「どうなの？ 答えて」

「う……う、うん。本当だよ。睦月さん、よくは知らないけどあるヒトを探しにこの町に来たみたいだし。この町は初めてでいろいろ大変だーとかは言っていたけど」

スリジエはその瞬間弥生に背を向け、小さくガッツポーズする。

よっしゃ！ 後はクイーンの座に向けてひとつ走りするだけよ！  
だが、両手が目に入ったとき、両手から屋上の床が透けている事に気がついた。

顔をしかめ、気難しい表情を見せる。

もう、時間が……ない。

わかつてはいたが、刻々と時間は迫ってきてるようだ。

やはり、魔法によって作られた身体はもろい。ましてや、一度死んだ人間が生き返るなど無謀すぎたのだ。

それに……。

春野弥生は本当に姉の仇なのか。

話していくと仇に見えなくなっていく。中身に闇の部分がないのだ。悪の心が存在していないためだろうか。仇と信じることが出来ない。

やはり、チェリーお姉様の言う通り、真実は別にあるというのだろうか。

スリジエの心は迷いが生じ始めていた。



## 弥生とねじれていく事実

葉月は屋上につながるドアの前まで来ていた。もちろん、屋上に弥生とスリジエの会話を聞くためだ。あのスリジエとかいう女、相当なつわものだ。魔力の質も高ければ、魔法の技術もずば抜けている。自分でさえも勝てるかどうかわからない。とにかく油断できない。そのためにはあの女の情報が必要だ。情報が多ければ有利なるはず。対応も出来るはず。

しかし、このまま話を盗み聞きしようとするとかならずどこかでボロが出てしまう。さらに悪ければ、盗み聞きのことが弥生たちにはばれてしまう。そうなってはおしまいだ。計画が丸つぶれになり、御前様に顔が合わせられない。

だったら、姿と気配を消して盗み聞きすればいい。

両手にそれぞれ紋章のような印が浮き出ると指先から透明になり、数秒には全身目に見えなくなる。これで準備は完了だ。

口元が微笑むも、廊下を歩く生徒には葉月の存在すらわからない。弥生とスリジエに気づかれぬよう、注意を払ってドアを開けた。完全に開け切ってしまうと余計に気づかれるので、数センチばかりの隙間すきましか開けない。

隙間からはスリジエの後ろ姿と、弥生の頭部が少し見えるくらいだ。

二人は話し合いの最中らしい。

「あるわ！ あんたがチェリーお姉様を殺したんでしょ！ そんな、いい子ぶったって無駄よ！ 私には全部お見通しなんだから！」  
「違う！ 私じゃない！ 違うの！」

何かもめているよう。何をもめているのか。また弥生がしでかしたのか。

弥生が口を開いた。

「あの日、確かに私は戦ってた。睦月さんをたすけるために」

「どうして、冬川君が出てくるのよ？」

「チェリーさんの相棒が、私の宝玉を狙って睦月さんを人質に取った。シャルロットという男が」

「シャルロットですって!？」

「チェリーさんはそれを私に知らせるべく、わざと自分がやったように見せて私と自分と戦わせたの。」

でも、誰かに狙われていたみたいで、氷の魔法で死んじゃって…

…」

シャルロットですって!？ しかも、あのチェリーは氷の魔法で殺された!？

チェリー・ムーンといえば、南の海の中で彼女に右に出るものはいないといわれる魔法の強さを持つ。もちろん、戦闘の技術だってトップクラスだ。彼女が一撃でやられたということは、彼女以上の強さを持つものということになる。それぐらいの強さであれば、リアの父親が御前様くらいだろう。

まさか、御前様が？

葉月の頬に一筋の汗が落ちる。

いや、そうだったら必ず私に知らせるはず。それが無いのは、あれは嘘という事に……。

だが、あの弥生が嘘をつくはずがないし、だとしたらあれは本当だという事になる。

葉月が考え練っているうちに、スリジエの声が漏れた。

「信じない……信じない、絶対信じない！ 私のたった一人のお姉さんであるチェリーお姉様が、あのシャルロットと手を組んでいたなんて、絶対信じない！」

あのスリジエがチェリーの妹ですって？

葉月は目を疑うような発言だったが、次第に納得していく。

だとすれば、あの魔力の強さも納得がいく。チェリーも魔力自体が強かったし、それを武器に戦っていたほどだ。スリジエもチェリーと同じ血を引いているからか、かすかに漏れる魔力からはチェリ

―をも凌ぐほどの強さが感じられる。それは変わらない。やはり南の海一族は油断できない。

私に計画を成功させられるだろうか？

スリジエはあのチェリーの実の妹で、魔法の技術も高い。

一方で弥生は魔法の技術は乏しいが、あの夢石の継承者だ。夢石の後ろ盾があるというのは大きい。なんたつて世界を支配できるほどの力だ。

どちらにしてもまともに戦えば負けるのは確実だ。計画を成功するのは難しいかもしれない。もしかすれば自分の身までもが危ういかもしれない。でも。

目を見据え、前を向く。

たとえ無謀だとしても成功させてみせる！　だって、御前様がついているんですもの！

スリジエの後姿を見つめながら、メラメラと闘志を燃やした。

\*

スリジエが迷いを見せ始めた頃だった。屋上にあるドアからかすかな足音が聞こえた。

階段を駆け下りるかのような足音。足音は段々遠ざかっていく。

後ろを振り返り、ドアのほうに視線を向ける。魔力を使い、人の気配を読み取った。

しまった！　話を聞かれてしまった！

ちいつと舌打ちし、悔しがる。

まずい。誰かに話を聞かれていたよう。聞かれていたのだとすれば、正体がばれた可能性が高い。そうなれば、退学になるかもしれない。そうなってしまうえば何のためにこの学校に入学したのか意味がなくなる。

目の前に立つ弥生が不信に思い声をかけてくる。

「あの、スリジエさん？　どうかした？」

スリジエは我に返り、慌ててごまかした。

「えっ？　あ、ああ。何でもないわ。昼休みの時間はまだ大丈夫かしら……　って気にしていただけ」

スリジエの言葉に何の疑いもなく信じ込んだ弥生は、時計を探しまわる。

「そついえばそうだね……　時間、まだ大丈夫かな……。まだ授業が残っているから早めに切り上げないと」

弥生が時計を探しまわっている間、再び屋上の入り口を振り向く。神経を集中し魔力を消費しながら、足跡をたどり立ち去った人物を追う。

屋上につながる階段。階段を降りた先にある三階の廊下。

そこで途切れてしまう。まだそれほど遠くに行っていないようだ。それなら……。

確信を持ったときだ。

「スリジエさん？　具合でも悪いの？」

誰かに声かけられたためか、集中が途切れてしまった。その声はもちろん春野弥生だ。

「スリジエ……　さん？　ドアがどうかしたの？」

眉間にしわをよせて心配そうにする弥生の顔が映り、不信に思われていることに気づく。

そりゃあ、ずっとドアの方角をにらんでいたら怪しむに決まっているだろう。

「別に……　なんでもないわ」

スリジエはそっけない態度で視線を逸らした。これじゃあ、余計に心配させてしまうかもしれない。

案の定、弥生がさらに不安そうな顔で覗き込もうとする。

「どこか具合が悪いんじゃない？　この前も熱中症で倒れたし」

「大丈夫よ。あんたに心配されるなんて余計なお世話だわ」

そう。仇に心配されるなど余計な事だ。それなら正体がばれたほうがまだましだ。

ふと考えた。もしクラスメートに正体がばれたらどうなるだろうか。

この世界の者は海の世界に住む住人と違って、ファンタジーなど架空のものを信じない者が多い。

「絶対嘘をついている」

などといわれて終わりだ。あとはうそつき呼ばわりされるだけだろう。

私も、そんなことになってしまふのだろうか。うそつき呼ばわりされるのだろうか。

以前のように皆に遠のかれていくのだろうか。  
きゅっと口を閉めた。悔しがるのかのように。

クラスメートは私のこと、信じてくれるだろうか。

雰囲気は皆、いい人そうだった。特に男子軍団は。まあ、転校生だからってうかれていただけだろう。さほどたいしことではない。

だが、後ろ盾があるというのは大きいのだ。クラスメートがいてくれるというのは。

春野弥生のように。弥生はクラスでも人気者のようだ。それほど後ろ盾が大きいのだ。

私は……私は何があるの？

何かみんなを信頼してくれるようなこと、あるの？  
病弱で無駄に頭がいいだけの私が。

スリジエの頭の中に頭痛が走る。誰かに脳をつねられているような激しい痛み。

この感覚はまさか、これが『代償』といわれる……………、

スリジエの意識は再び異空間へと閉じ込められた。

＊

もうまもなく昼休みがあと十分ほどで終わろうとしていたころの屋上。

弥生はスリジエの顔色に変化があったため、また倒れやしないか不安でいっぱいになっていた。

なにかあったのだろうか。見た目は健康そうに見えるが、肌が色白で病弱そうに見える。

本人は大丈夫だと言ってはいるが、余計に不安になってくる。体調が悪くなったりしているんじゃないのか？ って。

お人よしだつて言われるかもしれないが、それでもいい。

具合の悪い人を放っておくことなんて、できない！  
たとえそれが戦った敵の妹だとしても！

そう、いえば……スリジエさんって。

ちらりとスリジエを顔を横目で見る。

そういえばスリジエさんも……人魚、なんだよね？ じゃあ、私のことも知ってるってことでもいいのかな？

いや、でも私の名前しか言っていないから、全部が全部知っているとは限らないし。

もしそうだとすると、私は正体を明かすことはできない。

人魚はヒトに正体を告げると泡になって消えてしまう。

たとえそれが人間になりすました同類の人魚だとしても。相手が人魚だと知らない限り。

気づかせることは出来る。しかし、自分の口で言うことは許され

ない。

胸がすっきりしない。正体を隠したまま、同じ同類であろうスリジエさんとお話するなんて。

はぁ、と暗い顔でため息をつく。

スリジエさんとお友達になりたい。でも、南の海と北の海は敵対同士。仲良くなることは許されない。王女であつてもだ。

私は前世でも王女という肩書きがあるせいか、友達と呼べるものは出来なかった。

簡単にいえば、王族の者達が許さなかったのだ。いずれ王国を継ぐという王女が友達など作つてうつつを抜かすなど許せるはずがない、と。

もちろんそれは南の海だつて同じこと。だとすればスリジエさんだつて…………。

だからこそ、スリジエさんとはお友達になるべきだ。

たとえ禁忌を破つてでも。

でも、スリジエさんはお姉さんを殺したのは私だと思い込んでいる。

私はやってはいないと理解させないとまず友達にはなれない。

でも相手はチェリーの妹だ。どう立ち向かつていけばいいのだろうか。

顔を上げたとき、黒い物体が弥生の左頬をかすれる。

闇に吞まれていきそうな、漆黒の色。これは、闇の魔法！

スリジエが放った魔法である。だが、私は今は、何もしやべっていないはず。

それなのにどうして…………。

「それなのにどうしてって顔してるわ」

スリジエの言葉に動揺し、しどろもどろになる弥生。

何か……変。まるで、別人のよう。

そう、もう一人の別の人格が入れ替わったような感じ。雰囲気も、目の色も変わっていた。私の気のせいだろうか。

「仇であるあんたに心配される私の気持ち、わかる！？ 侮辱しかないわ！」

スリジエの気迫は中庭で戦ったあのによく似ている。

「絶対許さない！ チェリーお姉様を殺したあんたなんか！」  
ど、どどど、どうしたらいいのかな！？

生憎屋上はスリジエと弥生の二人だけ。内緒で出てきたので誰かがやってくる見込みはない。葉月は自分よりもお昼休みに時間をつぶすタイプのため、屋上に来るかどうかわからない。もちろん、睦月にも内緒でやってきたから来てくれるかどうかは……。

スリジエが闇の魔法の構えをし始めた。

やばい！ 闇の魔法が来る！

だが、アクアシールドを張ろうとしたときには、闇の魔法は放たれていた。

黒い球体は空を切り、真っ先に腹部のど真ん中に命中。弥生はその場でひざまづいた。

っ、強い！

利き手の右で腹部を押さえるも痛みは晴れない。  
以前受けたときよりも、格段に威力が上がっている。このままやられ続けたらほんとに倒れてしまう。まずい。

でも、スリジエと戦うなんて出来ない。スリジエはチェリーの妹だ。スリジエにはまだチェリーの伝言を伝えてもらえない。伝えな  
いまま自分が倒れてしまったら今度こそほんとに……………。

かといってまた、逃げ続けるのは良い案とはいえない。体力の無駄なだけ。

けれど私はあんまり魔法は覚えていないし。

弥生の目はさまようように泳いでいた。





## 弥生と悪化していく事態

睦月は屋上へと続く階段前まで来ていた。刻々と昼休みが終わる時間が迫り始めた頃。

その時だった。かすかに残る魔力を読み取る。あきらかに尋常ではない魔力。あの夢石と同等の強さを持つ。スリジエだろうか。

数秒間考え込み、首を横に振った。

いや、違っだろう。もしスリジエであれば、弥生の魔力も残っているはず。それが無いということは、二人はまだあの屋上にいるということになる。だとすれば、この魔力の気配は誰のものだろうか。なにげに階段に目を向けたとき、誰かが階段から降りてくる足音が響く。睦月は廊下の窓側に移動すると、顔を見られないように後ろを向ける。

ちら見したときに顔を一瞬だけ確認できた。

あれは秋村葉月だ。その顔は険しそうに見えた。

何故があいつがここにいるんだ？ 秋村なら教室にいたはず。

もしかして、屋上で何か起きたのか？ だとすると一刻の有余ゆうよもない。

急がなければ。春野のことが心配だ。

スリジエが暴走しなければいいが……。

葉月に見つからないよう、忍び足で階段に近づく。

今度は葉月周辺で別の声が聞こえた。聞き覚えがある。同じクラスの誰かだろうか。

「葉月、ちょっと話があるの。いいかしら？」

その声は夏野皐月だ！ 二人は確か犬猿の仲で口も聞かないほどと聞いたが。

「皐月？ 何の用よ？ 今忙しいのよ。あとにしてくれる？」

葉月の声は不機嫌そうだ。

皐月が話を続ける。

「今じゃなきゃ、駄目なの。ちょっと……伝言をね」

伝言、だと？　どういう意味だ？

「伝言？　……わかった。でも少しだけよ」

二人が距離を置くように階段を下りていった。

睦月はため息つくと、額の汗を右手の甲でぬぐう。

なんだあの二人は？　本当に仲が悪いのか？　今の会話を聞いても仲が悪いようには見えないが？　まるで仲間同士で連絡を取り合うわけじゃないが、そんな感じのような雰囲気だったな。

あの二人にはきつと裏があるかもな。

一応調べておく必要があるそうだ。もしかすると、黒の人魚族と関わりがあるかもしれない。

睦月は不信感を抱きつつも、重い足取りで階段を上って行った。

\*

少し時間を戻して屋上が続く階段では。昼休みが終わる十分前。

葉月は階段を下りながら考えていた。スリジエのことである。

もし、スリジエが睦月さんに好意を持っているとしたら、まずい。相手が悪い。

だが。

いきなりやってきた女なんかよりも、少しでも長くいる私のほうが睦月さんのことをよくわかっていいる。まあ、さすがに弥生には負けるが。

考えていたときに、葉月の前に真剣な眼差しまなざしの夏野皐月が現れる。

「葉月、ちよつと話があるの。いいかしら？」

皐月が一体何のようだ？　報告ならまだ先のはずだが。

「皐月？　何の用よ？　今忙しいのよ。あとにしてくれる？」

葉月は不機嫌そうに答えた。

何故は私が皐月なんぞの話を聞かなければいけないのだ。それだけでも腹が立つ。

皐月が話を続ける。

「今じゃなきや、駄目なの。ちよつと……伝言をね」

伝言ってことはなにか事態が変わったときに伝えられる。

まあ、聞いてみる価値はあるかもしれない。

「伝言？ ……わかった。でも少しだけよ」

二人が距離を置くように階段を下りていった。

二人は中庭までやってきた。もちろん人目につかない場所にいる。  
「伝言って何？ 報告ならまだ先のはずでしょ？」

葉月の言葉に皐月は微笑み口にする。

「あの方……御前様からあんたにとって、伝言を預かってきたの。聞きたい？」

葉月は目を見開き、驚きの声をあげた。

「ご、御前様から！？ ちよつ、どういふことそれ！」

御前様が私に伝言がある？ どういふこと？ 何があったというの？

呆然と口を半開きにする葉月をよそに、皐月が小悪魔のような笑みで伝える。

「例の計画だけど、葉月、あんたにはおりてもらふことになったから」

なつ……それはどういふことだ？ 私が計画からおりる？

「お、おりるっ？ わ、私が？ ちゃんとわかるように説明しなさいよ！」

「まあ、つまり……」

皐月は葉月に近づき、耳もとでささやいた。

「用済みってことよ」

葉月皐月の言葉に、頭の中は真っ白となる。

「用……済み？ どうして……………」

御前様からの伝言が……私はもう必要ないって……。

皐月は葉月の顔を見るなりにやりと笑う。

「どうしてって、簡単にいえば、計画をまったく進めていないからよ。弥生を憎んでいるとはいえ、少し近づきすぎたわね。それに、計画の目的である全然『夢石の継承者』からはずすことが出来ていないし」

葉月から離れ、振り向く。

「さすがの御前様も相当お怒りのご様子だったわよー。だから、代わりに私が計画を進めることになったの」

葉月が否定するように大きく横に首を振る。

「う、嘘よ！ 御前様がそんなこと、言う訳……………」

だが、皐月は否定しない。

「嘘じゃないわ。これが、事実よ。ということで例のカード、私がいただくわね」

いつの間にか葉月から盗み取ったカードを、左手に持っている皐月。

あのカードは例の計画を進めるための重要なキーである。

「一応、伝言はしたわよ。そういうことで、じゃ」

私は……もう、いらない。御前様は私をいらないと……。

歩き去る皐月をただ単に見つめながら、立ち尽くす葉月だった。

\*

一方、屋上では激しい攻防戦が続いていた。

しかし弥生はスリジエと戦うのを迷っていた。本当にスリジエと

戦うのが良いことなのかを。

スリジエはチェリーの妹だ。チェリーが一番、大切に思っていると考えられる人物。

そんな人と戦っていいのだろうか？　ちゃんと伝えるべきものはちゃんと伝えておくべきなのではないだろうか。

“もし、妹に会うことがあるのならば、約束、果たせなくてごめんなさいと伝えてほしいの”

最期に耳元でチェリーに言われた。

その言葉を伝えるためにも、戦わずにスリジエさんの暴走を止める！

その時だった。

久しぶりにラリアの声がささやいた。

『弥生っ！　お願い、スリジエと戦って！　今のスリジエは敵よ！』

今の……スリジエさんは、敵………？

一瞬、頭の中が空っぽになった感覚。なにを言っているのか、わからない。

チェリーも私が戦っているときに亡くなった。それでも、スリジエも同じようになってしまうたら……。

出来ない！　私には……出来ない！

弥生と大きく横に首を振った。

その時、スリジエと目が合ってしまった。だが、スリジエの様子

が何かおかしい。

頭を抱えてもがくように、座り込んで苦しんでいる。息遣いも荒い。どうしたというのだろうか。

もだえ叫んだと思えば、おなかを抱えて苦しむ。どこかおかしい。病弱だからとかそういう問題ではなく、また別の何かが起きているような感じた。まるで別人格に変わったスリジエが壊れたように見える。

何が起きているの？ 何があったの？ どうして？

スリジエさんに声をかけたほうがいいだろうか？

弥生は意を決して、スリジエに声をかけてはみるが、

「スリジエさん、大丈夫……？」

「うるさい！ 黙れ！」

相手にしてはくれず。

まあ、当然と言うべきだろうか。

スリジエは赤い眼光で雄たけびを叫ぶ。叫んだ直後、現れた黒い玉が変形し剣に変化する。その剣を手に取り弥生をにらみつけた。何をするつもりなの？

弥生はぐりとつばを飲み込むと、後ずさりする。いやな予感が背中をよぎった。

明らかに攻撃の技術が上がってきている。もちろん、威力もあがっているだろう。もし、それに当たってしまったら、今度は体力が減るどころでは済まされない。

弥生が不安なのはそれだけではなかった。

黒い剣は青いもやを発しながら威嚇していた。それをそのまま自分に向けてくるなんてことは……。

案の定、弥生の予想は当たっていた。

スリジエが剣を強く握り、弥生に迫ってくる。

「春野弥生 絶対、許さない！ チェリーお姉様の仇！」

やばい！ こっちにくる！ な、なんとかしなきゃ！

弥生は必死で誤解を解こうとする。

「違う！ 私じゃない！ 私はただ……チェリーが心配で駆けつけただけで……」

「うるさい！ あんたなんか、あんたなんか 死ねえ！」  
聞く耳すら持たない。

ど、どうしよう！ このまま攻撃受けて、倒れちゃったりしたら………今度は生きて帰れるかなあ。

や、やっぱり、誰かに相談して助けを求めるしか……でも、卑怯だとかスリジエさんに言われたりしたらやばいし、かといって、攻撃をまともに受けるわけにはいかないし……。

ああっ。どうしたらいいの？

慌てふためき、屋上を見渡す。目はしどろもどろになる一方だ。

「春野弥生、死ねえ！」

スリジエの走るスピードが増す。弥生はスリジエの攻撃を左によけ、走り出す。

っていうか、これじゃあ中庭のときと変わらないじゃん！  
自分に言い聞かせるが、走り出した足が急に止まるはずもない。  
当然、攻撃をよけられた側も攻撃をさらに加速させていく。

「春野弥生、逃げるな！」

「そ、そんなこと言われても、あ、足が勝手に動いて……」  
弥生がつぶやいたとき、屋上に落ちていた小石に躓きこけてしま  
う。

まずい！ 今こけたら、攻撃を受けちゃう！

「逃がすものか！」

スリジエは剣を空に掲げ突進してきた。  
ど、どうしよう！

弥生の身体は恐怖で動かない。また、倒れてしまうのだろうか。  
今度は学校の屋上で……。もう、どうしようもないの？  
数秒目を閉じ続けるが、攻撃が弥生に当たった気配がない。どう  
いうことだろうか。

おそるおそる目を開けると、弥生の前に倒れる睦月の姿。



「む、睦月さん！ ど、どうして睦月さんが！？」

おそらく、弥生の代わりに攻撃をくらってしまっただけらしい。

「睦月さん！ 大丈夫？ しっかりして！」

睦月が目を開き、身体を自力で起こす。

「だ、大丈夫だ……今はスリジエをとめることだけ、考える」

睦月はそういつと立ち上がり、手中に炎を出しそれを使って幻影を作り出した。

弥生がみたことのあるチェリーのシルエット。スリジエのお姉さんだ。

そうか！ それを使ってスリジエさんを止める気なんだ！

睦月さんはスリジエは必ずなにかしらの反応はするだろうと読んだんだ！

炎で作りに出されたチェリーの幻影にスリジエは戸惑い動きを止める。

「チェ、チェリー……お姉さま？」

睦月の読み通りだ。スリジエが手から剣を放す。剣は床に落ちた瞬間、一瞬で消え去った。

幻影は役目を終えたかのように小さくなりながら消えていく。

弥生はスリジエに声をかけた。

「スリジエさん！ スリジエさん、聞こえる？」

睦月と弥生はスリジエが正気に戻るのを待った。

## 弥生と少女達のそれぞれの思い

スリジエの意識は黒い箱の空間に閉じ込められていた。音も映像もない。何が起こっているのかさえ、わからない。

だが、これが復活した者が払うべき『代償』なのだろう。

たとえ復活したとはいえ、ヒトは完全に復活することは出来ない。それが魔法で復活されたとしても。

だからそれを補うためのものが必要になる。それが『代償』だ。まさか私の代償が『人格を制限すること』だなんて。

こんな暮らしがずっと死ぬまで続くのか。こんなことが何度も引き起こされ、制限され続けるのか。

だが、そう考えていた矢先のこと。空間にわずかな亀裂が入り白い光が漏れ出す。それがきつかけとなつて、箱はこぼれるようにみるみる崩れていく。そのままスリジエの意識は光の中へと引きずり込まれた。

スリジエはまぶしさのあまり目を閉じてしまう。

再び目を覚ましたときには学校の屋上に戻っていた。まるで強制的に引き戻されたような感覚だ。

その時、一番初めに弥生の声が入ってきた。

「スリジエさん！ 元に戻ったんだね！ 良かった、本当に良かった！」

自分を心配するような声。仇のくせして私に始末されるという危機感がない。

それどころか私を心配している。どこまでもお人よしな奴だ。

そんな弥生の横には睦月までいる。どうしてまたここにいるのだろうか。

もしかすると、私が春野弥生を呼び出したというのを嗅ぎ付けてやってきたのだろう。

さすがはもう一つの世界の王子ね。

睦月はあまりしゃべろうとはせず、

「無事に元に戻ったんだな」

とだけつぶやく。

まあ、あんまり親しいというわけじゃないから当然だろう。

「どうして、元に戻したのよ……元に戻せたなんて一言も……」

それだけしか言葉に出せなかった。言葉に出そうと思っても急に戻された衝撃でうまく言葉が出せない。

「えっ。で、でも、睦月さんがスリジエさんを元に戻したほうがいいって。あのまま暴走し続けると、身体にものすごい負担がかかっているから危険だって」

弥生の言葉に思わず、「えっ」と声を漏らしてしまう。

ものすごい負担がかかる？　どういうことだ？　もちろん、本来の人格は別空間に閉じ込められるため、自分の体がどうなっているとか、負担がかかっているなど知るはずがない。

「それって一体どういうこと？　春野弥生、あんたが私を元に戻したんじゃないの？」

「ち、違ふの……睦月さんが炎でチェリーさんの幻影を見せて動きをとめて、元に戻したの。」

たとえ別人格であってもチェリーを大切に思う気持ちは変わらないだろうからって」

弥生の話に付け足すかのように睦月がつぶやく。

「まあ、その前に春野に対しての攻撃が上がっていたけどな」

あがっていた？　攻撃の精度、つまり攻撃のことだろうか。

睦月はスリジエの心の声が聞こえていたかのように話を続ける。

「ああ、そうだ。春野の話によると、前よりも数段とあがっていたそう」

つまり簡単にいえば、弥生を憎むあまり心と魔法がつながり、威力をあげてしまったらしい。

闇の魔法は魔力に反映されるが、もちろん、憎しみや悲しみの心にも反応する。

それがつよくなりすぎて威力をあげ、ついにはコントロールできなくなるまでに達してしまった。

それをぶつけるかのように春野弥生に攻撃を繰り返していたという訳か。

みじめだ。自分がやったわけじゃなく、もうひとつの人格が攻撃を繰り返すなんて。

まるで本来の人格は『もう一つの人格を発動させるためのスイッチみたいなもの』じゃないか。

「スリジエさん、どうか……したの？」

心配そうに眉をひそめる弥生に気がつき、何事もなかったかのようには振舞う。

「別に。……何でもないわ。っていうか、何故私があんたに心配されなきゃいけないワケ？ おかしいでしょ！」

突然興奮しだしたスリジエをなだめるように睦月が話しかけた。

「春野はただ単にまた倒れないか心配なんだ。図書館のときのように」

「そ、それは……」

スリジエは反論できない。それは確かにそうだ。あのときは歩きすぎて体力がなくなってしまったのと、暑さにやられたことだ。たとえ日傘をさしていたとしても、どこからか太陽の光は体に当たる完全に防ぐことは難しい。つまり倒れないという保障はないということだ。今のスリジエには。

「だからといってあまり興奮するのも良くない。あまり体が強いほうではないのだろう？ だったらなおさらだ。なるべく興奮しないよう抑えたほうがいい」

「どうして、そこまで……」

「少し心配というか、不安だったからな」

睦月は気まずそうな顔で目線を逸らした。

どうやら弥生のことがきになるらしい。まあ、私には関係ないがそれにしても、どうして冬川君はそんなにもこんな自分を気にし

てくれるのだろうか。

そう考えると体がぽかぽかと温くなる。この感情はなんだろう。初めて味わう感情。

これが、これが恋。私、私は　。  
スリジエは何かを決心したのか、弥生に指を突き付け宣戦布告する。

「春野弥生！ 私、今日からあんたとは恋のライバルになりそうだわ！  
わ！

私、あんと同じ人を好きになっちゃたみたい。だから、容赦なくアプローチしていくわ！ 覚悟するのね！」  
スリジエたちがいる屋上には不穏な空気が流れていった。

\*

学校が終わり自宅に戻ってから春野弥生はお風呂に入浴中だった。学校から帰ってすぐのお風呂が日課で、時間は入ってから三十分たち五時半となっている。普通はシャワーのみで済ませ、髪や体は夜のお風呂で洗う。しかし考え事で頭がいっぱいになり湯船につかったまなのだ。

それはお昼休みが終わる頃、屋上でスリジエが放った言葉。

春野弥生！ 私、今日からあんたとは恋のライバルになりそうだわ！

私、あんと同じ人を好きになっちゃたみたい。だから、容赦なくアプローチしていくわ！ 覚悟するのね！

それってつ、つまり睦月さんのことを……。

深いため息を無意識につく。

まさかスリジエにそんなこと言われるなんて。思いもしなかった。私は、私は……。

一体どうすればいいの!?

自分でも落ち込んでいるのか、悩んでいるのか、わからない。

でも確実いえるのは今後スリジエさんとどう接していけばいいか迷っているということだろうか。

弥生は風呂場の天井を見上げてみた。湯気のせいか、水滴がつき始めている。

再び視線を戻すと二度目のため息。

どうすればいいの? どう接していけばいいの? 明日から本格的な授業が始まるが、スリジエとは同じクラス。授業はほぼ一緒に教室で受ける。どんな顔すればいいのか。

スリジエは死んだチェリーの妹。チェリーが一番大事にしている少女。その少女は私をチェリーを殺したと思っている。

しかもスリジエは睦月のこと好きだと言い出してしまった。最初は友達になりたいって思っていた人がライバルみたいな関係になるなんて。さすがに友達になりたいなどうかつに言い出せなくなった。だが友達にはなりたくない。境遇がどこか似ているスリジエさんとは分かり合えるかもしれないのに。

けれどこのまま野放しにしておくとう度は睦月を取られてしまうという危機が生まれる。

睦月さんは自分のことを『好きだ』と言ってくれた。初めて男の人に告白されてうれしかった。それなのにスリジエさんに取られたら私の立場ってというのが……。

それはそれで嫌だ。

かといってスリジエさんとライバルになるつもりは……。頭の中がパンクしそうだ。私の中に天使と悪魔がささやく。

スリジエとライバルになって、スリジエを蹴散らしちゃい  
よ！

スリジエをライバルだと認めるべきだという悪魔。

駄目よ。まだ相手のことをよくわかっていないのに安易に認  
めちゃ駄目。

一度話し合ってみるべきよ。

話し合ってみたほうがよいと提案する天使。

一瞬、悪魔に傾けた。しかしよく考えてみた。

そもそも今日の昼休みはスリジエと話をするはずのが、途中から  
バトルになり睦月がとめてくれて何故かスリジエに宣戦布告された  
まま終わった。まとも話をしていない。詳しい話を聞いてから判断  
した方がよさそうだ。

弥生は天使の意見に賛成することにした。私の中にあつた悪魔は  
消えうせた。

スリジエとは恋敵になるかもしれない。またスリジエさんに攻撃  
される可能性もあるだろう。

それでもスリジエさんと友達になりたい！　そしてチェリーさん  
の伝言を伝えてあげないと！

湯船から立ち上がると天井を仰ぎ見ながら拳を握った。

＊

夕食が終わった秋村家の自宅。葉月は自分の部屋で考え事をして  
いた。ベットに仰向けになり複雑そうな表情で天井を見つめる。

私が用済みだなんて……。

臆月に呼び出されたかと思ったら自分は用済みだという、計画か

らずされる話だった。

今でも信じられない。御前様が伝えるようにと皐月は言っていた。ということは御前様が判断したことということになる。御前様の判断は絶対だ。誰であろうと逆らう事は出来ない。もちろん葉月でさえも逆らえない。

ということは用済みは本当の事、事実ということだ。

でも、ありえない。私が用済みだなんて。計画はちゃんと進んでいたはずだ。もちろん幹部の皆さんや御前様にも報告は毎回してある。それなのにはずされるなんて。

信じたくない。信じられない。

でも……。

嘘じゃないわ。これが、事実よ。

皐月は嘘じゃないと。事実だと言った。これが本当に事実ならば認めるしかない。

それでも信じたくない。御前様からの伝言が用済みの伝言だなんて。

御前様、どうしてですか？ どうして私がはずされて、皐月が代わりに任務を遂行するのですか？

何かの間違いですよね？ 私は、私は本当に用済みなのですか？聞きたい。御前様の口から本当のことが聞きたい。そして嘘だと言ってほしい。

それはでたらめだと。

連絡したい。御前様と。

けど、連絡するために必要な例のカードは皐月が持って行ってしまった。

これじゃあ、連絡しようがない。



連絡法としては小型の通信機に最新型のカードをさしこみ、御前様につながる番号を四桁入力すればつながる。しかし、あいにく手持ちには旧型のカードしか持ち合わせていない。

もちろん、最新型の通信機に旧型のカードを差し込んでも起動はしない。

けれども元をたどれば同じ通信機に差し込むカード。もしかしたらという可能性もある。

ごくりとつばを飲み込み、恐る恐るカードを持った手を通信機に近づける。

少しずつ、少しずつ前へと進める腕。緊張した手に汗がにじみ出てきた。

やばい。機械は水に弱い。ちよつとした水でも壊れてしまう。急いで差し込まないと。

目前に差し掛かったところで見えないバリアがカードを弾き飛ばす。弾き飛ばされたときにわずかに流れた電流。まるで完全に旧式カードを拒んでいるかのような反応。

やはり駄目か。この通信機は最新式のカードでなければ起動しない。

それはわかっていたのに。わかっていたのに。連絡をとりたいという衝動が抑えられない。

葉月はもどかしい思いを抑えたまま通信機を凝視し続けた。

\*

住人が寝静まったと思われる真夜中。車ひとつ走らない国道。街頭すらない暗黒の歩道。

周りの住宅地は明かりをつけているところはない。

そこに廃墟と化した五階建てのビルで人に見つからないよう入っ

ていく少女。葉月に御前様の伝言を伝えた夏野皐月。背中には小ぶりのリュックが背負われている。

三階まで階段で上った直後座り込む。リュックをおろし、小型の機械を取り出す。

葉月が持っているのと同じ通信機である。シャツの胸ポケットから葉月から奪ったカードを取り出す。

そのカードを差込口に差込み、電源スイッチを入れる。通信機が起動し映像が映し出される。映像の中には会議室と思われる場所が映し出された。その映像は一瞬で消え代わりに男性の顔が映される。表情は硬い。歳は五十代半ばといったところだろうか。

皐月は映像越しで男性に頭を下げた。

「すみません、御前様。カードは取り戻したのですが、例のモノは手に入らず……」

男性は表情が硬いまま話す。

「そうか、やはり駄目であったか。まあ、よい。葉月のもっているものはそのうち奪えばよい」

「それで、例のことは一応葉月に伝言しておきました」

「そうか。それならいい」

男性の声に悲しみやさびしさは見受けられない。

「それで例の計画は順調かね？」

「はい。もうレベル三まで達し、あと少しでレベル四に到達するところです」

「それはいい。計画さえ成功すればあとはどうでもいいが」

皐月は御前様の言葉に疑問を感じた。まるで計画以外のことは興味ないって感じた。

それじゃあ計画を進める人間も興味ないってことに……。

それよりもあの葉月が計画からはずされたなんて考えられない。

葉月は計画をすすめるメンバーの中でもっともエリートラインを走る優秀なメンバーでもある。そんな葉月を外すなんて計画に支障が出ないか不安になるくらいだ。

でもまあ、葉月が失態を犯してしまったことは事実。それは仕方がないこと。

御前様と呼ばれた男性が皐月に命令を下した。

「皐月、次のことだが、春野弥生とスリジエという少女を監視してもらいたい」

「弥生とスリジエ……？ 弥生はまだわかりませんが、何故スリジエまで監視を？」

「実はスリジエはあのチェリーの妹らしく、何をしでかすかわからないのだ。何せ魔法で強引に復活させた死人だからな」

皐月は御前様の話に形だけうなづき、言葉を発す。

「……はあ、かしこまりました。次の任務も追行していきたいと存じます」

報告を終えるところで御前様との通信が途絶えた。

今頃葉月はどうしているだろう。御前様と連絡を取りたくてそわしてなからうか。

まあ、連絡できたとしても計画のメンバーに入ることは難しいだろうが。

葉月の様子を考えながら次の作業に取り掛かった。

\*

次の日の海堂中学校では本格的に授業が始まった。

弥生も前学期と変わらず登校するが、明らかに前学期とは違うところがあつた。

スリジエと睦月という転校生が入ってきたことだ。睦月が転校してきたのはうれしい。

もちろん、スリジエが転校してきたのも心底喜びを感じる。

だが、昨日スリジエに言われた言葉がいまだに頭から離れず昨日

はよく眠れていない。

春野弥生！ 私、今日からあんたとは恋のライバルになりそうだわ！

私、あんたと同じ人を好きになっちゃたみたい。だから、容赦なくアプローチしていくわ！ 覚悟するのね！

ああ！ どうしたらいいの！

一応スリジエと話をすると言めたはいいが、やっぱりどうすればいいか迷ってしまう。

こういうのはやっぱ友達とかに相談した方が良かった系？

顔が汗まみれになりながらごくりと生唾を飲み込んだ。

でもなあー、これはあくまで私とスリジエさんとの問題。第三者を巻き込むのはちょっと……。

弥生はこのあと難しい顔のまま午前の授業を受けた。頭がいつぱいで授業に手をつけられずそのまま午前の授業が終了。もちろん悩みが抜けることはなく、お昼休みを迎える。

これからどうしよう。スリジエさんになんて言おうか……。

最初にどうやって声をかけるかが問題になるが……。

右肩に手を乗せられ声をあげる。

「ひゃあああ！」

肩をすぼめるとゆっくり顔を後ろに向ける。

まさかスリジエさんが？

顔を見上げた瞬間全身の緊張が解かれた。そこ立っていたのは秋村葉月だった。

「なーんだ。葉月か、びっくりした」

葉月が弥生の言葉に不機嫌そうにしながらつぶやく。

「びつくりしたのはコッチよ。何、急に声をあげちゃって。私が心臓止まりそうだったわ」

「ご、ごめんなさい……」

小さくうずくまり反省すると再び葉月の顔を見上げる。

「どうしたの？ 急に。何かあった？」

「どうしたもこうしたもないわよ。弥生、あのスリジエとかいう女、睦月を狙っているっていう噂が立っているらしいの」

「えっ。あつ、そ、そうなの？」

弥生はスリジエが睦月のことを好きだと知っているため動揺が隠せない。

葉月は呆れた顔で弥生を見おろす。

「そうなの？ って相変わらずのん気娘ねー。スリジエって結構の美人って評判でしょ？ しかも睦月くんも顔がいいし、『お似合いのカップル』になるじゃないかってみんな焦ってるわ」

お、『お似合いのカップル』か……。

た、確かに……。

「それに、睦月君はどこかの王子様という噂もあるらしいからみんな睦月君をゲットしようと思死なのよねー。さすがについていけないわ」

む、睦月さん、モテモテなのね……。

弥生の心に氷の刃が突き刺されたような、胸の痛みを感じた。

む、睦月さんはスリジエさんのこと、どう想っているのかな？

もしかして睦月さん、心が変わったとか？ ないよね……？

「あら？ あのスリジエとかいう女、睦月君に近づいているっぽいわね」

葉月が発した言葉に反応すると、急いでスリジエの姿を探す。

数秒かかってスリジエの姿を発見。葉月の言うとおり、睦月の席に一直線だ。手には何やらお弁当のような包みを持っている。

私、あんたと同じ人を好きになっちゃたみたい。だから、容赦なくアプローチしていくわ！ 覚悟するのね！

ほんとにアプローチし始めた！？

まさかと思いながらスリジエを観察する。他の女子も弥生と同じようにスリジエを凝視していた。

スリジエが睦月の前で止まると、睦月に一言。

「私と一緒に弁当食べない？」

す、スリジエさん、ホントにホント、アプローチをし出した

！

ど、どどど、どうしよ

！？

口を開けたまま遠くでスリジエたちを見つめながら、石のように固まる弥生だった。

## 弥生と現れた男・ベエモット

このままじゃ、睦月さんが……取られちゃう！

弥生は教室内で、スリジエが睦月とお弁当を食べようと誘っている場面を眺めていた。

自分もかばんからお弁当を取り出してはみる。だが、取り出してどうするかはまた別の問題だ。

しかし、スリジエをそのまま放って置くと睦月と一緒に弁当を食べることになってしまうだろう。それだけはなんとしてもさけたいけれどすでに睦月さんに声かけて時点で危ない感が出ているし……  
…やっぱ睦月さんに声かけてみるべき？

うーん、と首をかしげ悩みこむ。

いや、悩んでいても仕方が無い！ 一か八か勝負だ！

何かを決めたように縦に首を動かすと前へ突き進む。向かうのはもちろん、睦月の席だ。

睦月が座る席の前にスリジエが立っていた。その間に割り込むように立ち止まると一言。

「ちよつ、ちよつといいかな？」

スリジエと睦月が同時に弥生の顔に視線を向ける。

スリジエが最初に口に出す。

「一体何の用？ 用なんてないはずでしょ？」

弥生は気まずそうにスリジエから視線を逸らすと、睦月を一目する。  
る。

「あ……いや、スリジエさんにじゃなくて、睦月さんに用が……」  
「俺にか？ ……何か用か？」

睦月は何かあったのだろつかというような、少々不安な目で弥生を見上げた。

「どうした？ 何かあったのか？」

「たいしたことじゃ、ないんだけど……お願いがあつて」

「お願い？　なんだ」

「あ、あのっ……よ、よかったら……お弁当、私も一緒に食べたい  
な思って！」

弥生が放った言葉にいち早く反応したのはスリジエだった。

「どうして、あんたも一緒に食べなきゃいけないわけ？」

スリジエ眉をひそめ、警戒するように弥生を見つめている。自分  
と睦月がそれ以上仲が良くなるのが気に食わないからだろうか。か  
すかに歯軋りのようなこすれる音が聞こえた。

「不公平よ！　おかしいじゃない！　こんなの！」

「ええっ」

弥生はスリジエに不公平だといわれ本気で傷つき、ショックで身  
体が固まってしまう。

スリジエと睦月の顔を交互に見ながら、言い訳するように反論す  
る。

「そ、そんな……不公平だなんて。わ、私はそんなつもりじゃ……」

「そうでしょ！　絶対そうでしょ！」

自分でさえも何故怒鳴られているのかわからない。なんだか話が  
ずれてきているというか、ぐだぐだになってきているというか……  
とにかく、スリジエさんは私の何かが気に入らないから怒ってい  
るかもしれないけど。

そんな私とスリジエさんを傍観していた男子たちが噂をしはじめ  
る。

「なあ、スリジエちゃんが春野を怒鳴ってるぞ」

「すげー顔だなあ、スリジエちゃん」

「案外嫉妬深い性格だったりして」

男子たちが自分の噂をしていると気づいたのか、突如怒鳴るのを  
やめたスリジエ。

ある意味助かった。これ以上ヒートアップしたらどうなるかと思  
った。

ほっと胸をなでおろしたとき、睦月が口を開いた。



「春野」

弥生は振り返り睦月の顔を見下ろす。

「なあに？ 睦月さん」

「弁当、一緒に食べるんだろう？ だったら、立ってないで誰かの椅子借りて座ったらどうだ。スリジエもそうだが」

「え……？」

弥生とスリジエが同時に声を漏らした。

それってつまり……。

「わ、私も一緒に食べてもいいって事！？」

「だからそうだといってるだろ？」

睦月はやれやれとあきれるようにため息を漏らす。

「あ、ありがとう！」

弥生に笑みがこぼれた。よかったあ！ これでなんとかスリジエさんのアップローチが少しでも防げるはず。

弥生とスリジエは近くの席から椅子を借りるとお弁当を机に置く。スリジエの表情はどこか不満そうだ。

弥生が椅子に座ったとき、教室の入り口が開く。担任の荒川先生だ。息切れが激しく、急いで走ってきたらしい。

荒川先生は弥生たちに一直線にやってきた。一体どうしたというのだろう。

お弁当の包みを開けている最中に弥生は荒川先生に声をかけられる。

「春野さん、お弁当食べようとしているところ悪いんだけど、ちょっといいかい？」

「荒川先生、何ですか？ 何かあったんですか？」

弥生の質問にどこか言いづらそうな荒川先生。よっぽどのがあつたに違いない。

荒川先生が言葉を発した。

「実はね……春野さんにどうしても会いたっていう男の人が来るんだ。校長室に。だから校長室まで行ってくれないかな？」

「ええ！？」

弥生に頭をなぐられたような衝撃が走った。

「やっとお昼ご飯なのに！ 睦月さんとお弁当なのに！ なんて、なんで！？」

今さっき一緒にお弁当を食べる承諾をもらっただけに衝撃が収まることはない。

「あ、あのその男の人ってどんな人ですか？ 名前とか……」

「んー、確か『ベエモット・ムーン』さんだったかな？ 四十台半ばって感じの優しいような人だったよ」

「ベエモット・ムーンですって！？」

何故か近くに座っていたスリジエが立ち上がった。立ち上がった拍子で椅子が床に倒れる。スリジエは椅子には目もくれていない。

「す、スリジエさん……どうかした？」

スリジエにおそろおそろ尋ねてみた。また怒鳴られるのではと思い、自分の声の感じはどこか怯えているように聞こえた。

まあ、確かにまた怒鳴られるかも？ とか思っている自分がいるけど……。

「……別に。何でもないわ。急に大声をあげてごめんなさいね」

スリジエは何事も無かったかのように椅子を元に戻す。そのまま座りお弁当を開き始める。

あれ？ 怒られない？

弥生は首を傾げた。スリジエに怒鳴られない理由を聞くのもどうかと思い、心の中でつぶやくだけにとどめた。

荒川先生に視線を戻し、質問する。

「荒川先生。さっきの話なんですが、その男の人ってまだ校長室で待っているんですか？」

「ああ。ずっと待ってるよ。だから悪いけど、今すぐに校長室に向かってほしいんだが」

ええ！？ そんなあ！

しかし、待ち人を待たせるわけにはいかないし、それに校長室で

待つてるといことは校長先生も一緒にいたりするかもしれないから……。

「……わかりました。今すぐ校長室に向かいます」

弥生に落胆のため息が漏れ出す。

「春野さん、悪いね。ほんとはお昼ご飯、食べ終わってからのほうが良かったんだけど、相手の男性がとうしても今じゃないと駄目なんてごり押ししてくるからね。校長もさすがに戸惑ってはいたけど」

睦月とお弁当を断念しないといけなくなった弥生に荒川先生の話は入ってこなかった。

そのあと、とぼとぼとゆっくりと校長室を目指し、教室をあとにした。

\*

まさか、本当に『あの男』がやってくるなんて……。

スリジエは教室でお弁当を食べていたお昼休み時間。目の前にはもちろん睦月がいる。最初は春野弥生も一緒に弁当を食べるはずだったがとある男に呼び出され出て行ってしまった。私も春野弥生も、睦月と親睦を深めるために一緒に弁当を食べるわけだが。しかし、その弥生はいない。つまり実質睦月と二人でお弁当を食べるという目的は果たしていることにはなる。

それなのだが、喜ばしくない。何故かちつともうれしくない。

それはあの男がやってきたから。

あの男とは。

ベエモット・ムーン。

私とチェリーお姉様、そして母親を捨てた父親。

自分の私利私欲のために私達家族を捨てて、城から出て行った男。ベエモットの目的は「世界征服」だ。そのためなんでもやる男だ。

私達家族を捨てた男がある日、母親が失踪した直後に再び現れた。もちろん、目当ては母親の財産だ。許せなかった。一度は恋仲になった母親をまるでモノを扱うようにいいまわるあの男を。

それから私達、私とチェリーお姉様をおもちやのように扱うようになった。

だから、私達はあの男から逃れるために南の海へ戻った。

一度担任にあの男の詳細を聞く必要がありそうね……。

スリジエは教室から出ようとする荒川先生を呼び止める。

「あの、荒川先生、ちよつといいですか」

スリジエが声かけたことで荒川先生は立ち止まり振り返った。

「どうかしたかい？ スリジエさん」

スリジエは勇気を振り絞って荒川先生に質問を投げかけてみる。

「ちよつと聞きたいことがあるんです。春野……弥生さんに会いたい男の人について」

「春野さんに会いたい男の人？ ……ああ、あの人だね。それがどうかしたかい？ その人とは知り合いなのかい？」

荒川先生に逆に質問返しされ、ごまかし笑いを浮かべるスリジエ。

「えっ。え、ええ、そうなんです。知り合いなんです。こう見えて」

「へー。以外だな。それで何が知りたいんだい？」

「あの、その男の人、先生に何か言ってきたんですか？ その、春野弥生さんに会いたい理由……とか」

荒川先生は考え込んでいたが、なにか思い出したのかしゃべり始めた。

「ああ！ そういえば言っていたよ。確か……『春野弥生さんにと

うしても伝えたいことがあるから会わせてほしい』って言ってたな。どうしても伝えたい事っていうのが気に掛かったけど」

どうしても伝えたいこと？ まさかそんなはずはない。

あの男と春野弥生が知り合いなワケがない。何せ、一度も二人とも会ったことがない知らない者同士だからだ。

それに、他人のために動く性格じゃない。他人のために動くとしたらあいつらのためにしか動かない男だ。

何が目的なの？ あの男は。

ベエモットの目的が気になり考えずにいられなくなる。

考え事に集中するスリジエをよそに荒川先生と睦月が会話はし始めた。

「荒川先生、何かと大変ですね。急に来客に詰め寄られて……」

「まあね。あの男の人の剣幕といったら、怖すぎるったらありやしないね。娘がいるとかいつていたけど、あの言動じゃ本当に子供を愛している父親の目じゃなかったね。」

俺も一応娘がいるけど、あそこまではないよな」

「そうなんですか？ そんなにひどいんですか？ その人」

「まあね。確か娘さんが二人いるって言っていたね。そのうちの一人が確かこの学校に……」

荒川先生が言いかけたとき、スリジエが大絶叫して阻む。

「あ　　！　　そつ、そういえば、荒川先生。他になにか言っていないませんでした？ な、何でもいいんですけど」

あの男と私が親子だなんて他人に知られてはまずい！ あんな男が父親なんてばれたら、イメージダウンだ。

それが知られる前に話を変えよう！

「そういえば言っていたというか……やたら聞いてきたことはあったなあ」

スリジエは考え深そうにする荒川先生に言い寄る。

「やたら聞いてきたこと？ それは何ですか？ 教えてください！」

「確か、この学校に『別の世界から王子』が通っているだろうから、

その生徒の名前を教えろって」

荒川先生の言葉でそのことが睦月のことを指していると一瞬でピンとくる。

あの男が冬川君のことを知っていますすって？ まあ、昔母さんが研究していたのがその別の世界のことだから、母さんから聞いたんだろうけど。

でも、何故？ 何故王子を探す必要があるの？

その時、スリジエの背中に虫唾が走るような汗が流れた。

まさか、冬川君を探すこともあの男の計画に入っているわけじゃあないわよね。

よりもよって私の父親が王子を狙っているだなんて知れ渡ったら大変なことに……。

一応、春野弥生に会いたい理由は伝えたいことがあるとか言っていたらしいが、他にもなにか言っているはず。

スリジエは荒川先生に質問した。

「荒川先生、春野さんに会いたい理由、他になにか言っていたり何かはしてたりは……」

「そういえば、『春野弥生がふさわしいものか確かめたい』とかワケわからないこと言っていたなあ」

なんですって！

その言葉で父親の目的が春野弥生だという事に気がつく。

あの男の目的は春野弥生が、夢石を継承するのにふさわしいか調べること。

そのために……わざわざ自ら出向いて。そのついでに王子の調査だ。何か情報が見つければ、幻といわれる『もう一つの世界』につながる大きな手がかりになるだろうと踏んだからだ。

まずいつ！ 春野弥生が危ない！

あの男はすでに校長室で待っている。そして、春野弥生は今校長室に向かっている最中だ。校長室に行けば校長が出たところで春野弥生を襲うだろう。あの男がいつもやる手だ。

急いで校長室に向かわなければ！

スリジエは立ち上がり、お弁当をほったらかしたまま教室を飛び出した。

「スリジエさん！？ どうしたんだい！」

荒川先生の声はスリジエには届かなかった。

\*

## 校長室

「あのー、校長先生。一応来ましたけど……」

弥生はドアの前でおどおどしながら立っていた。弥生の前にはソファーに座る校長先生と校長の向かい側に一人の男性が座っている。年齢は四十代後半あたりだろうか。肩幅が広く胸板も厚そうだ。しかし顔は初めて見る顔だ。この人が何故私なんかに会いたいんだろう？

弥生が戸惑っていると校長先生から話を切り出される。

「実はね、この人は君のクラスにいるスリジエさんのお父さんなんですよ」

「へー！ そうなんですか！」

この人、スリジエさんのお父さんだったんだ！ だからスリジエさん、名前聞いたとき反応したんだ。

……あれ？ でも、あの反応はどちらかというと……。

「どうかしましたか？ 春野さん」

「い、いえ！ なんでもありません！」

校長に声かけられとっさに何事もなかったかのような顔でごまかす。弥生は呼吸を整え本題に入った。

「それであの、そのスリジエさんのお父さんが何故……」

「そのことについてはスリジエのお父さん本人に聞くといいでしょう」

「あの、何故……」

弥生が言いかけたとき、男性は半ば強引に自己紹介を始める。

「自己紹介が遅れました。わたしの名前はベエモット・ムーンと言うものです」

あれ？　なんか、ごまかされた？

「ちよつとした研究をしていました。昔は一人で遺跡や洞窟などに調査しに行ってたのですが、今は妻に手伝ってもらいながら今の研究に励んでいるところです」

具体的なことがないため、どこからつつこんでいいのが困り果てる。しかも内容がぐちゃぐちゃのような気が……。

「それで、娘は元気にしてますかな？」

弥生は「えっ」と声を漏らし、ベエモットの顔を見つめる。

私のことかと思ったら今度はスリジエさんのことに？　一体この人は何者？

校長がこの場にいることもあつてか、軽く答えた。

「はい。元気に登校してます。クラスの人気者です」

というか、これは担任の役目なのでは？

その時、気のせいだろうか。ベエモットさんが齒軋りをしたように見えた。

どこか悔しそうな感じだ。まるで娘に嫉妬しているかのよう。

しかし、校長は全く気づかない。笑顔でベエモットと会話している。

その校長が立ち上がり一言、弥生に告げた。

「ここからは春野さんとベエモットさん、二人きりで話したほうがよろしいでしょう」

ええ！？　ちょ、校長先生！？

驚きというより、待つてほしいという感情が真っ先に噴出す。

待つて、待つて！　この人とはまだ二言、三言しか話してないの



に自信がないよ！

もうちょっと盛り上げてから出て行ってよ！ 私どうしたらいいの！？

弥生が心の内で叫んでいるうちにも校長はあっさりと校長室から出て行ったしまった。

でも、なんだろう。この胸騒ぎは。なんか嫌な予感がする。以前遭ったような厳しい戦いに再び遭う気がする。

スリジエさんのお父さんだから？ それとも。

ベエモットが口元に笑みを浮かばせる。

「やっとな……二人つきりになれましたな」

「え？」

弥生が振り返ると、ベエモットが立ち上がった状態でこちらをにらみつけた。

な、何？ 何？ もしかして、私の予想当たっていたりなんかは

……しないよね？

予想があたったら嫌だからね！ 絶対。

けれども、不運にもその予想は当たってしまった。

「これで、あなたが本当に夢石の継承にふさわしいか確かめられる！」

ベエモットは戦闘の構えをしたかと思うと、弥生の足元に魔方陣が浮かび上がった。

みた事のない魔方陣だ。闇が弥生を喜んでいるかのようだ。

魔方陣の中から光のつるが数本伸びると弥生の身体にからみつく。しまった！

ふりほどこうとするもふりほどけない。相手はスリジエ以上の実力をもっているかもしれない。魔方陣を呪文を唱えず現せるのは相当な高度の技術が必要になるからだ。

な、なんとかしなくちゃ。でも、どうしたらいいの？

光のつるをふりはらおうとする弥生を見て、ベエモットが感心の声をあげる。

「ほお……。なかなかやりますな。さすが、北の海の王女様だけの事はある」

弥生は思わずベエモットの顔を見て反応してしまう。

何故それを？ どうして私がラリアだと知っているの？ 誰にも話したことはないのに。

「何故自分の正体を知っているのか、そんな顔をしていますな」

まるで私の心の中を読んだような口調だ。

「どうして、どうして知ってるの！」

「どうしてって……あなたがラリア王女の生まれ変わりだと、海の世界ではほとんどで知れ渡っていることだからですよ。ラリア王女」私の、正体が……すでに海の世界に知れ渡っている？

「まあ、当然でしょうね。あれだけ派手にシャルロットと戦っていたのだから」

シャルロットのことも知っている！？ つまり以前のことはみんな知っているということになる。

でも一体何者なの、この人は。油断は出来ない。

「目的は何なの？ 何が目的で私に会いに来たの？」

「おやおや、相当警戒されているようですね。まあ、いいでしょう。そんなに気になるのなら教えて差し上げます。教えないでよくと、あとで暴れられたりでもされてはこまりますからな」

その笑顔はどこか新月のような暗黒の部分が顔を出したように見えた。

「とあるお方に頼まれましたな。春野弥生を調べてこいと。まともに夢石を扱えないくせに夢石を壊し、それでもなお『継承者の座』についているのはおかしいとね。生まれ変わって無駄な知識を溜め込んで損しておられるようですし」

夢石が壊れてもまだ私が『夢石の継承者』？ それはどういうこと？ 前世で国王様から聞いた話だと一度夢石が壊れると『夢石の継承者』からなくなると。一度継承者でなくなるともう二度と『夢石の継承者』にはなれないと。それなのにまだ私が『夢石の継承者』

だなんて。

「だから、あなたのためにも夢石の力はこちらがいただこうと思いましてな。夢石が壊れたといっても、すでに夢石の力はあなたの魔力と一体化されておられるようですし」

ベエモットはそうしゃべると、魔方阵の魔力を増やし、力を強めた。魔方阵が強くなったことで、光のつるもより深く弥生の身体に絡まる。

「ということではあなたには『夢石の継承者』からはずれてもらいますよ。いまさらその光のつるから離れようとしても無駄です。あきらめなさい」

そんな……。そうすると私は、私は……。どうなるの？

私は、私は……………。

「断るわっ」

弥生はベエモットの目を見据えて断言した。

夢石を渡すものか。私の分身ともいうべきものを、得たいのしれないに奴に渡すものか！

守ってみせる、夢石を！

弥生とベエモットのにらみ合いが続いたのだった。

## 弥生とベエモットの計画

弥生は校長室でベエモットとにらみ合いの最中だった。攻撃したくても身動きがとれず、相手がどう出てくるか予測不可能だからだ。

相手はスリジエの父、ベエモット・ムーン。

スリジエ以上の実力を持っているということは確か。だが、闇の魔法を使っただけでもあらゆる属性の魔法を習得しているらしく、水の属性の魔法しか覚えていない弥生にとっては難しい。

なぜなら、必ずしも水の属性に有利な属性の魔法が出てくるとは限らないからだ。

相手は相当自分の事をよく調べているらしく、私が水の属性しか覚えていないことも知られているだろう。

そうなればむやみに自分が不利になるような魔法は使わないはず。

とは言っても、またひとつ疑問が浮かんでしまった。

もし私が『夢石の継承者』がどうか確かめに来たのなら、私を襲わなくてももっと別の方法があったのではないかということ。

もしかしてまだ他に理由があったりは……なんて、私の思い違いかもね。

弥生が考えていたとき、ふいをついてきたようにベエモットが攻撃を繰り返す。

闇の魔法と風の魔法を組み合わせた融合魔法を仕掛けてくる。融合魔法は二つの魔法を合体させる魔法で、威力もそのまま受け継が

れるため、普通の魔法より威力が倍増する。

身動きが取れない中、攻撃があたれば危険だ。

まずい、よけなきゃ！

よけようと周りを見渡す。そこに黒い球体が風に乗って分裂していく。

それってありなの？

しかも丸み帯びた球体は風の気流で楕円型に変化を遂げる。複数の球体が突如消え、弥生にあたる直前で姿を見せた。

嘘ー！　ずるいよ！　そのやり方！

はっと弥生が気がついたときには弥生の腹部や太もみに食い込んでいた。球体は食い込んだまま、消えていった。わかりやすくいえば、はじけ飛んだといったほうがいいだろうか。

弥生はもだえ苦しみ、痛みに耐える。その痛さは包丁で腹部を刺されたような感覚。

死んでしまうのというくらいの痛さ。

どうしよう。私まだお弁当食べてないから、身体が悲鳴をあげてる。

「おや。まだ……生きていたのですか。それに、夢石は身体から分裂していないようですし、結構しぶとい方ですね。もう少し強めでも大丈夫でしょう」

ベエモットは手元で何かを組み合わせている。弥生に背を向けているため、何の作業をしているかはわからない。

だが確実にいえるのは、次の攻撃準備をしているということだけだ。

次当たれば気絶するどころではなくなる。スリジエさんのときよりもはるかにこっちの方が危機感を覚える。

何か、何かいい方法は……考えなくちゃ。

アクアアローで攻撃、は駄目だ。  
手が封じられて出来ない。

アクアシールドでも……駄目だ。  
アクアシールドは防御魔法だが、身動きが取れない状況で使うと  
上手く発動しない。

弥生はそこで思考が止まった。

って私が覚えてる魔法、それだけだあ！

ガンとショックで固まる。自分でもあきれてしまうほどに。  
ど、どうするの、私！？ 私こんなところで死んじゃうの！？  
私、嫌だからね！

というか、校長先生もこの校長室が戦闘に使われてるって気づか  
ないのかなあ？

音を聞いただけでも何事だろうと思うはずなのに。

大丈夫かな？ こんなときに第三者がやってきてしまったりする  
けど……。

さすがに漫画の読みすぎか。

ため息を漏らしたとき、ベエモットが魔法を発動させるための準  
備を行っていた。

弥生の顔に目を向けると、口元に笑みを浮かばせる。

「本当はこんな真似はしたくはありませんでしたが、あのお方のご  
命令なので仕方あるまい。

残念だが、君から強制的に夢石の継承者から取り消せてもらおう！  
何、何なの？ さっき言っていたこととあんまり変わってないとい  
うか……。

簡単に言えば、どうということ？

つまり、私の中から夢石が消えるということ？ そうなったら、

夢石は誰かに悪用されてしまう……！

っていつかあのお方って誰なの？

「死ねい、春野弥生！」

ベエモットが弥生に向けて強制魔法を発動しようとしていたときだった。

「待ちなさい！」

校長先生でもない女の子の声がこだました。弥生が耳にしたことのある声だ。

弥生が入り口に身体を方向転換すると、ドアを開けて立っているスリジエ・ムーンの姿。

ハアハアと息を切らし、手の甲で汗をぬぐう。教室からここまで走ってきたのだろうか。

「スリジエさん！ どうしてここに？ 睦月さんとお弁当食べていたはずじゃあ？」

だがスリジエは弥生の問いには答えもせず、ベエモットと弥生の間に立つ。まるでベエモットからの攻撃を防ごうとしているみたいだ。

ベエモットはスリジエがいることに気にもとめない。それどころかそのまま強制魔法を発動させてしまう。

「スリジエさん、危ない！」

弥生はスリジエまで巻き込んでしまったことに罪悪感が芽生えた。しかしスリジエは防御魔法のバリアで強制魔法を受け止める。その顔はベエモットに対しての怒りに見えた。

「どうして、この春野弥生にまで手を出すわけ？ 父親だけどあきれたわ！ まさかあいつらの手先になっていたなんてね！」

スリジエはベエモットをにらみつけた。対するベエモットは全く動じない。機械のようだ。

弥生は「え？」と声を漏らす。

しかも弥生の頭はもうパンパンに詰まってパンク状態。なにがなんだかわからず、首をかしげるしかない。

「許さないからね、絶対！ 私達家族を捨てたあんたなんか！」

つてええええ？ ベエモットさんがスリジエさんとその家族を捨てたあ！？

ど、どういうこと！？ 一緒に暮らしているとかじゃないの？

でも、スリジエさん。なんかつらそう……。スリジエさん親子は仲が悪いのかな？

ふとしたを向くと魔方阵が消え、光のつるもなくなっていた。スリジエさんがやってくれたのだろう。

スリジエさん……。

ベエモットとスリジエ親子の様子をただ見つめることしか出来なかった。

\*

助けることが出来たみたいね……。

教室から校長室まで全速力で走ってきたスリジエ。目の前には一番会いたくなかった父親がいる。

さつき校長室に入ったとき弥生にかけられていた、ベエモットの魔法を解除する呪文を唱えたおいた。その呪文は無事発動したようだ。ベエモットには気づかれている可能性もあるがいい。まずは春野弥生をベエモットから守ることだ。

あの男は自分の願いのためなら何でもすることだ。それがあの男のポリシーだ。

ポリシーだけならシャルロットとさほど変わらないが。

となればあの男は私がいようと関係ないはず。目的を達成させる



まではあきらめない。

でもあの男と戦うなんてまっぴらごめんだ！　なぜならあの男の方が一枚上手。しかも実力も上。勝負はどうなるか目に見えている。自分が負ける勝負なんてやりたくもない！　しかし……ここで食いつ下がると親子の勝負に春野弥生を巻き込んでしまう。ベエモットはそれを望んでいるからだ。

春野弥生が勝負に巻き込めば夢石を奪うチャンスを作れるから。あの男の目的は春野弥生が持つ夢石のみ。春野弥生がどうなろうと知ったことではない。

私が春野弥生をかくまえば夢石を取られないよう、時間を稼ぐことは出来るはず。

「もし、春野弥生に手を出すなら許さない！　春野弥生には近づくな！　あと、もう一つの世界の王子もだ！」

スリジエは人差し指をベエモットに向けて指す。

そのベエモットは相変わらず笑顔で受け流す。

「おやおや。せっかく、久しぶりに親子の対面なのにそれひどい言いがかりだ。気のせいですよ」

やっぱりむかつく。っていうか、キライ！　大キライ！

「気のせい？　ならば何故、春野弥生に制御魔法をかけた！　気のせいならば、そんなことはしないはず！」

「時代劇を体験してるようですよ。これはこれで悪くは無い。一度体験してみたかったですよ、時代劇」

「話を逸らすな、馬鹿親父！」

スリジエ得意の闇魔法『黒い玉』をベエモットにお見舞いする。ブラックホールのような球体。いくつも生み出される黒い玉はすべてを飲み込んでしまいそうな、深い漆黒の色をしていた。

しかしベエモットは手を止めるように前に出すと、すべての黒い玉を弾き飛ばした。

「春野弥生に近づかないというのは無理がありますよ。何せ『夢石の継承者』にふさわしいか審判しないとイケませんからね」

つまり完全拒否だ。そっちがその気ならこっちだつて……。

「やっぱりスリジエは昔と同じ病弱のままですか。さみしいですね」

その一言にスリジエの堪忍袋の緒が切れた。

私が寂しい？ 冗談じゃないわ！ あの男に寂しいって言われる筋合いなんないわ！

「わかったわ！ あんたがそんなに分からず屋だなんて！ むっかしからそうよね！ 自分の願いしか考えていない！ 本当は私達娘のことなんてただの道具としか思っていないのでしょ！」

「さあ？ 何のことでしょうか。意味がわかりませんが」

子供のような無邪気なベエモットの笑顔。その笑顔だけでもシャクにさわる。

「春野弥生は……春野弥生は、私を助けてくれた恩人なの！ その恩人を手を出そうとするなら、親子の縁を切る！」

後ろで「ええっ」と弥生の声を耳にした。後ろに弥生がいることをすっかりわすれていた。

対照的にベエモットが「へえ」と感嘆のような声をもらした。

「そうですか。その子に助けてもらったのですか。それはよかった。もし何かあったとき、どうしたらよいかと考えてしまうところでした。これで召使いが一人減らなくて済んだよ」

スリジエは感情押さえ込もうと、小さく齒軋りした。

やっぱり娘としてみていないじゃない！

「そりや当然だろう。何を勘違いしているんだい、スリジエ。お前は私の下で永遠に奴隷として働くことを約束してくれたから、言っているまでのこと。そうだろう？」

ベエモットが奴隷ということを同意を求める。しかしスリジエは全否定した。

「違う！ あれはあんたが、勝手に決めたんでしょ！ 変な魔物な

んか使って！」

「実の父親に口答えするとは……けしからん奴隷だな」

「口答えも何も、事実じゃない！」

「スジリエ、お前はどうか。もう時間は残されていないのだろうか？」  
ベエモットの言葉に嘘偽りはない。そう、自分に与えられた時間はあとわずかしかない。

スリジエは反論できなかった。その時ベエモット側から気配を感じた。ただの気配ではない。

これは……まずい！ ベエモットが再び強制魔法をかけようとしている！

今度は私もろとも制御するつもりだ！ あの男を怒らせてしまったか。

いや、正確には私が入ったときからすでに怒っていたのかもしれない。その怒りを押さえ込んで任務追行しようとした。そんなころだろう。

そんなことより春野弥生を連れて非難しないと！

今度の強制魔法は他の魔法も組み合わせている。下手に対立すると校長室を吹き飛ばしてしまう。

「春野さん、こっちへ！」

弥生の左手首を捕まえると駆け足で校長室を出る。

二人が校長室を出ようとしていることに気づいたベエモットは、魔法の発動を早めた。

「スリジエ、春野弥生！ 逃がすものか！」

スリジエは校長室を出た直後すばやくドアを閉める。

「そんなの、お断りよ！ 春野弥生には手出しさせないわ！」  
はあはあと息切らし、体力に限界が来た。

荒い息を吐くスリジエに弥生が不安そうな声で話しかける。

「スリジエさん、保健室……行っただ方がいいんじゃない？」

「大丈夫よ……これくらいなんともないわ」

「そっ、なの……？」

弥生をちら見して弥生のことが気に掛かった。ベエモットからの攻撃に当たっていないだろうか。

「それより春野さん。けがはない？」

「う、うん。なんとか……怪我はしてないけど」

どうやら今さっきの魔法にはかかっていないようだ。なんとか安心だ。

安堵のため息をつく。弥生に忠告する。

「いい？ あのベエモットっていう男には気をつけなさい！ あの男、何を仕掛けてくるかわからないわ。

あと、別にあんたを許したわけじゃないわ。ベエモットが来てるというから来たまでのこと。ライバル同士というはお忘れなく。じや」

スリジエは重い気分のまま、廊下を歩き出す。

これから本格的に大変な事が起きそうね。

その背中はどこかさびしさを表しているようだった。

\*

「……という訳なんだけど、睦月さんはどう思う？」

すべての授業が終わり放課後。通学路を睦月と帰りながら昼休みのことを打ち明けていた。

放課後になったとき、睦月と一緒に帰ろうと誘ってくれたため、一緒に帰っているのだ。

左右対称に向かいブロック塀。ブロック塀から顔を出す木々。夕焼けに照らされてオレンジ色に染まる。どこか秋の寂しさを感じる。

左側には曲がり角がある。

「そうか。春野に会いに来た人、スリジエの父親だったのか」

「うん、そうなの。でもその人スリジエさんを奴隷とか言っていて……」

まるで娘として見ていないような発言。しかもその表情は楽しそうに見えた。

ベエモットさんってどうしてスリジエさんを奴隷にしたんだろう。約束って一体何？

「スリジエさん、なんかつらそうだった。ベエモットさんと話しているとき。ま、まあ、あれは言い争っていたって感じかな」

あははーと顔を引きつらせた。

「でもベエモットさんが言っていた……」

スリジエ、お前はどうか。もう時間は残されていないのだから？

「って言ってたことが気になって」

弥生が悩んでいると、睦月が問いを投げかける。

「ベエモットさんって、お前が思うほど強いのか？」

「うん、強いと思うよ。あのスリジエさんでさえ、悪戦苦闘していたって感じだし」

「そうか、強いのか……」

睦月は足を止めた。弥生は睦月の一步前で立ち止まり振り返る。

「それがどうかしたの？ 睦月さん」

「いや、気になったんだ。もし何か計画を考えていて、今回は小手調べとして来ていたらまずいなんて。本格的に動き出したとき、対応するとき負けるとやばいからな」

「はあ、なるほど……」

言葉で理解するも、頭の中は理解していない。

「スリジエさん、大丈夫かなあ……」

「心配か？」

「うん、体のこととか、ベエモットさんのこととか……」

「今は注意して過ごすしかないだろうな。何をするかわからない以上。一応ベエモットさんのことについては調べておくよ」

「わかった。私も私がやれることをやっておく」

睦月を援護するように力強くうなづいた。自分もただじつとするなんて出来ない。

スリジエさんがどんな思いですごしてきたかも気になるし。スリジエさんには悪いけど。

それにもし睦月の身に何かあった場合、睦月に話をした私にも責任がある。

弥生のうなづきに睦月は小さく微笑む。

「そうか、春野らしいな」

「えっ。私……らしい？」

頭が全くついていない。何か悪いこと言った？ 機嫌を損ねるような。

「私、変なこと言った？」

睦月がおかしそうにクスクスと笑い始める。

「いや、言ってない。気にするな」

空を見上げ何かを確認するような動作をした。

「春野、ここでお別れだ。この曲がり角の先に家がある。すぐそこだ。じゃ、気をつけて帰れよ」

「う、うん。また明日ね、睦月さん」

「ああ、またな」

睦月はそのまま左の曲がり角を曲がると、去っていった。

睦月を見送ったあと、弥生は角を曲がらず、まっすぐ進んだ。少しの間だったけど、睦月さんとたくさんおしゃべり出来たな……。

睦月の笑顔からベエモットの不敵な笑みに変わった。

ベエモット・ムーン。スリジエさんの父親。

スリジエさんの父親ということは、チェリーの父親でもあるということ。

そういえば、ベエモットさんとチェリーさんの仲はどうだったのだろう。

スリジエさんのように仲が悪かったのかな？ それともスリジエさんと同じように奴隷扱いされて……。

大丈夫かなあ、スリジエさん。悩んでないといいけど……。

弥生は家に帰るまでベエモット親子のことしか考えることしか出来なかった。

## 弥生ともう一つの世界の王妃

人の気配が感じられない真夜中十二時、槍<sup>やり</sup>のような雨が仕切りに降る海堂図書館。木々の葉は闇夜の漆黒にそまり、雨粒に打たれゆれていた。ところどころにできた地面の水溜りは、真夜中の空を映す。

図書館の外では警備員が見回りを続けている。図書館の内でも警備員が見回っていた。

どちらの警備員に見つからないよう、図書館内で調べ物をしている人影がある。

黒のスーツを身にまとったベエモット・ムーン。  
手にはページを広げた歴史本。

ベエモットがいる場所は関係者以外立ち入り禁止のエリアである。海堂町には人魚伝説が残っているためその手の資料もあれば、海堂町に関係したもので幅広く扱われている。中でも海堂町最大の大きさを誇るこの『海堂図書館』は調べ物するにはうってつけの場所だ。

「やはりこの図書館の資料は膨大だ。この図書館を選んで正解だったようですね」

ここに来たのはもう一つの世界についての情報を得るため。資料が山ほどある図書館を探していたためだ。

今日海堂町のとある中学校に目的のため出向いた。が、目当ての春野弥生には会えたが、計画実行のために必要な冬川睦月こと、「もう一つの世界の王子」に出会えなかった。

それじゃあ行った意味がない。わざわざこの自分自ら出向いてやったのに！

なぜ顔を出さない！ なぜ会わせてくれない！



しかし、そこで新たな問題が発覚した。それはもう一つの世界について、幹部が一向に情報を差し出してくれないことだ。まさか幹部に口答えできるはずもなく、やむなく自ら情報を得る選択をした。もう一つの世界の事情がわかれば、王子に接触するとき話し合いが楽になるだろう。

やはり「幻の世界」といわれるだけあって、もう一つの世界の資料はごくわずかしかのこっていない。それでも片っ端からもう一つの世界に関する本を集め、調べた甲斐があつた。ここ最近王妃が行方不明になっているらしい。最新の記述に書いてある。王妃行方不明とは書いてあるが、詳しい情報は載っていない。

「他にはあると良いのですが……」

いかつい顔の男が怒りに満ち溢れた声で、ベエモットにささやいた。

「何を調べておるのだ、ベエモット」

ベエモットが振り向くと、ホログラムで映し出された幹部の姿。

映っているのは一人ではない。約三人といったところか。

「こ、これは！ 幹部の方々ではないですか！」

「あなたはもう一つの世界の王子を連れ去るために、海堂町によこしたはずなのに……調べ物とは、情けない」

ウェーブがかった長い髪の女性が、呆れ顔でため息ついた。

「全くだ。何をしてるかと思つてわざわざ心配して顔出したつーのに、意味なかったようだしな」

引き締まった体を動かす男性は、あくびをする。どこか退屈そう

だ。

最初にベエモットに声かけた男は問いかける。

「ベエモット。計画は順調だろうな？ ヘマはしていないだろうな」

「はい、順調ですとも。今日は春野弥生に接触成功致し、しばし戦つてきました。思わぬ邪魔は入りましたが、肝心の春野弥生の夢石は日々力を取り戻しつつあります。計画実行までには完全回復するかと」

「そうか、それを聞いて安心した。ところで王子には接触できたか？」

「それが今日は接触できなかったというか、鉄壁のガードで会うことすら出来ませんでした」

「やはり駄目か。さすが王子とあって守りは堅い。だが、隙をつけばなんとかなるだろう。このまま計画を続ける」

「はっ！　かしこまりました」

ベエモットは幹部を会釈をする。ホログラムはベエモットの会釈を見届けると消えた。

「しかしまさか幹部の皆様が現れるとは……」

王子のことも気に掛かるが王妃についても気にはなる。幹部の皆様には王妃について聞けなかったが、なんらかの形で関わっていたりするのだろうか。まさか直接聞くことはさすがに出来ない。もっと他であたるか、それとも……。

ベエモットは悩み悩んで結論を下す。

「一応、もうしばらく調べるとしましょう」

そのためにも関連する本はコピーしておこう。手元にあった本を次々を複写し、体内に溜め込んでいく。

そこに見回りをしていた警備員が通りかがる。ベエモットを不信に思ったらしく、声をあげた。

「誰だ！　そこで何をしている！」

ベエモットは残念そうに、

「おやおや、見つかつてしまいましたか。残念ですね」

横に首を振った。そうしているうちにも警備員が続々集まってくる。

「仕方がありません。ここは一度撤収しましょう」

警備員がここぞとばかりにベエモットに殺到、ベエモットを捕まえようとする。

しかし警備員の目の前でベエモットの姿が瞬時に消えた。  
「き、消えたぞっ」

「どうなってるんだ……」

その場に残された警備員は互いに顔をあわせる。呆然とした顔で立ち尽くしていた。

その様子を外の木の上から眺めていたベエモットの姿。

「間一髪、と言ったところでしょかね。今度は場所を変えて調べていきましょう」

まあ、明日新聞等で騒がれるだろうが心配はない。何せ身元などわかりはしないのだから。存分に混乱するといい。

「さて……いい情報が見つかるといいですね」

にやりと笑った笑みは夜にかき消される。

ベエモットは空を見上げるとそのまま飛び去っていった。

\*

時間を戻して、夜八時ごろだった。春野弥生の自宅の自室。

「帰ってからずっとスリジエさんの事が気がかり……」

春野弥生は携帯電話で睦月と会話しながら、ソファでくつろいでいた。目の前のテーブルの上には、マグカップに入った飲みかけのカフェオレ。

今日の昼休みの出来事である。ベエモットと名乗る男が弥生に会いたいとやってくる、校長の話によりスリジエの父親と判明。校長が部屋から出たとたんベエモットに襲撃される。苦戦したまま戦闘が続いたが、途中でスリジエが乱入し弥生を助ける。スリジエの奮闘でベエモットから逃れてきたのだ。

そのことを睦月に打ち明けかえってきた弥生だったが、それでもなおスリジエのことが気になってしまう。そこに睦月からの電話。調べて少しばかりわかったというので、わざわざかけてくれたのだ。

睦月が何かを確認するように間を空けてから、弥生に調べた結果を話し始める。

「スリジエは以前は四人家族だったらしい。スリジエの姉は春野も知つての通りチェリーで、父親はベエモット、母親は研究者だったらしい」

「スリジエさんのお母さんは研究者？ 何を調べていたの？」

弥生が質問すると、睦月は困ったような声で答える。

「それが詳しい情報はある程度抹消されていてな。そこは不明なんだ。だが、“ある世界を研究していた第一人者”という肩書きを持っているみたいだな」

ある世界を研究していた第一人者……。弥生が知っているのは元いた世界である「海の世界」のみ。海の世界を詳しく研究していたということなのだろうか。

弥生は悩みながらも、思いを睦月にぶつけてみた。

「ある世界って「海の世界」の事かなあ？ 第一人者ってことは相当な功績を持つ人ってことかな？」

「いや、わかったのはスリジエが四人家族という事だけだ。ある世界が本当に海の世界のことなのかは詳しく調べてみないとわからない」

「そう……」

「スリジエも大変だっただろうな。娘として想われていない父親を持つてな。ああいう父親はろくに育てていないだろうしな、奴隷だつて言っているという事は。俺的には父親は信用できない」

まるで父親を毛嫌いするような発言。その言葉が頭の中につよく刻み込まれる。

「む、睦月さんのお父さんって、そんなに信用できないの……？」

睦月は父親の話を嫌うように即答した。

「ああ、まあな。全く信用できないな。あの、親父は」

どうやら本当に父親のことが嫌いらしい。どうして嫌いなんだろうか。

信用できないということは、何か信用できない要素とかあるということなのだろうか。

「どこか信用できないところとか……あつたりするの？」

その瞬間電話の奥が静寂に変わると、睦月は黙り込んでしまった。弥生は睦月が黙り込んでしまったことに罪悪感を感じ始める。

もしかして私、言っではいけないことを言ったりした？

だとすると、どうしよう！　また睦月さんに怒られる！？

なんて言って謝ろう！

頭をフル回転させたとき、あることを思いつく。

そうだ！　お父さんが駄目ならお母さんの話で切り出してみよう！　これも上手くいかないかも、しれないけど当たって砕けるだ！

「む、睦月さん、逆にお母さんは！　お母さんの話をしない！？　ね？」

「お母さん……？」

睦月の声がかすかに反応する。

弥生は睦月の機嫌を取り戻すため、必死で話しかけた。

「睦月さんのお母さんってどんなひとだったか知りたいの！　睦月さんを育ててくれた人だし！　だ、駄目かな！？　睦月さん！」

静寂は数秒間続き、ようやく睦月が口を開いた。

「……わかった」

弥生は緊迫感が解き放たれたことで全身でいきをする。

よ、良かったあー！

ど、どうなるかと思ったよ。

「それで睦月さんのお母さんはどんな人？」

「ああ、誰にでも優しくてな慈悲深い人だったな。まあ、天然でマイペースさが欠点だが。そのせいでけっこう騙されて苦労したところもあったな」

「へえー、じゃあ、睦月さんにとってお母さんはとっても大切な人なんだね！」

「あ、ああ。まあ……」

睦月は照れくさそうな声で返答すると、話を戻す。

「とにかく、ベエモットの件についてはもっと詳しく調べておく。何かわかれれば解決の糸口になるかもしれない」

「そっか。わかった、体には気をつけてね」

「ああ、じゃあな」

睦月との電話を切ると、ソファーにもたれかかる。マグカップに入ったカフェオレを飲み干す。

睦月さんの両親が……。

睦月さん、お父さんの話は嫌がっていたみたいだけど、お母さんの話はしてくれたなあ。

よっぽど好きなんだ、お母さんの事。

ふっと笑顔はにじんだ。

そういえば、睦月さんのお母さんってどんな人なのかな？

睦月さんは誰にでも優しくて慈悲深く、天然でマイペースだと言っていたけど。

一度会ってみたいなあ。いつか会えるかなあ、睦月さんのお母さんに。

弥生はそのまま眠りについていった。

\*

睦月の自宅の部屋。弥生と携帯で十分間会話し、電話を切った後はさらに十分が経っていた。

睦月は椅子に座り机と向き合い、ベエモットについてパソコンのインターネットで調べている最中。

弥生との約束である。弥生がスリジエのことが気になってしまう

と相談を受け、スリジエの家族から情報を得ようと思ったのだ。そうすれば、おのずとスリジエの性格や歩んだ人生が見えてくるはずとは思ったが。

まずパソコン自体使ったことなかったんで、電源入れるだけでも苦労した。キーボードに文字を打ち込むのもゆっくりだが、自分のペースで進める。

『ベエモット・ムーン』というキーワードを五分かけて打ち込みエントラーキーを押した。

しかし画面には“ヒットしませんでした”の文字。

「やっぱり駄目か」

睦月は落胆のため息をつく。その表情は疲れきった顔をしている。ベエモットというキーワードを入れてもなかなかヒットしない。ベエモットという存在自体が表ざたになってはいないからだ。

インターネットで調べるのは限りがある。もつと別の方法で調べた方がいいだろう。

例えば図書館で調べるのが一番手っ取り早い。

スリジエの家族に関することがないか、キーワードを変えながら検索していたときだった。

エントラーキーを押したとき、一件のサイトがヒットした。そのサイトのリンクをクリックする。

これは……！

それはベエモットの妻であり、チェリーとスリジエの母である河原雪江という女性に関するニュースについてだ。

睦月はそのニュースを詳しく目を通していく。すべて読み終わるとベエモットの計画を見抜く。

まさかベエモットの真の目的は……もう一つの世界！？

だからこの海堂町に来たのか！ もう一つの世界に通ずる扉を開けるために！

しかし今のあの世界は……。

過去の記憶を呼び覚ましてしまい、悔し涙を流した。右手の甲で涙をぬぐうと気を取り戻す。ズボンのポケットからシルバー色の携帯を取り出した。

そんなことよりも春野に伝えるか？

完全にベエモットの計画を防げることができると確証を持った上で連絡した方が……。

しかし春野と約束したんだ。何かわかったら伝えろと。知らせろと。

けどもう一つの世界のことを打ち明ける自信はない。どうすれば、どうしたらいいんだ。

睦月はパソコンの画面と携帯を見比べながら悩み続けた。

＊

ベエモットが図書館に侵入している頃。弥生の夢の中。

ここは以前にも来た、夢の中？ どうしてここに来たのだろうか？ 弥生が首をかしげていると、雲のように現れる一人の女性。年齢は三十代後半といったところか。上品でおしとやかな女性に見える。身体は黄金の光で覆われ、蛍のような灯火が身体を光らせる。女性はただ弥生に向けて微笑んでいる。

「あ、あの……。あなたは……」

弥生は女性にどうしてここにいるのか尋ねようとした。その前に女性が口を開いた。



“ムツキを、ムツキを助けてください……”

「へっ？　む、睦月さん？　どういうこと？」

ムツキという聞きなれた単語で出てきたため、動きが止まる弥生。どうして睦月さんのことを知っているのかな？

睦月さんとういう関係の人？

“ムツキが大変な目に遭ってしまっ……でも私は助けに行けない”

「助けに行けないってどういうこと……？」

弥生の問いに女性は答えた。

“私はある集団に身動きを封じられ、助けに行くことを禁止されているんです”

「それって拘束というか、捕まっていること？」

“はい、そうです。私はムツキの母で、アクアワールドの王妃をしております”

「って睦月さんのお母さん！？」

睦月さんが話していた睦月さんのお母さんが、今ここにこの人だったなんて……。

でもどうして捕まっているのだろう？

睦月の母は弥生に告げる。

“弥生さん、いえ、ラリアさん。あなたも知っているベエモットのことについて、今日はこの夢の中を通して呼ばせてもらいました”

「ベエモットってスリジエさんのお父さん？　ってどうして私のことを……！？」

弥生は睦月の母の顔を覗き込むが返答はない。

気には留めたが何事もなかったかのように話を続けた。

「あ、あの。睦月さんのお母さんはどうしてまたベエモットさんに

についてお話しただなんて……」

“ベエモットの目的がもう一つの世界と呼ばれる私達の世界、アクアワールドからです。ベエモットはアクアワールドの支配を企んでいるのです。そのためにはムツキの世界を操る力が必要なのです”

「そうなんだ……。じゃあ、ベエモットがスリジエさんに言っていた『約束』って分かりますか？」

“すみません……。そこは分かりません。ですが、ベエモットという男は本当に娘さんのことを愛してはいないと言い切れるかが問題なのです”

「それってつまり、ベエモットさんは……」

弥生は言葉に詰まった。

“どうということ？　でもスリジエさんは快く思っていなかったみたいだったし、ベエモットさんもあんまり良い印象じゃあ……”。

ふと睦月の母の身体が足元から消え始めていた。

“もうそろそろ、呪文の効果も無くなるみたいね”

「む、睦月さんのお母さん！？」

もう、夢が終わるころ！？　そんな！？　まだ、睦月さんのお母さんには聞きたいことがあったのに。

睦月の母は弥生に言葉を託す。

“弥生さん、お願いします。どうか、どうか息子のムツキを助けてあげて……”

そして睦月の母の身体はあっという間に消えてしまった。

「睦月さんのお母さん……」

弥生は睦月の母が消えた後を見つめるしかできなかった。

## 弥生と連れ去られた王子

睦月の家から五百メートル離れた公園。まだ太陽が昇り始めたばかりの早朝七時。

二匹のすずめが地面をつつき、仲良く戯れている。

冬川睦月は公園のベンチで腰掛け、睦月の右隣にはかばんが置かれてあった。

毎朝必ずこの公園により一日の気合を注入する。そして学校へと向かうのだ。

自分が一番心安らく場所だから。

心が落ち着ついたのか学校へ行こうと思い、立ち上がろうとしたときだった。

「これはこれは。『もう一つの世界』の王子ではありませんか」

川が流れるように、どこからともなく聞こえる男の声。声からすると四十代だろうか。

公園を見渡したとき、一人の男に目についた。公園には誰もいない。自分とあの男だけである。

男は睦月の視線に気づいたのか歩み寄ってくる。

睦月は顔をしかめ、眉間にしわをよせた。

「あなたですか？ 俺をもう一つの世界の王子と言ったのは」

男はあっさりうなづき、笑顔で答える。

「ええ、そうです。ずっとお会いしたいと思っていました。ムツキ王子」

「見ず知らずの人に自分の名前を言われたくはないです」

「ああ、自己紹介がまだでしたね。わたしの名前はベエモット・ムーン。気軽にベエモットさんと呼んでいただけるとうれしいですね」  
この人がベエモットだと!?

睦月は目を見開き、動きが止まった。

この人が春野が言っていたベエモット・ムーン……。

ベエモットと名乗った男はクスクスと可笑しそうに笑った。

「おやおや。急に警戒し始めましたね。そんなに警戒なさらずとも、ただのお話し合いですよ」

ベエモットの話し合いという言葉に妙に信用できない。

睦月は顔をしかめたままだった。

「話し合い？ 俺に一体何の用だ」

ベエモットは深い深呼吸で息を整えると、話を切り出した。

「あなたは以前シャルロットと手を組んでいたとお聞きました」  
どこで聞いたんだ、そんなこと。どこかで調べたかもしれんな。

「それがどうした」

「もはやそのシャルロットはこの世にはいない。代わりと言っちゃあ何ですが……」

「代わり……？」

何を切り出す気だろう。ますますあやしい。

ベエモットの口元がにやりと微笑んだ。

「私と手を組んでみませんか？」

「はあ？」

睦月は思わず素っ頓狂な声をあげ、ぽかんと口を開ける。

「どういうことですか？ どうしてまた……」

「どうしてもあなたが必要なのですよ。私どもの計画に」

「断る！ 何の事が知らないが、俺は悪に手を染めるつもりはない！」

「おやおや、そんなこと言ってもいいんですか？ あなたがもし断った場合、私どもが『預かっているあなたのお母さん』に傷をつけることもできるんですよ？」

ベエモットが母親のことまで調べ上げたことに驚いたのか、「なっ」と声をあげた睦月。

ベエモット、そこまで調べてあげたのか？ 油断できない。

睦月はベエモットを通り過ぎようと歩き出す。

「俺、学校があるんでそろそろ……」

しかしベエモットが睦月の右肩を力強くつかんだ。

「おや、まだ話は終わっていませんよ」

ベエモットの目はまるで誘拐犯のような犯罪者の目つきをしていた。

この人……！

睦月はベエモットの手を振り払うと振り返る。

「母親の事は自分で助けます。どんなことがあっても。ご心配なく！」

「何が何でも仲間になりたいところでしたが、私の要求を呑まないと……悪い子だ。仕方がありませんね。強引にでも連れて帰りましょう」

ベエモットは右手を睦月の背中に向けるとつぶやく。

「しばらくの間、眠っててください」

睦月の背中に何かが突き刺さるような衝撃が走った。

ベエモット、まさか最初からこれが目的で……。

睦月は現実意識から途切れる。そのままうつぶせで地面に倒れ伏せた。

\*

睦月がベエモットと対面している公園から、わずか百メートル付近の歩道。時刻は七時十五分。

スリジエ・ムーンが学校へ向かって歩道を歩いていた。スリジエの左側が雑貨やスーパーなどの店舗が並んでいる。

歩道の右横には車道が走り、車が忙しそうに通っている。朝起きたてのスリジエにとっては騒音しか聞こえない。歩道と車道の間

はガードレールがその間を阻んでいるように存在していた。

しかしスリジエには今歩いている風景はどうでも良かった。昨日やってきた父親・ベエモットのことで頭がいっぱいになっていたからだ。その顔は眉間にしわをよせ齒軋りしていた。まるで鬼のような形相である。

まさか昨日あの男がやってくるとは夢にも思わなかった。夢に出てきたチェリーお姉様が言っていた『あいつが来る』という意味がベエモットのことだったとは。

まずいわ……これから大変ね。

あの男は計画を成功させるためなら、自分の願いのためなら何でもやる男。周りがどうなろうと知ったことではないと思っている奴だ。

もし、あの男の狙いが春野弥生の夢石継承の取り消しと、冬川君目当てだとしたら集中的にその二人を襲ってくる。自分がベエモットにやられるならまだしも、春野弥生や冬川君がベエモットに襲われるのなら話は別だ。春野弥生とは恋のライバルだが、それどころではない。

何か対策を考えておかないとまずすぎる。でもあの男に勝てる秘策なんて……。

スリジエの目線が店舗から公園に変わった。

こんな場所に公園なんて珍しいわ。

スリジエが公園内を覗き込んだとき、驚くべき光景を目にしてしまった。

ベエモットが気絶している睦月を、米俵のように担いでいる場面である。何故冬川君が気絶しているかは知らないが、おそらくあれもベエモットの仕業だろう。

あの男、冬川君を連れて行く気ね！

ベエモットが何をしようとするかなんてひと目で分かる。まずい！あのままじゃ、冬川君が大変なことに……！

スリジエが迷っているうちに、ベエモットは睦月を連れて行こうと歩き始めている。

「まずい！とめなければ！」

移動しようとするベエモットが目に入ると止めに掛かった。

「ちょっと！まちなさい、ベエモット！」

走ってくるスリジエに気づき、ベエモットの足が止まる。そしてスリジエをものめずらしそうな目で凝視した。

「おや、これはスリジエか。どうしたんだい、こんなところにいて」「これはこっちのセリフよ！冬川君をどうするつもりよ！」

「ほお。王子の名前は『冬川』でしたか。下の名前を合わせて『冬川睦月』……おかげで人間界で名乗っている名前が判明できました。やはりスリジエは私の奴隷にふさわしい」

スリジエは言うてはいけないこと言うてしまったことに気づく。はっと口をつぐみあせりをにじませる。

しかしいまさら後悔しても遅い。冬川君の名前をベエモットの耳に届いてしまった以上、冬川君をベエモットから取り戻す方法を考えるしかない。

「残念だけど私はあんたの奴隷に戻る気はないわ！一生ね！私はただ残り限られた時間を私が好きなようにすごさせてもらう、ただそれだけよ！」

スリジエは闇の魔法を魔方陣を浮かび上がらせて発動させると、ブラックホールに似た球体を複数生み出す。夜の海の中のような深い黒。

「ブラックパスト！」

スリジエがそう唱えた瞬間、一斉にベエモットに集中して飛び掛る。

球体がベエモットにあとわずかに差し掛かった。だがしかし。

ベエモットは苦にする事なく球体すべてとめる。球体は圧力を加えられるとそのままはじけとんだ。

スリジエから「チッ」という舌打ちが漏れる。

やっぱり駄目か。やっぱり父親には勝てないか。私が覚えている魔法はチェリーお姉様から教わったものもあるが、大半はあの父親から教わったもの。

勝てるはずがない。でもここであきらめると冬川君が……。

スリジエが考えていると、ベエモットからの反撃が来た。スリジエが発動させた同じ魔法を倍返しにして発動させたのだ。

まずい、まともに当たると……！

よけようと身体を動かそうとする。だが、昨日の戦いのダメージが残っているためか思う様に動けない。

スリジエはよける事もできず、左わき腹に球体が直撃。スリジエの身体は吹き飛ばされ、地面にたたきつけられた。スリジエが気を失いかけたとき、わずかに聞こえた父親の声。

「スリジエ。たとえ娘のお前でも私どもの計画を邪魔をしてはいけない。この王子は私どもの計画にぜひとも必要なのね。かつでシヤルロットが王子を必要だったように」

スリジエは目を開け体を起こしたが、その時にはもうベエモットと睦月の姿は見当たらない。

スリジエの目に涙が浮かび上がる。涙は噴水のように溢れ出し、止まる事は無い。

ベエモットから冬川君を助ける事、できなかった……。

公園にはスリジエの泣く声と嗚咽が響いているだけだった。



少し時間を戻して時刻は七時十五分。春野弥生の自宅。

弥生は何かを感じ取ったかのように目が覚める。ベットから起き上がり、ベットの上に不安定に置かれた目覚まし時計を手にした。

まだ七時十五分、か。

弥生の中に胸騒ぎという不安が生まれ始める。なんだろう、この胸騒ぎは。

夢の中で言っていた睦月のお母さんの言葉が頭から離れない。

“弥生さん、お願いします。どうか、どうか息子のムツキを助けてあげて……”

まるで睦月さんに何か事件にでも巻き込まれるような言葉だった。しかしそれが嘘とは思えない。

しかも睦月さんのお母さんは私のことを知っていた……そのことも気になる。

睦月さん、大丈夫かなあ……。

睦月さんの家まで確認しに行ったほうがいいかな？

弥生は躊躇すると、大きく横に首を振った。

いや、行っても家から出て行った後だったら意味ないし……。

弥生の頭の中に不安がよぎっていく。不安は燃え盛る炎のように強くなる一方。

弥生でさえもとめることはできなくなっていた。

気がつくや弥生の右手には携帯が握られている。電話した方がよいということなのだろうか。

弥生はアドレス帳の中から睦月の番号を選び出すと、ボタンを押した。

『トゥルルルル』という電話の呼び鈴音が耳の中に入ってくる。

睦月が電話に出て欲しいという思いもあるが、正直言えば出て欲しくないという思いもある。

だが。

五回呼び鈴音が鳴っても睦月は出ない。睦月は電話すると必ず出てくれる。

出ないなんてやつぱり何かあったのだろうか。携帯をパチンと静かに閉じた。

睦月さんの家に行ってみようかな……いやいや！　まず睦月さんの家、どこにあるか知らないでしょう私！

もしかして、私が電話したの気づいていないだけかも！　もう一回電話してみよう！

携帯を再びあけると睦月にもう一度かけてみる。しかし睦月が出ることはない。

無意識にため息がもれると、弥生はあることを思い出す。

「そうだ！　私、学校があるんだ！　すっかり忘れてた！」

睦月さんのことばかり考えてて、すっかり学校のこと頭に入っ  
てなかったよ！

弥生は慌てて学校に行くための身支度を始める。顔を洗い、歯を磨き、パジャマを着替え、ブラシで髪をとく。

髪を高めめの位置で二つ結びにすると、急いで朝食の準備。

ま、間に合うかな、学校。今の時間は……七時四十五分！？　うそでしょー！

がーんと固まると、首を横に振った。

いやいや、睦月さんの心配よりまず自分の心配でしょ！

弥生の通う学校では八時までに学校に着かないとそれ以降は遅刻扱いになってしまうのだ。

弥生は心の中で睦月が心配ながらも、自分のことで手がいっぱいいっぱいだった。

とある森の中。朝日がまぶしい朝七時半。森からは草が生い茂り、木には緑のこけが生える。そして森から朝日が漏れ幻想的な雰囲気を出していた。隠れるにはうってつけの秘密の場所である。

「ベエモット、王子の件はどうなった」

ひざまずくベエモットの前に、映し出された男がベエモットに語りかける。

ベエモットはほくそ笑み、気絶した睦月を映像の男に見せた。

「はい、この通り連れ去りに成功しました。あとは扉の鍵のみとなります」

男は満足にうなづくと目を輝かせる。

「そうか。よくやったベエモット。これで一步計画に近づいた訳か」  
ベエモットが話しているのは黒の人魚族の幹部。

「それで、このあとのことなんですが、計画は進めてもよろしいのでしょうか？」

ベエモットの問いに、幹部はうなづきながら答えた。

「ああ、このまま計画を進めてくれ。あとは扉の鍵だが、場所はどう特定済みだ。あとは指示通りにやればいい」

「はい、かしこまりました。では、計画通りに進めていきます。そして扉の鍵が入手次第、もう一つの世界へと直行いたします」

「頼んだぞ、ベエモット」

ベエモットの前から映像が溶けるように消えていった。

「さて、と……」

ベエモットは地面に気絶する睦月を見おろす。

王子にはこれから一仕事してもらいますよ、我らの計画のために……。

王子の力は夢石があって発動するもの。言い方を変えれば最強の力となりうる。

たとえ王子が拒否しても、こちらには切り札があることをお忘れなく、睦月王子。

ベエモットの口元が意味ありげに笑う。空を見上げると睦月を抱えて飛び去って行った。

\*

海堂町にある海堂中学校の校長室。時刻は朝七時半。

校長が毎日の日課となっている花瓶の水を換える仕事。これを必ず行わないと一日が始まらないと言ってもいいほど。

さて、今日も元気いっぱいの子の生徒の顔が見られますなあ。

笑顔で花瓶に刺してあった花を取り出した。テーブルの上に敷かれた新聞紙に花を乗せた時である。

ガラスが割れるような音が校長室中に伝わった。床には散らばったガラスの破片と一緒に一通の手紙が落ちていた。

校長はおそろおそろ手紙を手にとると、封を開けてみた。

中には一枚の紙が四つ折にして入っている。そしてもう一つは何かのカードだ。

四つ折の紙になにやら書かれてあるようだ。

『ごきげんよう、海堂中学校の校長先生。

覚えてますかな？ ベエモットです。

今日は校長先生にお願いがあつてこの手紙を出しました。

校長が持つておられる「もう一つの世界」を開ける扉の鍵、しばらくの間、私に鍵を貸していただきたい。

もちろん、用が終わればすぐさまお返しいたします。

もしこの願いを聞かないというのであれば、海堂中学校を校舎ごと破壊します。

中には生徒さんたちがいらっしゃるのでしょうか？

私が何を言っているか、わかりますな？

願いを聞き入れるというのであれば、同封されているカードに鍵をつけてもらいたい。

すぐさま私の元へと届くでしょう。

良い返事を待ってますよ。

ベエモットより』

こ、これは………もしや！ 脅迫状！？

ベエモットとは昨日の……。

た、大変だ！ 急いで先生方に相談しなくては！

校長は震えながら急いで隣の職員室に駆け込んだのだった。

## 弥生ともう一つの世界への扉

海堂町にある海堂中学校、3年1組の教室。八時のチャイムが学校中に響き渡る頃。

スリジエが落ち込んだ雰囲気では黒板側の入り口からはいる。各席にはクラスメートがそれぞれ座り、SHRが始まるのを待ちわびていた。この時間ですでにクラスメートが席でおとなしくしているのは初めて見た気がする。

いつもならこの時間は騒いでうるさいくらいなのに。何かあるのだろうか。抜き打ちテストでもあるのだろうか。

ま、抜き打ちテストがあっても満点取れる自信はあるけどね。

自信に満ち溢れた顔をしながら自分の席につく。スリジエの周りの席に座っている男子たちがスリジエを見つめている。その表情はうつとりと頬を赤らめ、鼻の下を伸ばしているほど。しかしスリジエはそのことには気がついてはいない。

しかし、それにしても……。

席についたとたん、表情を曇らせる。

ベエモットから冬川君を助け出す事ができなかったわ。ベエモットの計画は刻々と進んでいってるというのに。

やっぱり、仇に集中しすぎてベエモットがこの町にやってくるということを気づいていなかったのが悪いのかしら？ でも、いまさら後悔しても遅い。これからベエモットの計画を止める方法を考えなくては。

まずはやはり冬川君奪還から先ね。ベエモットにとって冬川君は最重要キーであるには間違いないのだから。

その時、スピーカーから放送が流れた。

『全校生徒に伝えます！ 今から全校生徒は自習とします！ 繰り返します。今から授業は……』

自習！？ 何かあったのだろうか？ まさか！ ベエモットが何

かしたのか！？

何をしたかはわからないが、探っておいた方がいいだろうか。ベエモットが何かするとすれば校長ぐらいだろう。それか担任か。とにかく直接聞いてみればわかることだが。

その時スリジエが入った入り口から弥生が入ってきた。今来たようだ。相変わらず危機管理がない女だ。だがその表情は悲しそうな曇った表情に見える。何かあったのか。

あったとすれば冬川君絡みに決まっているが。

もしかして、冬川君がベエモットに連れ去られたのを知って？

スリジエはしばらく考え込むが、あきらめたような顔つきで横に首を振った。

いや、あの場に春野弥生はいなかった。冬川君の携帯はベエモットにより切られているだろうから、春野弥生は冬川君がベエモットに連れ去られたことは知らないはず。

もしかすると、冬川君のことが心配になって携帯にかけてみたが、出ずに不安になっているといったところか。

そういえば……！

何かを思い出したような表情に変わると、弥生の席をちら見した。確か、もう一つの世界に通ずる扉を開けるには、白の人魚族の者が一緒にないと開かないと聞いたことがある。

春野弥生は北の海出身。北の海は白の人魚族の血を引いている者が住んでいる。

春野弥生を連れていけば……。

スリジエがぐくりとつばを飲み込んだのとほぼ同時に、担任が教室に入ってくる。

表情は陰しく、まるで怒った鬼のようだ。やはり何かあったのだろう。

でなければあんな表情するはずがない。

どうする……？　ここは一時休戦して春野弥生と手を組むか？

スリジエの中にためらいと後ろめたさがぶつかり、さらに迷い込

む。

しかし……姉の仇と手を組むなんてしたくない。でもこのままじゃあ、冬川君がベエモットの餌食になってしまう。それは避けたい。悩みに悩んだ結果、ある決断を下す。

ええい！ もう、こうなったら強行で春野弥生を連れていく！

スリジエは立ち上がり、椅子がぐらぐらと揺れだす。弥生の席へ直行すると言。

「荒川先生っ！ 私と春野さん、具合が悪いので早退します！」

スリジエ以外の教室にいる全員が口をあけたままぽかんとした。もちろん当の弥生も口を開けたまま動かない。

荒川先生があっけにとられたまま口を開く。

「い、今……来たばかりだが、大丈夫か……？」

「はいっ！ 具合が良くなったらまたすぐにでも来ます！」

「そ、そうか。わかった……」

荒川先生はうなづくと出席簿を開き、何かを書き込む。

スリジエは弥生の左手首をつかむとそのままひっぱって歩き出す。

弥生は頭の中で混乱したまま連れ去れることになった。

\*

睦月の故郷・もう一つの世界 城の王座の間

赤の生地が目立つ王座に座っている国王。頭には国王を示す、赤くきらびやかな王冠。あごには白いひげを生やし、おなかが出ている肥満体型。

国王の手には家族三人が写った写真が両手にある。写真には国王である自分と、妻である王妃。そして一人息子の王子。息子は『海堂町に異変が起きた』とかどうとか言っ、もう一つの世界から出て行ってしまった。



「終わったらすぐ戻るから、安心して待つてほしい」

と言いついて行ったのだが、早くその時が来ないか待ち遠しいのだ。

そのため、毎日三回以上は写真を見ないと落ち着かない。

「ああ……我が息子よ。いつになったら帰ってきてくれるのだ。父さんは待ちきれないぞ」

はあとため息がもれると、再び写真に視線を戻す。

やっぱりうちの息子はかわいいなあ。世界一かわいい！

「こ、国王さま！ た、たたたた、大変です！」

駆け足でやってきた大臣に邪魔され、国王はむすつと頬を膨らせた。

「なんじゃ。わしの幸せのひと時を邪魔するなど……許せん！」

国王の手から剣が現れるのを目撃すると、大臣は慌てて頭を下げる。

「そ、それは謝ります！ そんなことよりも、大変なんです！」

「そつ、そんなこととはなんじゃ！ そんなこととは！」

「すみません！ ですが……突然男が城に乱入……」

大臣の話を聞かずに国王は言葉を発す。

「その男ってなんだ！ 誰もいないじゃないか！」

「その男というのは、わたしのことでないでしょうか」

国王と大臣が後ろを振り返ると、いつの間にか一人の男が立っている。

「貴様はベエモット！ なぜおぬしがここにおる！ 貴様にはここに来られないよう、術をかけたはずだ！」

もう一つの世界をさがせた男・ベエモットそのだった。

ベエモットが国王たちに向けて笑顔で語る。

「この子のおかげで術をかけられても入ることができたのですよ」

ベエモットが出現させたのは透明のカプセルに入れられた、この世界の王子・睦月だ。カプセルは操られているように宙に浮いていた。

「む、睦月か!？」

「王子!」

国王と大臣は宙に浮くカプセルを見上げて、目を丸くした。数回パチパチを拍子抜けした瞬きをする。

国王が我を取り戻すと、カプセルにめがけて走り出す。

「我が息子よ! 今、助けてやるぞ!」

「こ、国王さま! 無茶です!」

大臣の忠告も聞かずベエモットに突進していく国王。カプセルに手を伸ばそうとした時だった。

ベエモットは腹部に拳の一撃を加える。一撃を加えられたことで国王の足元がふらつく。

床に手をつく国王を見下げながらつぶやいた。

「困るんですよ。王子を取り戻そうとされちゃあ。今大事な計画を進めているんですから」

「大事な……計画、だと? 我が息子をどうするのだ!」

「このアクアワールドの支配に王子の能力が必要なですよ、国王」  
「なんだと!？」

「なので……王子に何かされたくなければ、おとなしくその王冠を渡してもらいたい」

王冠を渡すということは、世界を自分に渡せと言っているようなもの。

やっと手に入れた国王の座を、明け渡すなどできるか!

「断る! この王冠を渡すなど断固できん!」

「それは……支配欲からですか? 国王」

「貴様に言われたくはない! 自分の子供を愛していない父親などに!」

国王に指をさされたベエモットが、落胆のため息をもらした。

「そう、ですか。ならば、仕方ありませんね……」

ぱちんと指を鳴らしたとたん、城の兵隊が整列して現れる。

「この者たちを牢屋に入れておいてください」

「はっ！ かしこまりました、ベエモット様！」

くるりと国王と大臣に身体を向ける兵隊達。

ベエモットはその場から去ろうとする。

「わたしはやることがあるのであとはまかせましたよ」

宙に浮いていたカプセルも存在しない。ベエモットが隠したのだろ  
うか。

何はともあれ、あの男は何を考えているのだ。城の兵まで従えて  
……。  
城の兵に詰め寄られながら、悔しそうに歯軋りを立てる国王だっ  
た。

\*

海堂町にある海堂中学校、校長室。八時十五分を回った頃。

弥生はスリジエにつれられて、校長室に来ていた。

「あ、あの〜スリジエさん、どうしてまた校長室に？ってというか私、  
具合なんて悪くな……」

しかしスリジエがすべてを言わせずしゃべる。

「うるさいわね。ごちゃごちゃ言わず、黙って私についてくればい  
いのよ」

「で、でも、校長室に何の用で一体……」

「入ればわかるわよ」

スリジエの手が校長室のドアノブにさしかかった。もう片方の手  
はドアをノックする。

「失礼します、校長先生。スリジエです。入ってもよろしいでしょ  
うか？」

「ああ……」と校長のか細い返事がドア越しに聞こえた。

スリジエがドアを開け、部屋の中へと入っていく。弥生も遅れな

いよう、あとをついていった。

そこには青ざめた表情でソファに座る、校長先生の姿がある。スーツはシックな黒スーツだが、表情がそのスーツの色に同化しているようだ。

いつもは笑顔が絶えない校長先生のはず。なのにこんなに落ち込んでいる校長先生、初めてみた……。

弥生は右隣のスリジエを確認するかのよう横目する。スリジエも弥生と同様、驚きを隠せないようだ。視線を校長に戻すと話を切り出す。

「あの、校長先生……一体何があったんですか？」

校長先生は一旦唇をかねていたが、ためらいながらも口を開いた。「脅迫状が届いたんだよ……。昨日会ったベエモットって人から」

「ええ！？」

弥生とスリジエは同時に声をあげる。スリジエもはじめて知っただらしい。

スリジエが驚きが消えないまま校長に話を問いかける。

「一体何があったんですか！ 脅迫状ってどんな内容だったんですか！」

「何故脅迫状が送られてきたかは知らないが、今朝、私が持っている「もう一つの世界」の鍵を貸してほしいと。要求に応じなければ海堂中学校を校舎ごと破壊すると書いてあったんだ……。何故こんな事をするのかさっぱりわからなくてね」

校長は頭を抱え考えこむように両手で髪をくしゃくしゃにする。相当困り果てているようだ。

スリジエはその話を聞いてか、ある話を切り出す。

「今朝……冬川君を見かけたんです。そこではベエモットが冬川君を気絶させ、連れ去ろうとする場面だったんです。私は、私は止めることができません……」

睦月さんが……ベエモットさんに連れ去られた？ 一体、どういうこと？

「父は言っていました。「計画のために王子が必要なのだ」と。もしかすると、校長に送られてきたという脅迫状、父の計画になんらか関係あるのだと思います」

スリジエさんのこんな表情をするの初めてみた……。

スリジエの目には涙を浮かべ、歯を食いしばって悔しそうにする。「父は自分の願いのためならば、なんでもする男です。何をしでかすかわかりません。その前に、私が止めます！　なので……」

スリジエは一步前へ踏み出し、一言。

「もう一つの世界への行き方、知っているなら教えてください！」

「スリジエさん……」

弥生は隣で聞いていて心が打たれたのか、感慨深そうにスリジエを見つめる。

そして弥生もまた一步前に踏み出すと頭を下げた。

「私からもお願いします！　校長先生、今は校長先生の力が必要なんです！　睦月さんを助けるためにも！　校長先生、力を貸してください！」

「だがしかし……」

ためらう校長に弥生とスリジエは、ここぞとばかりに頼み込んだ。

「校長先生、お願いします！」

息のあった二人を見てか校長は口元を緩ませる。

「……わかったよ。君達の熱意には負けたよ。さすが人魚国のプリンセスたちだ」

弥生とスリジエは顔を上げ、互いの顔を見合わせた。二人がひそひそ話をはじめめる。

「あんた……自分の正体、校長にばらした？」

「う、ううん！　一度も言ったことないよ！　スリジエさんは？」

「言っていないわよ！　そんなの、当たり前でしょ！　正体ばらしたら泡になるのよ！　泡に！」

「じゃ、じゃあ校長先生はなんで……」

二人は校長の顔を疑いふかそうに見つめた。

弥生は耐え切れず校長におそろおそろ質問をする。

「あ、あのー校長先生。き、聞きたいことが……あつて。どうして、私達の正体を知って……」

しかし校長はただ笑顔で答えるだけ。何も話そうとはしない。

代わりにもう一つの世界について話し始めた。

「そういえば、もう一つの世界の扉について聞きたかったんですよ？ 私が知っている限りをお話しましょう」

「は、はあ……」

弥生もスリジエも困り果てたような顔でうなづく。しかし腑に落ちない感情が抜けない。

こ、これで……いいんだよね？

弥生は顔を引きつらせながら校長の話に耳を傾ける。

校長が一度ソファから離れると、大きな書斎の引き出しから一つの鍵を取り出す。引き出しを閉めると弥生たちの前にやってきて、鍵を渡した。銀色のどこにでもありそうな鍵。天井の明かりで鍵が星のようにきらめく。どこもおかしいところはない。しかし鍵には何かの紋章が刻まれてはいるが、弥生にはわからない。なにせもう一つの世界自体、どんな場所なのか知らないため紋章もどんなものか知らないのだ。もう一つの世界はその名の通りもう一つ世界が存在しているかもしれないという理由で付けられた通称。弥生も含めて誰もその世界に足を踏み込んだ事はないのである。

「あ、あの……これは、もしかして……」

二人が校長の顔と鍵を見比べるのに対し、校長は当然のごとくうなづいた。

「ああ、そつだ。これが……ベエモットさんが欲しがっていた鍵の一つは鍵は二つあつてな。もし誰かに複製されないように、わざと同じものを二つ用意されてある」

「へえー、そうなんですな」

弥生は興味ぶかそうな声をあげるとうなづいた。

しかし校長は話すのに夢中で弥生の反応に気づかない。

「しかし……迷っているうちにしびれを切らしたのか、ベエモットさんが現れて……もう一つの鍵は盗まれてしまったが。ところできみたちは扉を開ける呪文や条件は知っているかね？」

「い、いえ……知りません」

弥生は横に首を振るが、スリジエは迷いながらも口にする。

「扉を開ける呪文は知りませんが……扉を開けるための条件なら知ってます」

「ほお……さすがスリジエさんだ。して、その条件とは」

「はい。もう一つの世界と関係深かった北の海の人魚国の者を連れていくことが条件だと聞いています」

そ、そうなの！？ そんなの、初めて聞いたよ！

北の海の人魚国ではそんな話は一つもしていなかったのに……いや、外部に漏れてはいけなないと、お父様たちが口止めしていたのかもしれない。

「なので、春野弥生さんを連れていけば……扉が開かれる準備は整うかと」

「確かに。だがそれだけじゃあ、扉は開かんぞ」

スリジエが「えっ」と声を漏らした。下を向いていた弥生も思わず校長の顔を見上げる。

校長は話を続ける。

「もう一つ、必要なことがある。それは……北の海の人魚国の者が、『聖なる声』で『聖なる歌』を歌うことなのだ」

「聖なる声で……」

「聖なる歌を歌うこと……？」

弥生とスリジエはまだばかんとした顔で校長を見つめたままだ。

こ、校長がそんなことを知っていたなんて……知らなかった。

「そうだ。さすれば、あとはその鍵を扉に向かってかざせば、扉は開かれるだろう。代々いざというときに人魚国のプリンセスたちに伝えるのが、私達の役目だったが……何とか果たすことができた」

こ、校長先生ってほんとに一体何者？

「早く行きなさい、二人とも。今ちょうど扉が現れているが、扉が現れている時間は限られている。急いで向かわないといつ現れるかはわからない。扉が消える前に行くんだ！」

「は、はい！」

弥生とスリジエは力強くうなづく走り出し、校長室を出る。

弥生は一度振り向くと笑顔で会釈した。

「校長先生、いろいろありがとうございます！ 失礼しました！」  
身体の向きを戻すとスリジエの後を追いつ始める。

弥生とスリジエは弥生が通る通学路の商店街を、全速力で駆け抜けていた。時刻は八時二五分。

商店街を歩くお年寄りたちはあっけに取られた顔で弥生たちを見る。

「まさか、校長先生がもう一つの世界の扉を守る『番人』だったとはね……」

走りながらつぶやくスリジエに、弥生がきょとんとした声で質問する。

「番人……？ 番人ってあの番人？」

「それしかないでしょ、普通番人って言ったら！」

スリジエに怒鳴られて、弥生は「ごめんなさい……」と小言で話す。

それでも話を変え、スリジエの機嫌をとろうとしてみた。

「でも『聖なる歌』について聞き損ねちゃった。どうしよう……」

「それは大丈夫よ。それは私達しか知らない歌でなきゃ、『聖なる歌』なんて呼ばれないわ」

「おおー！ 確かに」

弥生は納得したような顔でうなづく。

スリジエはやっぱり頭がいいなあ……。私、そこまで頭になかった



よ。

「それに扉は人々が一番多く集まる場所に現れる。現れる場所は海堂町で一番大きな図書館、海堂図書館ね」

海堂……図書館。

私はスリジエさんのように頭が良くて、魔法も上手く使いこなせないけど、今は私にやれることがある。睦月さんを助けるため、できる限りことをやってみせる！ たとえ、ベエモットが強かったとしても、私は負けない。

取り戻して見せる！ 睦月さんを！

弥生はスリジエの後を追いつながら、もう一つの世界に通ずる扉を目指した。

\*

弥生たちがもう一つの世界に通ずる扉を目指している頃。海堂中学校の校長室。

あの子たちは無事、扉の場所までたどり着けるだろうか……。

校長は弥生たちが部屋から出て行ったあと、ずっと窓を見つめたままたっていた。

たとえ番人であっても扉の場所を教えることだけは許されない。これも試練の一つだからだ。彼女達が自分で見つけないと扉は現れない。たとえ人魚国のプリンセスたちであっても。

しかしあの子達なら大丈夫だろう。あの子達は芯が強い。どんな困難にでも立ち向かう勇気がある。

きっともう一つの世界の王子を救ってくれるだろう。

そこに弥生たちの担任である荒川先生が、ドアをノックしてから入ってきた。

「校長先生、じつは……」

校長は荒川先生に体を向けると、すべて知っているような顔でしゃべる。

「大丈夫だ。彼女たちを信じたまえ。彼女たちは仮には人魚国の王女だ。彼女達ならきつと救ってくれる。信じて待つてよう」

「校長先生、ですが。スリジエ王女様には……もう、時間が残されていないせん」

荒川先生は悔しそうに歯軋りを立てている。感情を抑えきれないようだ。

荒川先生をなだめるように校長が話を続けた。

「……それも神が定めた運命だろう。私達が介入することはできません。たとえ番人であつたとしても」

「校長………しかし！」

「大丈夫だ。夢石の継承者であるラリア王女様もいる。彼女ならばきつとスリジエ王女様を守ってくれるだろう。夢石と共に」

「校長………」

「だから、信じて待とうじゃないか。二人の王女様たちを」

校長は荒川先生をなだめると、体を窓側にむけ窓の外に映る空を見守っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6409w/>

---

弥生ともう一つの世界

2011年11月24日12時49分発行